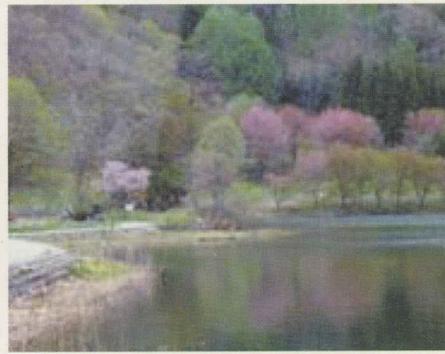


2006 第80回 強行遠足記念誌

歩け、精根のかぎり



山梨県立甲府第一高等学校

強行遠足 アーカイブ

東京方面コース 第1回 1924年(大正13年)



「第10代江口俊博校長」
強行遠足を始めた名校長



「甲府中学正門」
当時は甲府(舞鶴)城中にあった



「甲府中学正門」東より望む



「甲府中学校舎」



「笹子峠の矢立の杉」笹子峠は
このコース中、最大の難所であった



「下花咲本陣跡」最長到達地は更に先の
「上野原宿」、江口校長も生徒と歩かれた

松本方面コース 第2～3回 1925～1926年(大正14～15年)



「松本城」(明治末～大正初年)

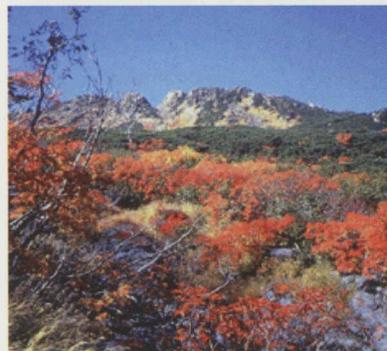


「蕨木宿」信州に入って最初の宿場町。強行遠足の
時期、柿の実が鈴なりであった(昭和18年)



「強行遠足記録」大正15年より現存する

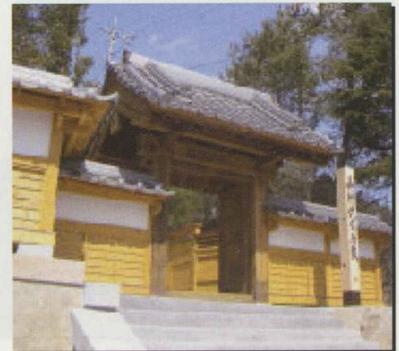
木曽福島・松本方面コース 第4～5回 1927～1928年(昭和2～3年)



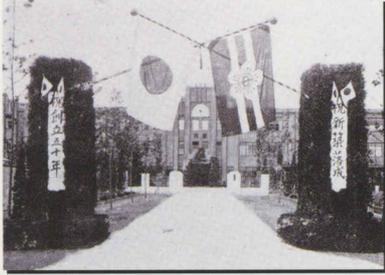
「木曽の御嶽山」



「木曽福島宿」



「木曽代官屋敷跡」



「甲府中学」美咲に新築移転(昭和3年)。写真は創立50周年、校舎新築落成記念の校門前アーチ(昭和5年)



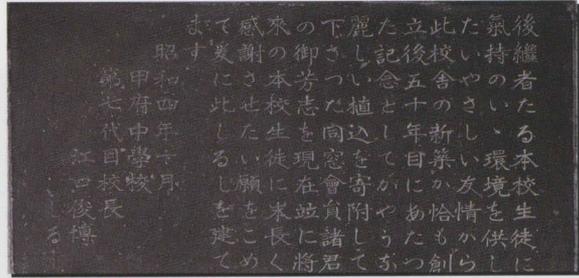
「講堂」堂々たる建築(昭和4年)



「賛天地之化育」江口校長の選



「庭園記念碑」(昭和4年)



「碑文」江口校長のやさしさがにじみ出ている

信濃大町方面コース 第6～36回 1929～1961年(昭和4～36年)



「大町のコスモス」



「美しい青木湖と中綱湖(手前)」



「中綱湖」岩間孝吉氏の到達した「築場」駅前に広がる



「青木湖より白馬三山を望む」



「青木湖の紅葉」



「松本検印所トップ到着」トップ到着の大代千治氏(中央：昭和11年11月4日)



「松本到着者」伊藤忠一(左端)、小尾鳩三(右端)先生らの出迎えを受ける(昭和11年)

第80回 強行遠足 グラフティ



「松本検印所」(昭和18年)



「当時の学生」(昭和18年)



「麦茶で給水」(小野～辰野)(昭和18年)



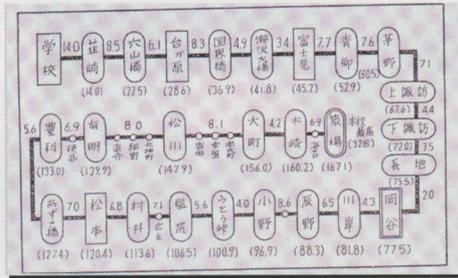
「出発前」戦後も伝統は続く(昭和21年)



「女子学生も応援」韭崎市穴山橋付近(昭和25年)



「岩間孝吉氏」最高到達距離記録者(昭和32年)



「検印カード」



「昭和30年代の松本駅」モータリゼーションの進行で、信濃大町方面コースも変更へ

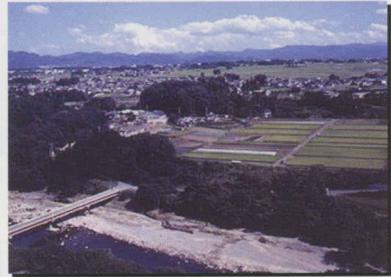
小諸方面コース 第37～80回 1962～2006年(昭和37～平成18年)



「小諸城三の門」



「浅間山と田園」



「千曲川と小諸」



「浅間山と小諸市街地」



「小諸・佐久平一帯の眺望」



「小諸城大手門」



「出発前」校舎にはクラスの応援幕が見える
(昭和53年)



「小諸必着」(昭和53年)



「いざ出発」女子学生の見送りに受けて
(昭和54年)



「清里高原を走る小海線」



「小海到着」(昭和54年)



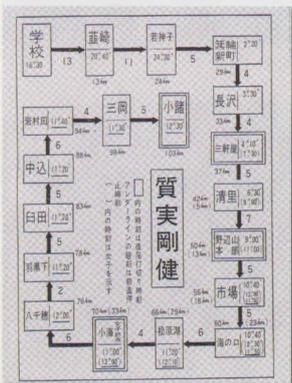
「野辺山の名コック長、岡部勝男氏」
(昭和54年)



「白田のおばちゃんとお孫さん」(昭和54年)



「えらかったじゃろ、さあ食べなさい」やさしい白田三反田のおばちゃんたち(昭和54年)



「検印カード」



「白田のおばちゃん」(昭和54年)



「三岡の柏木宇三郎氏(中央)」気骨ある人情家であった
(昭和54年)

第80回 強行遠足 グラフティ



力を結集、協力者合同会議全体会



安全への入念な打ち合わせ、協力者合同会議 高根救護検印所



強行遠足出発式(10月14日)：岩間孝吉さんの激励



強行遠足出発式：北見北斗高校来校



強行遠足出発式：生徒会長田辺翔君の力強い宣誓



強行遠足出発式：北見北斗高校生徒を感動させた応援団



出発の号砲：闇をつんざく



新たなる未知の領域を目指して出発



PTA会長、同窓会長も時の熟したことを告げる



払暁の甲斐市周辺：協力者は辻辻に立つ



闇の中に目指す光を見つめて



登美の坂はまだ物語の序章



今井の中央線下：同窓会幹部も激励



コスモス争う街道を駆け抜ける



北見北斗と一高生の交流が続く



女子出発 号砲と共に



和気藹々 そうは言っても速さは負けない友達同士



のどかな北巨摩を歩きぬく

北見北斗高校との交流 (05 北海道北見北斗高校にて)



若林救護検印所



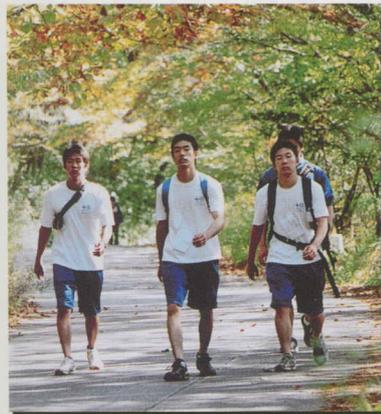
豊かな収穫後の田畑を、明るい若者が行く



いずみ荘前 疲労は容赦なく



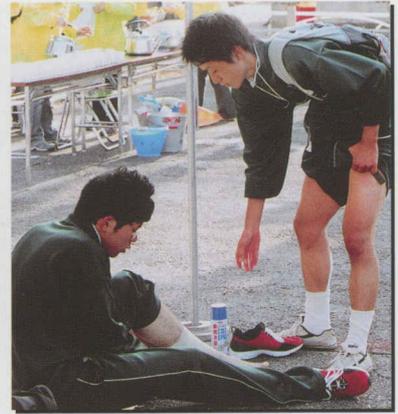
大泉救護検印所 この奥には温泉が沸くんだけど



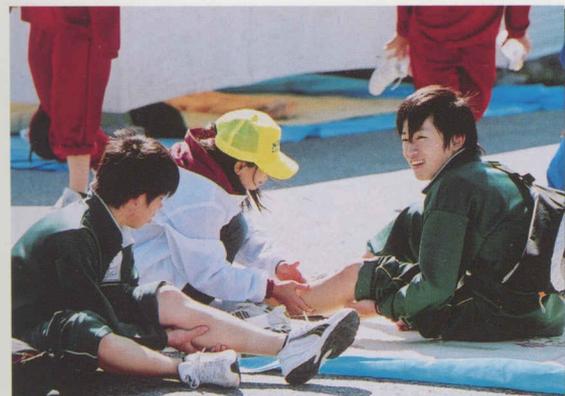
無言



語らい



俺も薬塗るよ



母の手のように温かい ありがとう



安全への願いは強く



清里学校寮近く：頑張らなきゃ



まさば公園：吹奏楽部OB・OG魂の演奏による激励



水をもっと下さい



木の葉の健やかさが目に染みる



もう足の裏が自分のものではない



ゴールを目指して…それは「野辺山」の3文字



検印所の旗を曲がれば



青春のゴールは必ずそこに待っている



それぞれのゴール



のどにしみいる野辺山のしじみ汁



今年も一緒に飲めたね たたえ合う友

北見北斗高校との交流（'05 北海道北見北斗高校にて）



男子 1位 依田悠亮君



女子 1位 山口まなさん



男子 22位 市井貴裕君



女子 8位 原彩香さん

北見北斗高校との交流（'06 甲府第一高校にて）



強行遠足出発式 北見北斗校長先生をはじめとする皆さん



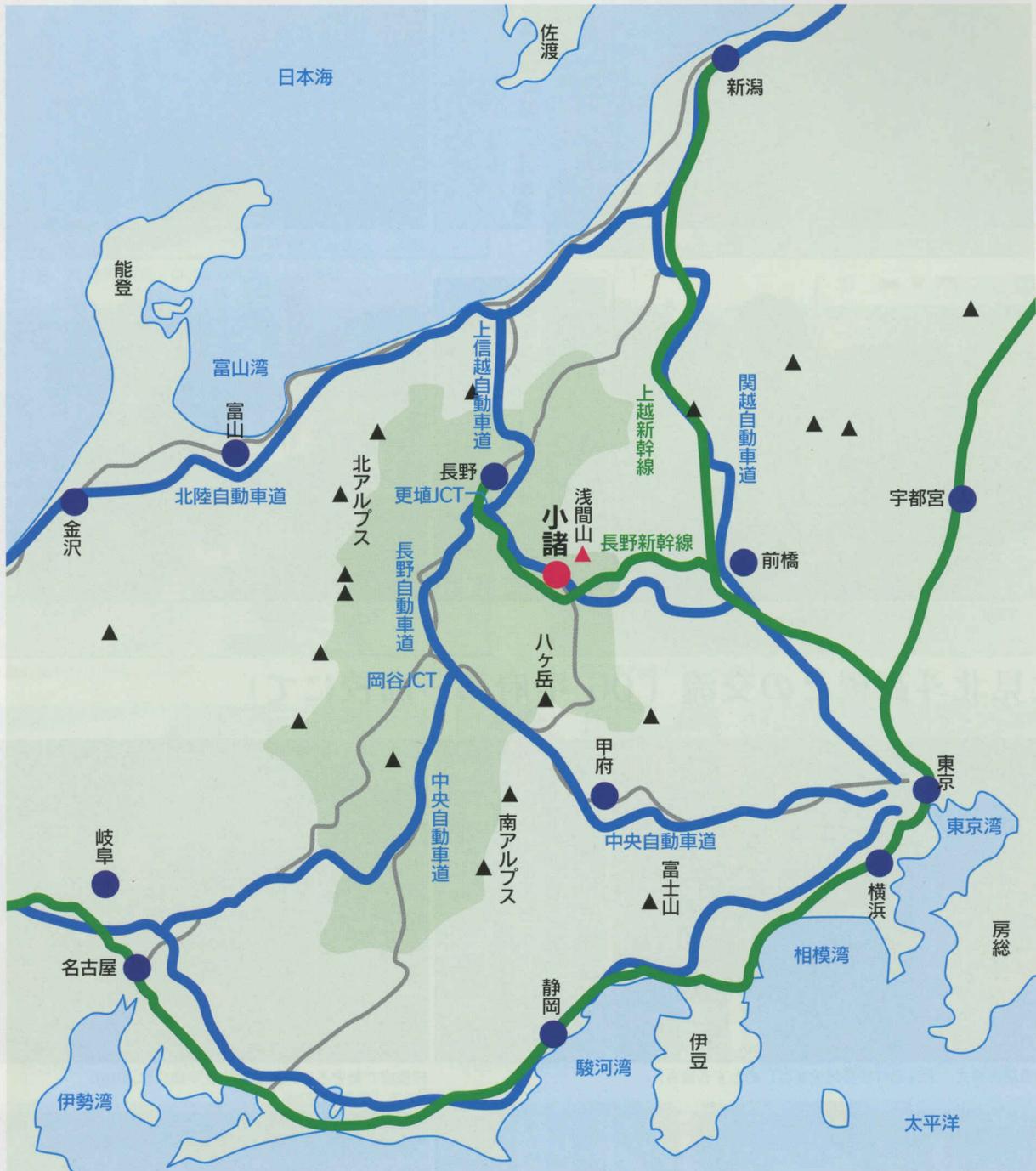
校長室で勢ぞろいの勇者達：左手奥には温山の Boys, be ambitious!



女子で健闘した辻さん



男子大健闘の秋山君



0 100 200 300 400 500 km

目 次

強行遠足 アーカイブ

第80回 強行遠足 グラフティ

北海道北見北斗高校との交流

伝統に息づく強行遠足	校 長	高瀬孝人	1
感動の第80回強行遠足	同窓会会長	望月操三	2
強行遠足への想い	PTA会長	武内有二	3
第80回強行遠足によせて			
	PTA保健体育委員長	飯窪一徳	4
小諸へのあこがれ	生徒自治会会長	田辺 翔	5
強行遠足の沿革と意義			6
強行遠足の概要			8
第80回強行遠足実施状況			19
『道中こぼれ話』			21
対談『今、語る167.1kmへの道』			29
追想『ありがとう、白田のおばちゃん』			35
水谷法栄さんの交通事故死を乗り越えて			44
『強行遠足体験記』			47
『強行遠足新聞』			56
『甲府一高新聞』			57
強行遠足Q&A			58
強行遠足の記録			60
資料編			69
I 資料翻刻 『本校に於ける強行遠足の意義とその実際』(抜粋)			
(昭和12年・1937)			69
II 江口俊博校長の紹介			79
III 『第80回強行遠足要覧』(抜粋)			85
編集後記			101

伝統に息づく強行遠足

校長 高瀬孝人

本校最大の伝統行事である強行遠足は、今年度で第80回を迎え、素晴らしい好天の下で、成功裡に終えることができました。これも偏に、生徒一人ひとりの大奮闘は無論のこと、沿線で救護や巡視に当たってくださった保護者や同窓生の方々、並びに警察や病院などの関係機関の方々のお力添えがあったればこそと、厚く感謝申し上げます。

今回の最終到達率は、男子78.8%、女子93.3%と好結果でした。生徒各自にとって、厳しいチャレンジの場であったと同時に、得難い、充実した体験として、良き思い出の一ページとなったことと思います。自らの体を通して味わった、こうした感激や充実感こそ自信の礎となり、「生きる力」の源泉となり、人生の支えとなって、今後の生活に活かされてゆくものと確信いたします。

今回は、北海道から北見北斗高校の生徒男女2名ずつの参加もあり、大会に花を添えていただきました。随行された金山繁樹校長先生や渡辺和勇同窓会会長様をはじめ4名の皆様とも5日間にわたって親交を深め、より一層両校の交流の幅を広げることができました。生徒同士も各ホームルームや大会の場において積極的に交流を図り、親睦の絆を深めることができたとの金山先生からの報に、何よりと喜んでおります。平成4年以来、続いてきた相互の交流を今後とも末永く継承・発展させてまいりたいと思います。

本県では、来年度の入学生から全県一学区という新しい入試制度が導入され、各高校の特色づくりが求められております。本校といたしましても、すでに2学期制や45分授業(一部90分授業)の導入を決定し、目下、特色あるカリキュラムの編成や行事の見直し等に取り組んでおります。強行遠足がその一環として、ますます魅力ある行事となるよう、鋭意、工夫してまいります。その際、絶えず80年前の原点に立ち返り、一回毎にその魂を鼓吹しながら、伝統の環を確実に繋げてまいる所存です。今後とも、変わらぬ御支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

感動の第80回強行遠足

同窓会会長 望月 操三

記念すべき節目の第80回強行遠足が、北見北斗高校の4名の生徒を迎えて、清しい秋晴れの下で挙行され、無事に終了できましたことを関係者の皆様方と共に喜びたいと思います。

前日の激励会では、80回という記念すべき大会ですので、一高在学時代平凡な結果しか出なかった私に代わり、我等同級生が誇る岩間孝吉君に生徒諸君を激励していただきました。岩間君は、「終点地なしの信濃大町方面24時間制」が実施されていた昭和32年第33回大会において、大町市築場まで167.1kmという歴代最高到達地点踏破の偉大な記録を達成されました。岩間君の実体験を通じた激励には生徒諸君も深く感動を受けたことと思います。

さて、その日の午後、甲府駅に北見北斗高校の渡辺同窓会長をお迎えに行き、2時間ほど市内の観光案内をしながら、お互いに同窓会の情報交換をいたしました。母校が交流高校としてお付き合いいただいているお相手だけあって、北海道内においても、誇り高い文武両道の素晴らしい学校であることを改めて認識させていただきました。強行遠足の当日は、我々の車に北見北斗高校の金山校長、高橋事務長、大川教諭、渡辺同窓会長に同乗いただき全線を巡視いたしました。

北見の皆様方にとっては、北見の4人の生徒が、無事に完走してくれることがなによりの願いであることが我々にひしひしと伝わってまいりましたので、我々の車は専ら北見の生徒の応援に時間を費やしました。そのかわら、車中で相互理解・親睦も図れたことに感謝しております。北見の辻さんのお母さん、お祖母ちゃんも応援に駆けつけてきておりました。交流の最大の貢献者の田中先生も自費でお越しく下さいました。生徒も、教師も、保護者も、同窓会も、それぞれが大会成功に寄与してくれました。感動することの多い素晴らしい大会でした。

最後に一日も早く本来の姿の大会に戻れることを祈念しております。

強行遠足への想い

PTA会長 武内 有二

先日、新年の合同クラス会に出席してまいりました。やはり、強行遠足の思い出話に花が咲きました。誇らしげに語る者もあれば、悔しそうに語る友もいました。とても楽しい時間を過ごすことが出来ました。 当時は、今と違い白い体育ズボンに学生服といったいでたちで、午後2時に小諸を目指して甲府一高を出発しました。強行遠足は、競走ではなく「ただひたすら歩く事」により自分の限界に挑戦する行事であります。また、自分自身を見つめ直すまたとない機会を与えてくれる行事であります。私は甲府一高を卒業して約30年になりますが、今でも大変誇りに思っています。

強行遠足は、私にとっては悔しい思い出の行事でもあります。1年生の時は小諸まで甘く見て野辺山でリタイヤ、2年生の時は大雨で挫折して松原湖、3年生の時はやる気満々で望み、小諸一步手前の三岡で膝に水がたまりドクターストップ。大変残念でしたが、自分の限界に挑戦出来た事に感謝しています。

今回は、第80回という記念すべき強行遠足であり、また北海道北見北斗高等学校からの参加があったことで、とても良い花を添えていただいたと思います。この強行遠足は、先生方、保護者、同窓会、卒業生といった多くの方々の協力があってこそ開催できる行事であり、生徒の安全を第一に考えながら、一高魂を培わせる大切な行事だと思います。だからこそ、私たち卒業生が経験した貴重な体験を、一人でも多くの生徒さんたちに伝承していけるように、素晴らしい強行遠足にしていきたいと思えます。

第80回強行遠足によせて

PTA保健体育委員長 飯窪 一 徳

全国に誇る第80回強行遠足が、平成18年10月15日北海道北見北斗高校の校長先生をはじめ、諸先生方、男女4名の生徒を迎え実施されました。男子は午前5時、星空の下本校グラウンドを、女子は午前7時30分北杜市立須玉小学校を、共にゴール野辺山を目指してスタートしました。

大正13年、当時の江口俊博校長先生により「歩くに勝る身体の訓練はない」「精根限り歩く」。知・徳・体のバランスのとれた人間育成が肝要であると唱導され、この行事が始められました。

今年8月、第56回全国高等学校PTA連合会大会が秋田県で開催され、本校PTAが数千校の中から26校の「優良PTA文部科学大臣表彰」という栄えある表彰を受けました。三つの専門委員会の中から伝統行事の「強行遠足」をはじめとした「保健体育」が高く評価され、受賞となりました。

平成14年第76回大会には、強行遠足の歴史上最悪の悲劇が、長野県小海の町道で起きてしまいました。かけがえのない尊い命が、無謀運転の少年に奪われたのです。当時私は松原湖に勤務していましたが、今でも思い出すと涙が溢れてきます。存続が危ぶまれましたが、ご遺族の皆様の強い思いや、学校関係者皆様の要望に支えられ、命の大切さ・再発防止・交通安全意識を高め、新たにスタートしました。

この伝統行事は3回の中止を除き、80回も連綿と続き歴史の重さを痛感しています。私事ですが、日頃「歩く」「走る」は生活の一部となり、江口校長先生のお言葉の意味を実感しております。又、三人の子供がお世話になり、7回連続お手伝いさせて頂いたことに感謝しております。最後の大会に家族全員で参加できたことは思い出深い一日となりました。

最後に、多くの皆様からご協力を頂き、無事終了できましたことを心より感謝申し上げます。今後更なる発展と両校の良き交流を祈念し、皆様方の一層のご支援をお願い致します。

小諸へのあこがれ

生徒自治会会長 田辺 翔

自分の限界はどこにあるのだろうか。生活の中で実感することはあまりない。もとより、限界を感じるまで取り組める対象もそう簡単に見つかるものではない。生活が豊かで便利になった現代に生きている私たちはあらゆる苦勞と無縁の毎日を送り、快適に暮らしている。だが、ふと思うのである。「自分には何ができるのだろうか」と。自分で苦勞を負わない私たちは、自分の力をはかる機会も失っているのではないか。そのように感じている私にとって、強行遠足とは自分の可能性を再認識するためのものなのだ。

現在の強行遠足の走行距離は一高から野辺山までの約55キロ、日常的に車や電車などの交通機関を利用している私たちから考えればとても長い距離である。全行程を走り抜いてしまう者もあれば、必死の思いかなわずリタイアする者もいる。誰にとってもこの道のりはそう甘いものではない。一人ひとりにそれぞれの強行遠足があるのだ。

私の強行遠足は、挑戦である。単に野辺山までの挑戦というわけではない。まだ知らぬ自分の限界への挑戦だ。上り坂が大半を占めるコースを走っては歩き、やがて余裕はなくなっていく。足が自分の進みたいという気持ちに逆らい、前に出なくなっていくことに驚きを感じる。これが「本当に頑張る」ということなのだろうか。一番つらいときにはそんなことを思ったりもした。休もうという甘えを断ち切り、自らを励まし一歩ずつ前進していかなくてはならない。これが自分の限界なのか。そう疑い始めたときにゴールは見えてきたのだった。

目指してきたゴール。テープをくぐり抜けた後、私は達成感に包まれていた。しかし、棒のようになってしまった足を引きずりながらも思ったのである、「自分はまだ歩いている」と。

55キロを歩ききったことは私に新たな自信をくれた。考えたことのないところまで、私は自分の足でたどり着けることを知ったのだ。しかし、残る疑問が一つ。私は自分の限界を感じたのか。たとえば、以前のゴールである小諸までの挑戦だったらどうなっていただろう。そう考えたときに感じたのは、もっと歩いてみたいという欲求だった。「まだいける。自分の限界まで」

小諸までなど到底たどり着けないかもしれない。だが、挑戦することには確かな意味があるのだと思う。それは、自分の限界をまだ知らないから。前に進めたらそのぶんだけ、きっと見たことのない可能性が広がっているからだ。

強行遠足の沿革と意義

加藤 忍

◇ 沿革

■ 「強行遠足」の始まり

全国に誇る「強行遠足」を始められたのは、第10代校長江口俊博先生(在職1923~1932)である。

大正13年(1924)文部省は、「明治節の11月3日を国民体育日と定める。各市町村、諸学校とも記念行事を実施せよ」と通達を出した。これに応じて各学校では、運動会・競技会などを開いた。しかし、甲府中学校(甲府一高)では校友会山岳部が「強行遠足」を提唱、江口俊博校長もまた「歩くにまさる身体訓練はない」とこれを支持、かくして11月3日に第1回「強行遠足」が全校生徒、職員を挙げて実施された。コースは、第1班「差出の磯」・第2班「昇仙峡」・第3班「穴山新府城跡」・第4班「東京方面」と、各自の体力に応じた4つのコースからの選択であった。第4班「東京方面」は、朝6時から夕方の6時まで12時間、中央線に沿って東へ歩けるだけ歩くこととなった。

実施してみると予想外の好評。しかし、東は笹子峠・小仏峠の難所があつて適当でないなどの反省も出て、翌大正14年(1925)からは西の松本を目指し、24時間歩けるだけ歩くことに改めた。江口校長は、第1回以来、必ず生徒と一緒にスタート、上諏訪までは歩いたという。

江口校長が去った後もその意志は歴代校長に引きつがれ、文部省、スポーツ医学会、マスコミの注目を浴びるようになった。また「強行遠足」を学校行事に取り入れる学校が、県内はもとより全国に広がっていった。以来幾星霜を重ねて今日まで、この伝統行事は3回の中止を除いて、80回も連綿と続いている。

■ コースの変遷

80回の歴史の中で、これまで次のようなコースの変遷があつた。①東京方面コース(第1回)、②松本方面コース(第2回~第3回)、③木曽福島・松本方面コース(第4回~第5回)、④信濃大町方面コース(第6回~第36回)、⑤小諸方面コース(第37回~第80回)である。このうち、①~④(第1回~第36回)までは、終点地は無く、各自の体力に応じて24時間(第1回のみ12時間)歩けるだけ歩くという、江口校長が始められた「強行遠足」のスタイルがそのまま踏襲されてきた。第37回以降は、終点地が定められ今日に至っている。

さて、コースの変更理由であるが、①東京方面(第1回)から②松本方面(第2回~第3回)への変更理由は、前掲の通り。②松本方面(第2回~第3回)から③木曽福島・松本方面(第4回~第5回)への変更理由は、松本到着者が相当数に及んだため、木曽福島(142km)・松本(120.4km)方面、2コースからの選択としたのである。③木曽福島・松本方面(第4回~第5回)から④信濃大町方面(第6回~第36回)への変更理由は、先のコースが鉄道沿線に沿ってはいたものの、駅への距離が遠いため、大

糸線沿線道路に変更されたのである。④信濃大町方面(第6回～第36回)から⑤小諸方面(第37回～第80回)への変更理由は、道路舗装による通行車両の増加など、交通事情の悪化が主な理由であった。

■ 痛恨の極み、そして伝統の継承

平成14年(2002)、第76回強行遠足中、本校女子生徒が、危険運転行為を犯した運転者によりその尊い命を奪われるという痛ましい交通事故が発生した。「強行遠足」の長い歴史の中で、初めての大きな事故であり痛恨の極みであった。これにより「強行遠足」の廃止が論議されたが、「強行遠足」の継続を希望する御遺族の意思や、生徒・保護者・同窓生・職員らの熱意により、翌平成15年(2003)より終点地を小諸(男子103.3km・女子45.8km)から野辺山(男子55.4km・女子30.3km)に短縮して実施されている。

◇ 意 義

■ 精根限り歩く

江口校長は何を生徒に伝えようとして「強行遠足」を始められたのであろうか、またかくも多くの同窓生が、「強行遠足」から尊い経験、教訓を得てその後の人生の糧としているのはなぜであろうか。

「強行遠足」草創期の理念を伝える最も古い資料が、『本校における強行遠足の意義とその実際』(昭和12年版)である。これによれば、「敢えて強行遠足と名づけたのは、自分の体力に応じて歩けるだけ歩くということを強調せんが為である。

由来人情の弱点は、安易なものとの妥協である。歩く場合でも少しく疲労を感じると乗り物の事を考える。或はある程度で止めてしまうという事になり勝ちである。之等一切の妥協と怠慢とを排して、精根限り歩くという事を重視したのである。今一つは今迄何処の学校でも、遠足の翌日は休日にするという事が、不文律的習慣となっていたが、この習慣を打破して、平常通り午前九時始業で、授業を行っていくといふ事を建前とした。

かうした所謂真剣勝負に因って、剛毅不屈の精神を養いたいと思ったのである。」と述べられている。

つまり「強行遠足」は、順位や距離を競うものではなく、24時間以内に各自の体力に応じて出来るだけ遠くへ行くことにより、自己の脚力・体力・精神力を培う、まさに本校の伝統精神である「質実剛健」を生かす最大の行事なのである。

(編集委員)

強行遠足の概要

第 1 回 (大正13年・1924)

- 11月3日、全国体育日に際し、当校では全校職員生徒を各自の脚力と希望に応じて、下記のように分類し、遠足運動を行った。

第一班 差出の磯 往復七里

第二班 御岳本社 同八里

第三班 新府城跡 同九里

第四班 最健脚者を選抜し、各自の実力を十分に発揮する目的を以って、中央線に沿い、甲州街道を東京に向かって行ける所までぐんぐん行き、帰路は汽車に抛る事にした。

(『校友会誌』第49号、大正13年12月20日発行)

- スタートは午前6時、第4班のみは、12時間制を定めた。結果は、最高記録は上野原駅(64km)であった。検印方法は現在とは違い、乗車する国鉄駅の駅長の印によった。

第 2 回 (大正14年・1925)

- 11月3日、全国体育日に当たり、我校では、例の徒歩主義に即して昨年通り強行遠足を挙行した。即ち、全校生徒を脚力に応じて二分し、比較的弱者組は御嶽仙峨滝へ強者組は信州往還を松本へ向かって脚の続く限り、努力のあらん限り行けるところまで歩いて、帰途は中央線を利用することにしたのである。

第 3 回 (昭和1年・1926)

- 制限時間は前回同様、24時間で松本駅終点指定制とした。
- 11月3日午前0時スタート、参加者588名、その内211名は県内にて中止、松本到着は14名。「彼らの体力には余力充分ありと認める」ということから、次年度のコース変更となる。なお、足弱者のためには、①新府城跡コースと②御嶽仙峨滝コース(4回まで利用)が用意された。平均距離49.5km。

第 4 回 (昭和2年・1927)

- コースを木曾福島方面の29里半(158km)コースと、従来の松本方面コース二方面に行ける方式を採った。前年、健脚余力有る者多い為に24時間制で終点制なしとし、およその目標地を木曾福島町を目途とした。

第 5 回 (昭和3年・1928)

- コースは前年同様、木曾路と松本路コース。足弱者コースは新府コースを残し、他は廃止した。記録によると、木曾路には8名で、鳥居峠の手前の奈良井5名、贄川(にえかわ)に3名。松本方面は松本を越えてなんと篠井線の田沢駅(松本から7km先)15km先の明科駅方面にまで行った者もあらわれた。松本以北は43名(内松本着33名)の到着をみた。

第 6 回 (昭和4年・1929)

- 木曾路は鉄道に沿ってはいたが、駅と駅との間隙が長く乗車指導が困難であったという理由から、松本以北を大糸線沿線の信濃大町方面と定めた。
- 時間制限は4時間制、スタート0時、参加者は858名と800台を超した。最高は豊科(128.9km)2名、松本も56名と新記録。

第 7 回 (昭和5年・1930)

- 強行遠足実施要項が始めて作成された。今回は松本到着は5名と低迷。

第 8 回 (昭和6年・1931)

- 市街道路(下諏訪-岡谷。辰野-小野。小野-塩尻。)は自由に近路を通ることを許す。ただし鉄道沿線、鉄道鉄橋を渡ることは絶対不可。
- 途中救護所の場所は示すが、検印場所は秘密とする。㊦検印所は、白須、富士見、青柳、辰野、小野、村井北又は島田村の計6か所とした。
- 最高到着地、有明(135.9km)1人。

第 9 回 (昭和 7 年・1932)

- 強行遠足準備委員会を教師 8 名にて始めて構成した。降雨のため先頭が上諏訪にて打ち切り中止とした。

第 10 回 (昭和 8 年・1933)

- 前年の雨による中途中止も有ったか、要項の出發時降雨中止は降雨順延となる。
- 救護自動車を一台チャーターし、甲府・台ヶ原間の最後尾を随行することになった。

第 11 回 (昭和 9 年・1934)

- 準備係も細部に亘るものが出てきて、中でも風紀係、電燈整備係、草鞋係など特筆される。

第 12 回 (昭和 10 年・1935)

- 道路距離調査をはじめて行う。
- 松本到着は 5 名、松本以北 3 名、中でもトップは会染(140.4km)で、新記録である。

第 13 回 (昭和 11 年・1936)

- 初めての記録映画を残した。
- 松本駅に信濃民報社、時事新聞社、東京朝日松本支局から、キャラメルの提供あり。

第 14 回 (昭和 12 年・1937)

- 降雨のため中途中止(2回目)、先頭辰野にて打ち切り。

第 15 回 (昭和 13 年・1938)

- メダル線(メダルを授与する基準地点)を優秀線と称し、葉書大の症状を与える。
- 草鞋の概数を会食時に調査する。1 足 7 銭又は 8 銭。「高田村を紹介しておく」の記事あり。

第 16 回 (昭和 14 年・1939)

- 参加生徒数 900 名を越し 914 名。
- ガソリン統制のため自動車の通行がきわめて少なくなり不正の恐れうすれる。
- 檄の提示が流行する。学校にて検閲の上許可したものを貼らしむること。

第 17 回 (昭和 15 年・1940)

- 打切(前進停止時間)上諏訪 6 時半、下諏訪 7 時半、岡谷 8 時半、辰野 8 時、小野 8 時半、塩尻 8 時半、6 箇所の救護所に始めて打切前途停止時間を実施。
- 氏名票(自作させたもの)を検印所に置いて行かせる方式を採用。
- 途中降雨で前途中止。先頭松本 60 名到着。

第 18 回 (昭和 16 年・1941)

- 50m 尺により全コースを実測。
- 救護自動車、甲府・台ヶ原間を巡行する。(電灯用の電池・電球共に 2ヶ用意することと要項にある)
- 参加生徒 1,000 名を越し、松本へ 111 名、松本百名突破時代来る。

第 19 回 (昭和 17 年・1942)

- 砂糖、薬品の特別配給を件に申請する。
- 松本勤務の渡辺大蔵先生の勤務感想より「大東亜戦下、強行遠足に対する一段の認識の深められたると自信の自覚とに依り、生徒の意気大いにあがり何れも溢るるばかりの元気を持って終始全力を尽くして敢闘し、されど途上にて疲労困憊の極に達し無意識の内路上に横たわり寝る者多くその救護には大いに困難を感じたり」
- 生徒は弁当 3 食分とはいえ、なかなか持たない者が多く、その為倒れる者が多い。
- 第 1 回「集団強歩練習会」を行う。

第 20 回 (昭和18年・1943)

- 『20周年記念誌』作成。
- 16ミリ記録映画制作。
- 警戒警報の発令の場合(空襲警報の場合も同じ)は、
 - ①出発前発令セル時ハ中止
 - ②出発後発令セル時ハ、付近ノ駅ヨリ即刻帰宅ニ向フ参加者1,255名内松本277名、以北38名、松川に2名(133.7km)
- 春季競歩練習会(5月1日)
団体歩行にて強歩。コースは第1回と同じ。
- 強歩練習会(10月5日)
春季が集団競歩であるのに対して、個人競走。服装は上衣なしのランニング、ゲートル着用、裸は厳禁。

第 21 回 (昭和19年・1944)

- いよいよ厳しい戦時体制となる。
- 本年は例年より職員不足をなし尚上級生等が居ないため、又当日帰宅させるを原則とするため、小野を以って打切とする。直ちに帰甲。
- 1、2年生のみにて実施。
- 小野到着者111名(91.7km)

(昭和20年・1945)

8月15日、終戦につき中止。

第 22 回 (昭和21年・1946)

- 9月下旬、甲府駅管理部に松本方面に向かつての強行遠足許可を申出たところ、10月上旬になっても何等の回答もなく、再度申出たところの混雑のためと許可してくれず、止むなく、甲府-韮崎-小笠原-青柳-石和-等々力-塩山-日下部-山崎-甲府の巡環コースを定め、なお余力ある者は2周することにした。
しかし生徒は不満で、生徒有志は管理部に交渉して上野原を終点とするならば許すとの内容を得たという。それで、上記巡環コース一周後に

中央線に沿って、上野原に向かう案を生徒にはなかったところ、4、5年生合計の賛成者は半数に達せず、この案は取り止めになる。

10月23日、日川中学が松本方面に実施し、管理部は、「一人たりとも日中生は乗車させず」と答弁しているのに何等支障なく無事汽車利用を行ったので、本校は11月にはいると列車が削減され旅費が高騰するため、10月中に実施に踏み切り、10月29日正午出発と決定した。そして10月26日、内田、窪田両先生が上諏訪・台ヶ原間。今村先生が上諏訪・辰野間。島田先生が小野・松本間の道路調査を行い、決行のはこびとなったのであった。

- 10月29日の正午出発、24時間制。
- 参加生徒数1,743名。やっとの復活で、張り切る。松本96名、松本以北23名。

第 23 回 (昭和22年・1947)

- 名票を利用しなくなったので、まごつく。
- 特記なし

第 24 回 (昭和23年・1948)

- 新制高校となる。併設中学と合同で実施。中3、高1、高2、高3。在籍1,413名中、253名不参加。
- 定時制高校生20余名初参加。

第 25 回 (昭和24年・1949)

- 定時制89名・通信制1名の生徒が参加。内女子4名初参加し日野春まで25km走破。
- 最高到着地信濃大町(152.6km)1名。

第 26 回 (昭和25年・1950)

- 10月31日、12時出発。女子生徒参加。出発9時00分、穴山を16時58分列車にて帰宅。104名参加。
- 創立70周年記念記録映画を撮影する。

第 27 回 (昭和26年・1951)

- 最高は木崎 1 名、松本201名(このうち松本以北へ40名)
- 女子終点制、台ヶ原にする。206名が到着。

第 28 回 (昭和27年・1952)

- 実施要覧が印刷物となる。「遠足当日諸係と其の任務明細書」
- 女子コースを牧ノ原から日野春駅へ変更。
- 本部を岡谷に移動。
- トップは木崎(156.9kkm)。

第 29 回 (昭和28年・1953)

- 高等学校共済組合山梨支部よりトヨベットを利用し、1泊2日で道路調査を行う。
- 当時の救護所用薬品
仁丹、ノーシン、ヨーチン小、ガーゼ1m、脱脂綿小、包帯6裂1ヶ、絆創膏小、メンソレータム小

第 30 回 (昭和29年・1954)

- 台風のため、路面流出され、大小礫が突出、凸凹が甚だしい。穴山橋流失。
- 10月25日(月)正午、校庭よりスタート。
- 降雨のため午前0時をもって中止(先頭は川岸)。
- 乗車証明書の個人票、駅長証明によるものとする。
- 警察の道路使用許可制がはじめて行われる。

第 31 回 (昭和30年・1955)

- 10月25日(月)正午、校庭よりスタート。
- 降雨のため午後11時をもって中止(先頭は岡谷)。
- 強行遠足行程計画グラフ表が配布され、予定を青線で、実際は赤線で記録させ、実施後は感想文を提出させた。
- 女子コースを富士見まで延長。午前8時から午後4時までとする。

第 32 回 (昭和31年・1956)

- 教育長経理課のジープを借用して道路調査、甲府一高-木崎間、2日が行く。
- 運賃松本-甲府間 250円(ガクワリ125円)
- 台風通過の後遺症が各地に見られた。
- また各地にて新道新設工事が盛んになる。
- 強行遠足行路地図及び標高差図が配付され全体の見通しが前もって理解できるようになった。

第 33 回 (昭和32年・1957)

- 10月14日午後4時出発(初の試み)、24時間制。
- 実施要項に「主旨」が文章化される。
〈主旨〉綿密な歩行計画に基づいて心身鍛練に資し、特に疲労・足痛・寒気などの困難を克服して目標の達成に突き進む不屈の精神力を養い、あわせて各自の体力・精神力を自覚させ自信を得させる。
- 救護班が初めて編成される。台ヶ原・富士見・上諏訪・岡谷・松本に校医の許山先生他保護者の医師6名及び国立病院から看護師2名が援助。
- PTA役員による手伝いがはじめて行われた。

第 34 回 (昭和33年・1958)

- いつ強行遠足廃止になるかわからない昨今のため、映画撮影をしておいた方が良く、ということ、16mmを3台使って、予算10万円位で作成しようということになった。予算を捻出するために、映画「十戒」の前売り券販売による収入を当てることにした。入場券は200円、前売160円。前売1枚につき10円の益金で2万枚は売ってみようとなった。(撮影者・小木曾、土橋両先生、ナレーター・齋藤操先生)

(昭和34年・1959)

伊勢湾台風による道路欠損のため中止。

第 35 回 (昭和35年・1960)

- 創立80周年記念 10月28・29日実施。
- 義務距離(事故のない限り必ず歩行を必要とする。)
- 男子 富士見(45.2km)22時30分までに通過(10時30分)する。
- 女子 台ヶ原(28.6km)14時30分までに通過(6時間)する。
- 全線巡視車6台起用その中先頭車・本部車・後尾車・全線車の4台に無線機を乗せた。自衛隊に応援をたのんだ。

第 36 回 (昭和36年・1961)

- 10月19~20日実施
- 実施要項より(特に変更になった点は)
- 出発時間11時00分(富士見発・松本発の列車時刻がダイヤ改正に伴い変更)
- 優秀記録のクラスにはカップを与える。
- 交通量激しく、右側歩行を指導する不安なりとの反省あり。
やがて、コースが「佐久往還」にかわることとなる。

佐 久 往 還

第 37 回 (昭和37年・1962)

- 男子は松原湖(66km)を終点地とし制限時間15時間。女子は箕輪新町を出発点、松原湖(38km)を終点地とし制限時間7時間とした。
- 男女共全日制は全員参加、定時制、通信制生徒は希望者参加。
- 新コースの初の試みとして次のように実施された。清里高原寮を本部とし、ここを概ねの目標地とし、当所は模擬店を設け、ブラスバンド等の準備もなし、フォークダンスその他のレクリエーションをなして楽しい1日を過ごすべく計画された。尚、歩行した者はここより前進してもよいことにした。しかし実際はここに残留した生徒は案外に少なく、大部分の生徒は歩くことに意義を感じてか最終地点松原湖へ向かって出発した。
(この試みは不評に終わり、次回からはこれを廃し、本部も野辺山に移し専ら歩くことを本旨とした。)

第 38 回 (昭和38年・1963)

- 男子は学校を出発点とし中込(87km)を終点地、制限時間は17時間とした。女子は箕輪新町を出発地とし海の口(32km)を終点地、制限時間は5時間とした。
- 前回の先頭停止時刻は廃し、生徒の体力に応じた歩行速度が5.5km/hならば、終点の中込に行けると指導した。

第 39 回 (昭和39年・1964)

- 男子のコースは前回通り、学校→中込。女子は若神子小を出発地点として野辺山本部を終点地(26km)、制限時間5時間とした。

第 40 回 (昭和40年・1965)

- 生徒の要望に応え、男女のコースを更に延長した。
- 男子は小諸駅(100km)を最終地。
- 女子の出発地を三軒屋とし、最終地を小諸まで延長(32km)
- 男子終点小諸到着者は予想に反して多く235名(全・定を合わせ)に達した。
全日制288名、平均生徒歩行距離62.8km。
参加率はじめて95%台になった。
- 創立85周年記念行事の一環として、記録映画(UTY制作)を作成、強行遠足沿革誌を刊行。また、NHKスタジオ102で全国放送されると大きな反響があり、これを機会に学校訪問が急激に増加した。
- 参加生徒、関係者全員に記念メダルを贈る。

第 41 回 (昭和41年・1966)

- 男子は小諸駅前まで100km。前年と同じコース。女子は前年と同じく、三軒屋→小海。
男子の出発を1時間早め、午後4時出発式、4時30分出発。翌日12時30分終了。
制限時間20時間とした。

第42回 (昭和42年・1967)

- 男・女とも前年と同じコース。
- OBの参加希望者を許可した。大学生8人が参加した。
- 旺文社『高二時代』の記者が同行取材し、12月号にグラビア5ページを使っての紹介記事が掲載された。

第43回 (昭和43年・1968)

- 二校選抜制第1年。予行は1年生だけが現在の形式で8kmで行うこととした。
- 体育の授業用の服装を、この年から、上を白、下を学生カラーの色分けジャージと定めた。女子は今まで男子と同じ白であったのを、体育用の下を使用する事も可とした。
- 男・女共にコースは前年と同じ。
- 男子参加率96%台になるが、野辺山以前の中止者が45%もあった。
女子の小海到着率が77.5%と伸びた。
- 保護者の中の医師の方とHR役員の方々合わせて、75名の協力をいただいた。

第44回 (昭和44年・1969)

- 女子は出発後降雨にみまわれた。雨中の前進は無理であると判断、野辺山本部で前進停止とした。しかし、全員が野辺山に到着した。
到着率100%。平均軒数11.8km。
男子も降雨の中を頑張り、小諸到着は163名。
全体の15.9%と、前年同様の立派な成績を収めた。

第45回 (昭和45年・1970)

- 本校創立90周年記念
創立記念の意味をこめて、強行遠足参加者全員に記念メダルが同窓会から贈られた。
創立記念式典が盛大に挙行され、白田のおばさんのほか、強行遠足にご協力いただいている救護所関係の皆様へ感謝状を贈呈する。

- 男子……小諸市民会館までの103km。
女子……三軒屋ー小海の33km。
- 男子の小諸到着率20%台の成績を初めて収めた。

第46回 (昭和46年・1971)

- 佐久往還にコースを変えて10周年ということもあり、生徒もはりきったが、男子出発時の夜半すぎから雨になり、男子は途中で中止。女子はスタート地点、三軒屋までバスで行ったが雨が激しくこれも中止。
- 11月3日UTYから長編ドキュメンタリーが放映された。また、NHK甲府放送局の「今週の話題」の座談会に生徒4名。教師1名出演。
- その他、日本経済新聞の全国版をはじめ、毎日新聞甲斐週評のコラムに支局長が賞讃。県内各社がマスコミ面で大きくとりあげ、稀少価値的存在になった伝統行事を讃えてくれた感が深かった。

第47回 (昭和47年・1972)

- 男子出発時間を30分繰り上げ午後2時30分にし、翌日12時までの制限時間21時間30分に変更する。
- 女子コースを高根東小ー海の口駅前の32kmに変更。昨年の雨天中止のうっ憤を晴らすかのように、91.8%の最終到着率をみた。90%台に初めてなり、女子生徒の平均距離31.3kmの大記録を生んだ。
- NHKカメラリポートが取材。朝の番組で全国に放映された。また毎日新聞の全国版にこれまた大きく「死闘100km!」を掲載、学習研究社(学研)も、レポーターがコースに同行し、『高二コース』で紹介した。

第48回 (昭和48年・1973)

- コースは男女共前年どおり。
- 帰甲列車には必ず看護士が添乗する。
日赤甲府支部より救急用の毛布を借用。

第 49 回 (昭和49年・1974)

- 小海線に限って急行小淵沢行きに別途個人負担で乗せることになり、しかも急行停車駅でない海の口に、当日だけ臨時停車をしてくれた。
- 検印カードを現在のものと同型のものに変更した。

第 50 回 (昭和50年・1975)

- 創立95周年記念
記念式典を県民会館で挙行。強行遠足関係者も多数ご臨席され盛大に行われた。
- 女子コースは生徒の希望もあり、コースを延長し高根→小海(42.5km)にて実施されるようになった。
- 記念の16ミリ記念映画「今・青春をゆく」をYBSに依頼して制作する。カラー50分の映画である。
- これとは別に、NHKから、イラストレーターの黒田征太郎氏が同行取材し、「若者たちはいま『よ〜い・どん』(22時間100キロレース)が、全国放映された。

第 51 回 (昭和51年・1976)

- 男子は途中雨にあったが、完全実施。女子はバスで学校を出発したが、降雨のため高根東小学校からバスで帰校した。

第 52 回 (昭和52年・1977)

- 甲府東高等学校を加えての四校総合選抜制になる。
- 男子の小諸到着率は60%台に突入した。
- 臼田警察署の指示によって男子の白ズボンの裾に夜光テープを付けることになった。これは夜間の自動車事故防止と休憩中の生徒の確認に大いに役立った。

第 53 回 (昭和53年・1978)

- 生徒全員に対し、また、自動車による協力の保護者に対し、傷害保険をかけるようにした。

- NHK同行取材・「NHK新日本紀行」八ヶ岳青春譜を10月18日午後10時より、全国放送した。「年間の新日本紀行のアンコールは多いが、中でも八ヶ岳青春譜のアンコールは特に多かった」

第 54 回 (昭和54年・1979)

- 体育館増改築、格技場改築、竣工
- 道路の大工事はほとんど終了して道路は良くなったが、交通事故の心配が増える。
- 「フォト」記者同行取材し、グラビア4枚を発表、全国公官庁へ配付されていたためか、社会体育関係者からの問い合わせが増えてきた。また、週刊サンケイの記者が体験レポート・シリーズの一つとして、強行遠足に自ら歩行したが野辺山にて落伍した。

第 55 回 (昭和55年・1980)

- 本校創立100周年記念
記念式典は県民会館大ホールに全校生が出席し、長駆、来賓の皆様を県内外からお迎えして行われた。式中、感謝状贈呈の折に強行遠足関係者や代表者にもご臨席していただいた。また、永年救護検印所としてお世話いただき今も多大なご迷惑なっている皆様には、学校長が出向いて感謝状を贈呈した。
- 小諸コースに変更されてから、すべての記録を更新する意気込みが見られた。

第 56 回 (昭和56年・1981)

- 男、女共コースに変更なし。
- 距離測定を正確に行うために、係の教師延8名が数回に分けて測定した。
男子……101km 女子……41.5km
- 臼田署の指導によって、男子の歩行には、全員夜光反射付きのタスキを使用した。帽子とズボンにもテープ使用して、夜間の安全歩行に万全を期した。
- 走る仲間のスポーツ・マガジン「ランナーズ」の記者が同行取材し、生徒と一緒に小諸までを完全歩行して踏破。

第 57 回 (昭和57年・1982)

- 8月の台風により、国鉄小海線が不通になったが、国鉄の努力により予定を大幅に縮めて開通し強行遠足実施に事なきを得た。
- 朝日テレビが「モーニングショー」に本校の強行遠足の状況を全国に放映した。

第 58 回 (昭和58年・1983)

- 長野県白田警察署の好意により、一般ドライバーに対する強行遠足歩行者への安全運転呼びかけ用のたれ幕掲揚を本年より実施した。
- PTA協力者との全職員による合同反省会を本年より開催。

第 59 回 (昭和59年・1984)

- 女子コース一部変更(松原湖～小海間、新道→旧道)＝距離は不変＝
- 小諸コース設定20周年記念行事として講演会開催
〔平沢弥一郎「足の裏からみた人生」(PTA研修会を兼ねる)〕
- 20周年記念 生徒体験記文集 発刊

第 60 回 (昭和60年・1985)

- 女子コース一部変更(高根東小～長沢間)＝距離は不変＝
- 出発式を男女合同で実施
- 女子出発前のトイレ使用を学校で済ませる方法がとられた。
- 国道18号線の不通によりコースの交通量が激増した。そのために警察の指導もあり、女子コース一部変更(市場～海の口間、新道→旧道)＝500m短縮＝があった。同じく男子コース一部変更(松原湖→小海間、女子と同じ)があった。
- 60回強行遠足を記念して以下のことが計画実施された。
 - (1) 小諸市長出発式に出席
 - (2) 60回記念誌刊行(強行遠足要覧)

- (3) 記念式典において功労者に感謝状贈呈
- (4) 小諸・小海ゴール到着者に記念文字入りメダル授与
- (5) 創立105周年と合わせて記念品(アクリルを使用した文鎮)の制作頒布
- (6) 強行遠足祈念像の建立(須藤漠氏作品)
記念像銘文
「君よ走れ
新たな歴史を創る道程」
が決まる。

第 61 回 (昭和61年・1986)

- 第41回国民体育大会(かいじ国体)開催のため、日程を遅らせ、11月4日(火)～5日(水)に実施する。
- コース2ヶ所変更(男女共通で距離が500m短縮)(清里～野辺山間・市場～海の口間)
- 11月上旬の実施に伴い、相当な気温低下が予想されたので、高地(清里・野辺山・市場周辺)の気温調査を試みるも、実施当日は暖かく、好条件に恵まれた。
- 市場～海の口間の歩道の不整備がひどく、生徒有志・教師による清掃隊が出動し、空缶回収や雑草除去を行った。

第 62 回 (昭和62年・1987)

- 昨年同様のコースで実施。
- 緊急連絡用としてポケットベルを全線巡視者に携行させる。
- 研数学館の記者が同行取材する。

第 63 回 (昭和63年・1988)

- 雨天のため、初めて一日順延された。そのため、JR小海線の増結・臨時列車が依頼できず、女子の輸送については、貸切りバスを急拠チャーターした。
- 女子の出発時刻を1時間遅らせ、また最終制限時刻も1時間遅らせた。(制限時間8時間は変わらず)
- 「月刊高校教育」(学事出版)・「キャリア・ガイダンス」(リクルート出版)に紹介される。

第 64 回 (昭和64年・1989)

- 大学入試センター試験(従来の共通一次試験)が早まったために、9月の最終週に実施。
- TBSテレビ「ギミ・ア・ブレイク」で取り上げられ、全国ネットで放映される。またNHK教育テレビ「青春スクランブル」でも放映される。

(平成2年・1990)

- 台風18号のため中止
- 10月31日(水)創立118周年記念式典を県民文化ホールで挙行。
強行遠足関係功労者に記念品・感謝状を贈呈する。また「臼田のおばちゃん」こと依田トミ子氏から本校生徒に「コリアーズエンサイクロペディア」全24巻が寄贈され、全校の職員・生徒が感激した。

第 65 回 (平成3年・1991)

- コース一部変更(若神子～三軒屋間)、女子の出発地を須玉小学校に変える。また女子の出発時刻を10分繰り上げ午前6時30分とし、制限時間を8時間10分とする。
- コース変更に伴って男子103.6km・女子46.0kmの行程となる。
- 従来の「箕輪新町」「長沢」検印所を廃止し、新たに「津金」検印所を設置する。

第 66 回 (平成4年・1992)

- 校舎改築工事始まる。
- 北海道北見北斗高等学校との交流始まる。
北見北斗高等学校からの代表男女各2人が参加した。また、本校代表各2人も北見北斗高等学校の強行遠足に参加した。
- 女子制限時間を30分延長した。
- 女子最終小海でコンピューターによる記録処理を始める。

第 67 回 (平成5年・1993)

- 校舎改築竣工式
- 天候に恵まれ無事終了した。
- オーストラリアからの女子留学生が参加した。
- 初めて校長車等に携帯電話を使用する。

第 68 回 (平成6年・1994)

- 出発当日午前中まで雨模様、決行したが途中ほとんど雨に降られず無事終了。
- 当日夕方TBSテレビから明朝「ザ・フレッシュ」で小諸付近から中継取材したい申し出があり、緊急協議して許可したが、その直後、北海道東北沖地震が発生し、取材クルーが北海道へ取材に行くため急遽キャンセルになる。

第 69 回 (平成7年・1995)

- 創立115周年記念
- 記念式典において強行遠足関係代表者に感謝状贈呈。また、永年救護検印所等でお世話になっている皆様に学校長が出向いて感謝状を贈呈した。
- 北海道北見北斗高等学校より代表男女各2人参加。男子は4位5位、女子は2位3位と健闘した。
- 係が全コースをウォーキングメーターにより実測した。

第 70 回 (平成8年・1996)

- 全職員・生徒に対し、蘇生法講習会を実施。
- JR東日本(株)小海営業所と覚書を交わす。
(本校独自のJR団体乗車券を廃止し、学生団体特別契約乗車票を使用)
- 小諸市長の人事異動により、小諸到着者上位30名に贈られる色紙の廃止。
- 必要なものはみずから背負っていくという行事の本旨に戻すために、小諸到着者に無料で提供されていたパン(えびす屋)・牛乳(小諸市役所)・リンゴ(松井農園)を丁重にお断りする。
- 北海道北見北斗高校の強行遠足に(第3回交流)本校生徒男女各2名参加。女子2名は3位入賞。

- 29人乗りマイクロバス購入、強行遠足の準備、有事の際の利用が可能になる。
- 名物であるしじみ汁を30年以上作り続けて下さった丸山良雄氏ご逝去。
- 山梨放送報道制作局テレビ制作部取材。
- 第70回強行遠足記念誌『歩け、心のかぎり』発行。

第71回 (平成9年・1997)

- 男女コース一部変更(津金～三軒屋間)、津金救護検印所～海岸寺～南清里浅川地区～三軒屋となる。男女とも1.6kmの延長、制限時間も20分延長。
- 下水道を整備するための工事がコース上で多く行われはじめる。
- 保護者協力者から合図灯5本を寄贈して頂く。

第72回 (平成10年・1998)

- 北見北斗高校から代表生徒男女各2名が参加。女子が4位5位の成績と健闘した。
- 永六輔の小海線ロマン紀行(YBSテレビ)に強行遠足の映像がのる。

第73回 (平成11年・1999)

- 男子コース一部変更(葦崎～若神子間)
- 桐の木橋付近には歩道がなく危険なため、141号線バイパスに変更。そのため300mの延長となる。
- JR小海線団体乗車切符として、「業務連絡書」を使用。
- 男子の参加率、過去最高98.7%(470名中欠席者6名)となる(40回以降)。

第74回 (平成12年・2000)

- 創立120周年記念
- 県民文化ホールにて記念式典が挙行され、永年救護検印所等でお世話になっている方に感謝状が贈呈される。
- 北海道北見北斗高校より代表男女各2名参加。男子8位、女子4位8位と健闘した。
- PTA保体専門委員会において、心肺蘇生法の講

習会を実施した。

- 記録ビデオ『歩け、心のかぎり』～一高生の誇り・伝統の強行遠足～を(株)アドブレーション社に依頼作成する。

第75回 (平成13年・2001)

- 男子コース検印所場所変更(岩村田救護検印所) JR岩村田駅前広場拡幅工事の終了を機に、岩村田救護検印所を駅南側より北側広場に変更。コースも踏切横断が2カ所解消され最適な場所となる。
- 女子の参加率、過去最高97.4%(493名中欠席者13名)となる(40回以降)。

第76回 (平成14年・2002)

- 松原湖検印所過ぎで、危険運転による女子生徒の死傷事故が起こる。
- 強行遠足の存続が問われ、来年度から距離、コースを見直すこととなる。

第77回 (平成15年・2003)

- 前年の事故をふまえ、安全面の見直しを行いコース・距離等のリニューアルをした。
- 男女ともコース変更
男子は、学校から葦崎、若神子、高根、大泉、清里を経て野辺山までの53.7kmとなる。
女子は、須玉から男子と同じコースをたどり野辺山までの31.0kmとなる。
- 女子スタート後高根付近で通勤ラッシュに遭遇し、渋滞になり休日開催の意見が出る。

第78回 (平成16年・2004)

- 雨天途中中止

第79回 (平成17年・2005)

- この年より、小諸までを歩いた生徒が在籍しない強行遠足となった。
- 甲府一高より北海道北見北斗高校へ代表男女各

2人参加。

男女とも1位。他も入賞と素晴らしい成績を収めた。

- 実施判定会議にPTA会長、保体専門委員長が加わる。
- 同窓会より、まきば公園救護検印所の勤務に参加。

第 80 回 (平成18年・2006)

- 第80回を迎え、記念大会として北海道北見北斗高校を招待して開催。
北見北斗高校からは男女各2名が参加し、男子は4位19位、女子は3位24位と健闘した。
- AEDを導入。PTA、教職員に対し、AEDを取り入れた心肺蘇生法の講習会の実施。
- 「第80回 強行遠足記念誌」発行
- 臼田検印所の依田トミ子氏(臼田のおばあちゃん)逝去(2月)
- 三岡検印所の柏木宇三郎氏 逝去(12月)



平成18年度 第80回 強行遠足実施状況

進藤和弥

1. 職員組織及び協力者状況

(1) 強行遠足準備係

- ①総務係 体育振興・総務
- ②庶務係 教務
- ③会計 事務室
- ④医療 保健
- ⑤PTA 各学年
- ⑥記録 視聴覚
- ⑦生徒会 生徒会
- ⑧物品 生徒指導係

【解説】

平成15年第75回強行遠足より強行遠足委員会がなくなり、体育振興係が強行遠足の全般にわたる企画・立案を行い、全職員が各準備係に入り、細部にわたる準備を進めた。

(2) 協力者状況

- ①保護者 390人
- ②医師 7人
- ③看護師 21人
- ④同窓会 40人

2. 第80回強行遠足参加・到着状況・本部人員集計表 平成18年10月15日(日)

男子	在籍	欠席	出席者数	出走者数	出走率	到着者数	達成率
3年	144	1	143	139	96.5%	111	79.8%
2年	136	3	133	132	97.1%	100	75.7%
1年	139	0	139	135	97.1%	109	80.7%
全体	419	4	415	406	96.6%	320	78.8%

	A				B				C				B+C				D				E				F				E+F				G				合計								
	前所出発数				途中中止				到着制限後				未到着者数				到着者数				前進停止前				前進停止後				中止者数				出発者数												
	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計					
学 校	135	132	139	406																																									0
葦 崎	135	132	139	406	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	135	132	138	405	4	0	1	5	0	0	0	0	4	0	1	5	131	132	137	399	131	132	137	400	400
中 田	131	132	137	400	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	131	132	136	399	0	0	0	0	1	3	0	4	1	3	0	4	130	129	136	395	130	129	136	395	395
高 根	130	129	136	395	2	4	0	6	0	0	0	0	2	4	0	6	128	125	136	389	2	3	10	15	4	3	4	11	6	6	14	26	122	119	122	363	122	119	122	363	363				
若 林	122	119	122	363	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	122	119	122	363	3	4	0	7	0	2	3	5	3	6	3	12	119	113	119	351	119	113	119	351	351				
大 泉	119	113	119	351	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	119	113	119	351	1	0	0	1	2	0	0	2	3	0	0	3	116	113	119	348	116	113	119	348	348				
まきば	116	113	119	348	2	0	1	3	0	0	0	0	2	0	1	3	114	113	118	345	1	0	1	2	3	9	4	16	4	9	5	18	110	104	113	327	110	104	113	327	327				
清 里	110	104	113	327	0	2	0	2	0	0	0	0	2	0	2	4	110	102	113	325	0	1	1	2	1	1	1	3	1	2	2	5	109	100	111	320	109	100	111	320	320				
野辺山	109	100	111	320	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	109	100	111	320	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	109	100	111	320	109	100	111	320	320				

女子	在籍	欠席	出席者数	出走者数	出走率	到着者数	達成率
3年	134	1	133	126	94.0%	112	88.8%
2年	137	4	133	127	92.7%	120	94.5%
1年	140	0	140	139	99.3%	136	97.8%
全体	411	5	406	392	95.4%	368	93.9%

	A				B				C				B+C				D				E				F				E+F				G				合計															
	前所出発数				途中中止				到着制限後				未到着者数				到着者数				前進停止前				前進停止後				中止者数				出発者数																			
	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計								
須玉小	139	127	126	392																																									0	0	0	0				
高根	139	127	126	392	0	1	0	1	0	0	4	4	0	1	4	5	139	126	122	387	1	1	0	2	0	2	0	2	1	3	0	4	138	123	122	383	138	123	122	383	138	123	122	383	138	123	122	383	383	383	383	383
若林	138	123	122	383	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138	123	122	383	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138	123	122	383	138	123	122	383	138	123	122	383	138	123	122	383	383	383	383	383
大泉	138	123	122	383	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138	123	122	383	0	2	3	5	0	0	0	0	0	2	3	5	138	121	119	378	138	121	119	378	138	121	119	378	378	378	378	378				
まきば	138	121	119	378	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138	121	119	378	0	0	0	0	0	1	4	5	0	1	1	5	138	120	115	373	138	120	115	373	138	120	115	373	373	373	373	373				
清里	138	120	115	373	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138	120	115	373	0	0	0	0	2	0	3	5	2	0	3	5	136	120	112	368	136	120	112	368	136	120	112	368	368	368	368	368				
野辺山	136	120	112	368	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	136	120	112	368	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138	120	112	368	138	120	112	368	138	120	112	368	368	368	368	368				

3. 北海道北見北斗高等学校との交流

平成12年第74回大会以来途絶えていた北見北斗高校との強行遠足交流が、平成17年に復活した。この年は本校から男女各2名の生徒が北見北斗高校の強行遠足に参加した。北見ブルーの大空の下、4名の生徒は力の限り駆け抜けた。その結果、男女の1位を本校の生徒が占めた。快挙であった。

翌年は、本校の強行遠足が第80回を迎え、記念大会ということで北見北斗高校を招待し、男女各2名の生徒が参加した。北海道の広大で平坦なコースと違いアップダウンが多いコースに苦勞したようだったが、見事に完走を果たした。

(編集委員)

遠足道中こぼれ話

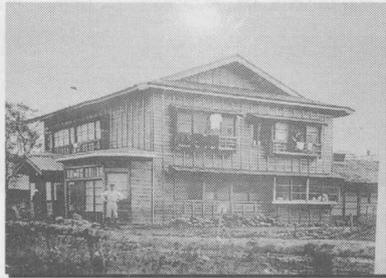
野辺山旧検印所

—野辺山を支える菊本みやげ品店—

小林欣一



野辺山の名コック長 岡部勝男さん



菊本みやげ品店(昭和30年)



経営者の菊池さんご夫婦

野辺山は、佐久往還のコースになって2回目の第38回(昭和38年)から強行遠足の本部であり、現在(77回から80回)はゴールとなっている。

野辺山と言えば名物のしじみ汁を思い起こす。岡部勝男氏ご夫妻には40年以上も前からご尽力いただいているが、10年前の丸山氏亡き後からは、しじみの購入から水道の配管や大釜のセットなど、しじみ汁作りを一手に引き受けてくださっている。その道具や器材は大量のものであり、職員・保護者はその準備をする時に、強行遠足が伝統ある行事であることを改めて知るのである。

その道具の大半を、野辺山駅前の菊本みやげ品店

で預かってきている。2階の倉庫には一高の野辺山救護検印所で使用する物品が2tトラック1台分位置いてある。商品の置き場であるはずの2階倉庫の一部を、一高の物品が占領している。そこには、しじみ汁を作る大釜が3個、水道配管用のパイプや流し台、しじみ汁のテントを照らす蛍光灯や調理用の机やいす、暖を採るための火鉢、ドラム缶や大量の薪などが置かれている。その一つ一つが古くすり減っていて、強行遠足の長い歴史が感じられ、倉庫から持ち出す度に多くの保護者の方々から驚嘆の声が上がる。年1回の強行遠足のために、40年以上荷物置き場として倉庫を提供していただき、ここでも改めて強行遠足が多くの方々の協力によって成り立っていることを思い知らされるのである。

菊本みやげ品店は、昭和37年の佐久往還コースになった当時は木造2階建てで、1階が商店、2階を6部屋の菊本旅館としていた。2階を職員などの宿泊及び本部に利用していたという。その当時から、別棟の倉庫に大釜などを置かせてもらっていたとのことである。昭和45年頃、現在の建物に立て替えたが、店のある1階の半分を休憩所として、また、昭和50年に観光案内所が設置されるまでは本部として利用させていただいた。その後、東側に旅館を新築し、昭和63年まで菊本旅館として営業していたが、その間強行遠足の宿舎として利用させていただいた。現在は野辺山高原ホテルとして貸与しているが、その後も店の2階の倉庫は快く貸して下さっている。菊本みやげ品店の店主菊池和儀氏は、昭和54年から平成7年までの4期16年間、南牧村の村長を務めた方である。改めて長年のご協力に感謝したい。

(元検印所主任)

松原湖旧検印所

伊神福陽

学校から68km、国道から少し入ったところに松原湖救護検印所はある。目の前は、小海線松原湖駅である。ここは強行遠足で唯一、個人の家をお借りして救護検印所としているところである。ご自宅を提供して下さっているのは小池竜太郎氏で、きつぷの良い奥さんと二人で職員や保護者の方のお世話を頂いている。小池氏のお世話になるのは氏の亡くなられたお父さんの代からで、40年近く続いていたことになる。小池氏のお話によれば当初は、終点が松原湖等であったりしたため国道沿いに検印所を設置したが、交通量の増加に伴い警察の指導もあり松原湖駅から小海駅までの区間は国道から離れ農道を歩くようになり、それに伴って検印所として自宅を提供して下さったとのことである。最近では食事の支度に、嫁がれた二人のお嬢さんやお孫さんにもご協力を頂いており、まさに家族総出でお世話を頂いていることになる。

強行遠足1日目の午後2時頃職員や保護者の方は松原湖駅前に集合し、検印所の設置を開始する。お父さん方の中にはアウトドアでの生活に慣れた方が必ずいて、いろいろな道具を用意して来て下さる。そして、電灯線をひいたりコースの整備をしたりと手分けをしてきばきといろいろな仕事を片づけて下さる。そのお手並みには感心するばかりである。また、お母さん方も薪でお湯を沸かし、生徒への湯茶の接待の準備を整える。そのチームワークも見事というしかない。生徒がやってくるのは23時を過ぎた頃である。検印は裸電球をぶら下げた軒先で行う。救護所ではドラム缶に薪が焚かれ、生徒は冷えた体を温めながら湯茶の接待や、つぶれた豆の手当などを受ける。そして、次の小海検印所を目指し出発してゆく。その背中をお母さん方の「頑張って」の声援が後押しする。

1. 実はスズメバチの巣があったことについて

検印所の1kmくらい手前に海尻洞門という雪崩等から道路を守る施設がある。ここにスズメバチが巣を作ることが多い。当然係の職員は夏休み中にはコースの下見を行い、このことについても

チェックを行っている。事前に発見された場合には道路管理事務所にも連絡し、除去を依頼するのであるが、当日になって発見されたことがある。慌てて管理事務所にも相談したが、巣を除去するときにすべての蜂を駆除できればよいが、外に出ているのがいた場合には帰巣本能により巣に戻ってくるため、そこを生徒が通りかかると刺される可能性が高いということであった。そこで本部とも相談し、巣の除去は行わない、巣の近くを生徒が通過するときできるだけ静かに通過させる、しかも生徒には巣のことは知らせないということにした。しかし、万一のことを考え巣の近くに職員などを配置することにした。明るくなり始めた頃から配置についたが、そこを通過した生徒の誰もが巣の存在やそこに職員がいることの不自然さには気づかなかつた。また、刺されるなどの被害もなく無事終了でき、皆が胸をなで下ろしたのは言うまでもない。

2. 簡易トイレについて

生徒用のトイレは簡易トイレのレンタルで対応している。キャンプ用のランタンを用意して下さる保護者の方がおり、夜間でも使用可能である。ある年のことであるが、強行遠足も無事終了し片づけも済ませ帰校しようとしたときにレンタル業者がトイレの回収に来た。その時の業者の話には職員一同唾然としてしまった。何故ならば「汚物の処理は済んでいますよね。」と言われてしまったからである。説明を聞くと、契約には汚物の処理までは含まれていないことが判明した。慌てて本部と連絡を取り、契約を変更して事なきを得たが非常に驚かされた事実として記憶に残っている。

(元検印所主任)

三岡旧検印所

大西 勉



故 柏木宇三郎さん(昭和54年)
自宅を「三岡検印所」に提供して下さった、義侠心にあふ
れた立派な方であった(平成18年12月逝去)



三岡から浅間山を望む

小諸をゴールとするコースになってから長野県の方の全く個人的な篤志、好意によって成り立っている救護検印所が何か所かあった。中でも「白田」と「三岡」の検印所はきわだっているが、昨年2月「白田」の依田トミ子さんが、12月「三岡」の柏木宇三郎さんが、逝去された。御両人の生前の「強行遠足」への半世紀に近い筆舌に尽し難い御支援、御献身にあらためて厚く謝意を表するとともに御冥福を心よりお祈りするものである。

三岡検印所が開設されたのは、男子の終点が小諸になった昭和40年(1965年)、以来強行遠足実施中の女生徒の輪禍により距離を短縮し、野辺山を終点とする新コースが実施される前年、平成14年(1902年)まで40年近く柏木家の全面的な協力のもと三岡での救護、検印活動は続けられてきた。

開設当初は気骨ある人情家の先代(柏木宇三郎氏の御尊父)が健在で、家族の皆さんにいつも強行遠足のためにできることはなんでもしてやれと言いつつ、亡くなられる時にも「甲府一高の強行遠足が続く限り協力してやってくれ」と言い残されたと聞いている。

父親にもまして人情家で熱血漢の柏木宇三郎氏

は、舅や夫の心意気を理解し、本当に心優しい奥様とともに先代の遺言を守り、強行遠足への万全の協力、支援の体制をつくってくださった。

「年若い少年が自分の力の限りを尽くし、精一杯がんばる姿はまことに尊いものだ。」柏木さんがいつも口にしていた言葉である。

三岡は終点小諸の一つ手前だけに、ここを通過する生徒は小諸必着を心に期している。制限時間ぎりぎりに来る者ほど疲労困憊しているが、何としてでも小諸まで行きたいとの願いは強い。強行遠足の話題となると柏木さんがいつも思い出す生徒がいる。その生徒は三岡に制限時間を大幅に過ぎて到着し、やむなく前進停止の措置を受けたが泣き続けて前進を懇願した。柏木さんはその姿を見て生徒の純粹さ、真剣さに強く打たれた。そのすぐ後生まれたお孫さんに、生徒と同じ名前をつけられたのである。

開設間もない2、3年は、職員、PTAのスタッフは小諸の旅館に宿泊し、時間を見計らって三岡に戻り、柏木様の敷地の一部をお借りして勤務した。それでは大変だろうとの柏木さんのお心遣いで、お宅で宿泊も食事も提供していただくことになった。それからは毎年職員、PTA合わせて10人から多い年は15人ぐらいのスタッフがお世話になっている。食事や寝具の支度などは奥様だけではなく長男浩氏の奥様、嫁ぎ先から駆けつけてくれる3人の娘さん、時にはお孫さんも手伝ってくれるというまさに家族総動員の協力体制である。

検印所に着いた生徒にはリンゴ4箱分を用意し、一個一個皮をむいて渡してくれ、他にも柿、氷砂糖、茶なども用意して下さる。柏木さんのお宅はもとも国道沿いにあったが、そこでの検印活動の時代には生徒が土足のままでもトイレが使えるようにと廊下に新聞紙を敷いてくれたり、台所も自由に使えるように配慮していただいた。

昭和60年に道路沿いの家屋を取り壊し、その位置より少し奥の高台状の敷地に新家屋を建築された。柏木さんの家業は建築業で、旧家屋の跡地に資材入れの大型倉庫を新築された。検印活動をしやすいようにとスペースを十分取り、生徒を迎え検印を行う専用の道路側に向けた幅の広い入口を作っ

さった。しかも強行遠足用に水道の蛇口を残し、行事の折りには仮設のトイレを自分の手で設置していただいた。スタッフは新居で食事と宿泊のお世話をいただき、時間になると倉庫をそのままお借りして検印救護活動を行うのである。倉庫、水道のほか照明器具、机、椅子、釜、鍋、ストーブなど一切提供して頂き、大型物品は全く学校から運ばなくて済んだのである。

スタッフは行事の前夜心尽くしの手料理をご馳走になり、帰りには季節の野菜や土地の品を土産に頂戴した。

筆者は一高在職の12年間、三岡検印所の主任を務めた。そんな縁で今でも柏木家からは親戚以上のご厚誼にあずかっている。無事勤務を終え、信濃路から甲斐路へと向かいながら、毎年毎年この行事を支えて下さった信州人のやさしさ、あたたかさをしみじみと思ったものである。(元検印所主任)

*小文は、昭和58年から6年間、三岡検印所の主任を務められた筆者の前任の小宮山先生の紹介文を大いに参考にさせて頂いた(というよりかなりの部分そのままお借りしている)ことを付記しておく。
小宮山先生とは柏木様への思いを共有し、敬愛する先輩、後輩の関係でもあるので御寛恕を乞う次第である。

全線巡視係

花輪秀剛

全線巡視係は現在、職員の手車5台、PTAの手車2台、同窓会の手車1台の計8台で任務にあたっています。主な任務は危険個所の把握と本部への連絡、生徒の歩行指導と歩行人数の確認、緊急時の対応です。生徒が安全かつ事故のないように歩行できるよう細心の注意を払いながら勤務しています。

巡視係としてコースを回っていると、生徒が最後まであきらめずに歩く姿、リタイヤしそうな友達を励まし一緒にゴールしようとする姿など、普段と違った一生懸命な姿を見ることができ感動します。また、全く面識のない生徒、保護者、同窓生が、この強行遠足を通して交流の機会を持ち、声を交わし合うなど、他の行事では決して見ることのできない光景をこの強行遠足では見ることができます。こんな素

晴らしい強行遠足を、形は変わっていくかもしれませんが、いつまでも続けていってほしいと思います。

(前線巡視係主任)

葦崎救護検印所

浅川和重

検印所設営開始の午前4時40分頃、ここ葦崎の地はまだ暗闇につつまれています。車のヘッドライトを頼りに、テントたて、給水の支度、ライン引きといった業務を手分けして行い、一通りの準備が終わる頃、あたりは明かりが不要なくらい白んできます。

現行のコースとなつてからの葦崎救護検印所は、塩川橋を渡ってすぐ右折し、市街地へと向かう道の左側、峡北地域振興局に開設されています。日の出を迎える5時50分頃、橋を渡り終えこちらへまっすぐ向かってくる先頭の男子生徒の姿が見えると、検印や巡視の業務、拠点指導が本格的に始動です。到着する生徒たちは、学校を出発して最初の検印所ということもあり、まだまだ皆元気。ゆっくり休む者もなく、水分補給を済ませるとすぐに出発してゆきます。コースに並行して走る線路上を上り下りの中央線列車が行き交うようになると、ほとんど切れ目なく生徒が到着。6時30分からの20分ほどが、この検印所の最もにぎやかな時間帯となります。

補助員の卒業生も含めると総勢約40人ほどのスタッフが業務に当たる当検印所と担当コース区間は、水道やトイレが遠かったり、要指導の拠点箇所が多かったりとたいへんな面もあります。しかし、男子のみとはいえ、元気いっぱい先を急ぐ生徒たちの表情を間近にできる明るい雰囲気が一番の特色といえるでしょう。

7時35分の前進停止、7時50分の到着制限時刻を待つことなくほとんどすべての生徒が検印所を通過。最後尾の進行と並行して撤収作業が始まります。9時を迎える頃、全業務が終了、解散となります。保護者、看護の方々、お疲れ様でした。職員と補助員は、次の勤務地野辺山へと出発です。

(検印所主任)

中田検印所

鈴木俊宏

中田検印所は今コースになってから新しく設定された検印所である。そのため他の有名な検印所ほど知名度もなく、また男子のみが通過するポイントでもあるため女子に至っては「そんな検印所があったんですか」ときかれる始末である。

私はその初代駅長(検印所係主任)としてこの任に着いたわけであるが、なにせ全く何もないところからの準備だったので、最初は右往左往の連続であった。

しかしながら、検印所が「道の駅にらさき」の施設を利用するかたちであったり、保護者の方々の献身的なご協力の下でなんとか検印所業務をやりおおせてきたというのが実感である。

一高をスタートして2番目の検印所であるため、トップ生徒が通過するのはだいたい6時半を回った頃であろうか。それまでにテントを設営し、救護・給水の準備をしてから拠点指導場所に赴くため例年、協力者の方には早朝5時に集合していただいている。我々教職員はそれに先立ち4時過ぎには現地に着するようにしている。集合時間より早くお見えになる熱心な保護者がいるからである。

今年も朝まだき、世間は寝静まっている頃に一高を出発して現地に向かったわけであるが、「道の駅」は本来ドライブインの施設であるため、到着するとそこかしこに長距離便の大型トラックが休憩をとっていたのであった。そんなに広くない駐車場に何台も止まっているので、準備するうえで非常に圧迫感があり、「ちょっとやりにくいなあ」とも思った。そうはいつても仮眠をとっているドライバーにどいてくれとも言えず夜明けを迎えた。

いよいよ生徒が通過する時間が近づいてきた頃、ドライバーも目を覚ましたようだが動きはなかった。中田では検印した後、駐車場を横切りサイクリングロードに出るようなコースになっているので、大型トラックはいないのにこしたことがない。私はできるだけトラックを避けるかたちで生徒を通過させようかなと思っていたところ、ドライバーがもぞもぞと車から降りてきた。それから大きく伸びをし

てからまた運転席に乗り込み、こちらに目で合図を送ってからトラックを移動してくれたのであった。

「トラックの運ちゃんいいところなあ」と私は思ったのだった。(検印所主任)

須玉検印所

高橋正文

須玉の検印所は男子のみ通過する場所です。学校を出発して約25km、全行程の丁度半分位の距離です。今年(第80回)は天候にも恵まれ、風もなく気温も走るのに快適であったためか、生徒も概ね順調に通過していきました。ここまでは標高差もスタート地点と大差なく、皆元気よく到着し思い思いに休憩しています。ちょっと水分補給するだけで直ぐ次の検印所に向けてスタートする者、自分のペースでしっかり時間をかけて栄養補給をする者、足を痛め到着するなりテーピングをもらいぐるぐる巻きにする者など様々です。自分の体調をあまり気にしない者、逆に必要以上に気にして手当てに余念のない者など生徒それぞれの性格が垣間見れて興味深いです。平坦な道程だったコースもこの先から一気に標高が高くなります。まきば検印所まで約1000m登ることになり、山登りにも匹敵する過酷なコースに、生徒も必死になって挑みます。須玉検印所はそういう意味では第2のスタート地点とも考えられます。

(検印所主任)

高根検印所

松島弘哉

高根検印所は医療スタッフを含め50人を超える協力者で運営する大規模の検印所である。協力者も多いが、担当区間も約8.5キロと広いため、18カ所の拠点と巡回・給水・看護の業務に振り分けると、ローテーションも組めない。約五時間連続して業務に当たっていただいている方々に感謝するとともに、強行遠足が保護者を始めとする協力者なしでは

一 対 談



【77回 検印所の様子】

78回は大雨の中強行された。大泉通過者は僅か1名。途中中止になったため、8名がずぶぬれで大泉に到達した。このとき、いずみ荘の支配人が全員に風呂をサービスし、着ていた服を乾燥機で乾かしてくれた。



【78回 大雨の中先輩と手を繋いで到着】

79回は薄日で絶好のコンディションであった。当初から落伍者をださないよう、保護者職員全員で生徒を励まし、声を掛けて追い立てた。その甲斐あってなんと女子の中止者はゼロ。男子は20名であった。

この回からポカリスエットが配付されたため生徒の人気は高かった。すぐなくなってしまったので近くのセブンイレブンで追加した。またこの年、大泉村は北杜市に合併されたため「いずみ荘」は市の委



【79回 お茶がとってもおいしい】

託となり経営者が代わった。食堂が改善され、いろいろなメニューが増え、保護者には好評であった。

80回は晴天に恵まれた。前回に続き日曜日開催のため、交通量が心配された。休みのためか協力者が多くまた大泉は人気があるのか、2年目、3年目という保護者がけっこういて拠点指導、区間巡視ともにとても順調であった。生徒への指導も良く、中止者は僅か8名という好成績であった。ただ駅長がうっかり大テントの天幕と三方幕を間違えたため、天幕にブルーシートを転用し、派手なテントになってしまったのにはスタッフ全員苦笑いであった。

(検印所主任)



【80回 大泉検印所のスタッフ一同】

まきば公園検印所

依田 源

須玉から続く長い上り坂が、次第、次第に急になり、ついには山登りかと思うほどになった所に、まきば公園検印所はある。大泉検印所から、まきば公園検印所を越えて東沢橋までの5.6kmの区間は、標高差345m、平均斜度6.0%。距離こそ及ばないが、平均斜度では、箱根駅伝第5区間、箱根湯本-芦ノ湖間の5.7%を上回るコース最大の難所である。この坂を、皆懸命に上ってくる。ある者は、自分で自分を励ましながらか、自分と戦いながら、またある者は友と助け合いながら、懸命に上がってくる。それを、ブラバンOBが校歌や応援歌の演奏で迎える。この激励演奏はいつの頃から公認となったのか。旧コースでは野辺山のJR最高地点で夜通し演奏していた。それが新コースになって、まきば公園に移ってきた。吹きさらしの冷たい風には負けない力強い演

奏。歩行中この演奏が聞こえると、胸にあついものがこみ上げてくると聞く。検印所でしばらく休憩した後、この演奏に、また気持ちを奮い立たせてもらい、清里へ向かう。

(検印所主任)

清里検印所

古屋 宗

清里救護検印所はにぎわう清里の町並みから離れた、野辺山方面に2kmほど進んだ、学校寮地区の中、目黒区立八ヶ岳林間学園の施設・敷地をお借りして開設しています。管理人の平野さんご夫妻には、毎年早朝より御協力をいただいています。八ヶ岳高原ラインから10mほど入った場所で、落葉松の林に囲まれた静かな空間です。日中は太陽の光が暖かく、紅葉している落葉松の黄色い色に光が照りはえて、高原を感じさせてくれます。しかし、朝7:30の集合の頃は日射しも弱く、冷たく透明感ある空気に1300mの標高を実感させられました。

清里はゴール野辺山の一つ前の救護検印所であるため、短い休息で多くの生徒が野辺山へと向かっていく救護検印所です。落伍する生徒も少ないなか、前進停止時刻を過ぎて疲れ切った様子で到着した生徒から検印カードを回収するときは、つらいものがありました。決められた時間の中での行事ですのでいたしかたないことではあるのですが……。

御協力頂いた保護者の方々には、満足に昼食の時間もとれないなか、早朝より巡視に、歩行指導に、給水にと御協力頂き感謝いたしております。

(検印所主任)

野辺山検印所

伊神福陽

学校を出発してから約55km、標高1350mのところ、野辺山救護検印所がある。ここはJR最高駅の小海線野辺山駅の目の前にあり、強行遠足の行われる

9月・10月の休日には駅を利用する観光客も非常に多い。野辺山救護検印所は現在は強行遠足のゴールとなっており、すべての生徒がここを目指してひたすら歩き続ける。無事ゴールを果たした生徒に待っているのは、野辺山検印所名物の熱いしじみ汁である。湯気の立ち上がるしじみ汁は、歩き疲れ空腹の生徒には何よりもてなしであろう。

このしじみ汁を丹誠込めて作って下さるのが岡部勝男氏ご夫妻である。しじみ汁の歴史は古く、第3回にコースが松本方面に設定されたときからだという。岡部氏も松本コースの時から協力者で、したがって、40年以上の長きに渡りご協力いただいていることになる。氏はアスファルトの広場をたちまちのうちに大調理場に変えてしまう名人である。水道の配管や調理台や大きな釜のセットなどほとんど一人でこなしてしまう。そして、ご自身が選んだしじみを丁寧に洗い、おいしいしじみ汁に仕上げている。男子のトップがゴールする10時頃には、おいしいみその香りが検印所に漂うことになる。協力者のお母さん方と一緒に、にこにこしながら生徒にしじみ汁を勧める岡部氏ご夫妻には、これからもご協力をいただきたいと願っている。

(検印所主任)

－ 対 談 －

「今、語る167.1kmへの道」



岩間孝吉氏

強行遠足最長到達記録者

昭和14年(1939)甲府市生まれ。甲府第一高校、山梨大学学芸学部卒。兵庫教育大学大学院修了・教育学修士。公立中学校教員を経て、山梨英和中学校・高等学校第21代校長として勤務。

【現在】

財団法人・山梨YMCA理事

NPO法人・山梨ホスピス協会理事



美しい青木湖と中綱湖(手前)



聞き手・加藤 忍(編集委員)

◇加藤 「強行遠足で日本海を見た先輩がいたんだよ！」私が高校生の時、先輩方からそのような話を聞かされてきました。岩間さんはすでに伝説上の英雄となっておられたわけですが、今日はそのような方と対談でき、大変光栄に思っています。

岩間さんは、昭和14年のお生まれ。甲府一高昭和33年卒です。私が昭和54年卒ですので、岩間さんから見れば私は子供の世代、まして今の高校生は孫のような世代になるかと思います。いろいろ、ぶしつけな質問をさせていただきますが、どうぞご容赦ください。

さて、先ほどの出発式でお話をいただいたのですが、私はお話を聞くうち、自然と涙があふれて止まりませんでした。・・・。

■岩間 高校3年生の時、167.1kmという思っても見なかった記録を残すことが出来ました。振り返ってみると、「一生懸命できた、そこに自分を打ち込んだ」という気持ちが蘇ってきます。そのような気持ちが、自然と体験者には伝わるのかもしれませんが、過去のことですが、私自身かけがえのない体験でした。

◇加藤 ご両親からは、どのような教育を受けられたのですか。

■岩間 父は明治生まれで、一代で農機具販売店(岩間農機株式会社)を築き上げました。しつけには大変厳

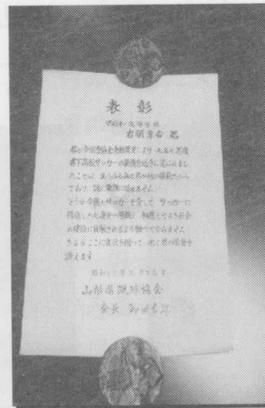
しい人でしたね。母は、何でも受け入れてくれる心の広い人でしたが、良く「~らしくしなさい」つまり高校生の時は「高校生らしくしなさい」としつけられました。思春期の私には、両親への抵抗感もありましたが、今振り返ってみると、厳しい父と包容力のある母の教えが、今の私の土台になっていると思います。

◇加藤 双子のご兄弟でお生まれになったそうですが。

■岩間 はい、一卵性双生児で生まれました。私が次男で弟が三男になります。両親は、双子なので同じように育てようとしていたようです。そのため、小学校から高校まで同じクラス、同じ担任の先生でした。私自身、兄弟仲良くという気持ちがあるものの、内心はライバル心もあり複雑でした。大学の進学先は自分で決めたのですが、結局兄弟そろって山梨大学に進学することになりました。卒業後、私は埼玉に、弟は新潟に就職し、初めて離れ離れとなりました。しかし28歳の時、兄弟そろって結婚しました。お相手も実に良く似たタイプの女性たちでした。



高校時代の岩間氏



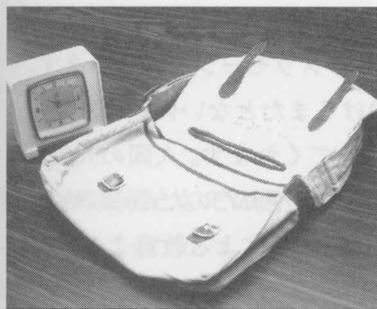
山梨県最優秀サッカー選手の表彰状
学業不振に悩むも、サッカー一歩をやめなかった

◇加藤 高校時代を振り返っていただきたいと思います。岩間さんの高校時代、すでに高度経済成長が始まり、1956年(昭和31)には国際連合への復帰と、なんとなく、日本全体が明るい雰囲気になっていったような印象を受けるのですが……。

■岩間 私たちから大学入試が大変厳しい時代に入りました。いきなり入学時から「いいかげんな生活態度や勉強では、大学にはいけないぞ」と先生方からおどかされました。当時すでに英語と数学では、学習到達度に応じたクラス編成となっていました。勉強に追い立てられるような高校生活で、それに落ちこぼれてしまった私は、相当鬱積したものが胸の内にはありました。

それでも旧制中学以来の自由な校風が残っていました。ほうばという高下駄での通学は禁止だったのですが、バンカラ気取りでこれを履いてくる者がいましたし、それを注意される先生方もいらっしやいませんでした。

部活動は、1年生の時に化学部とHiY部に、2年生からは体を鍛えなければいけないと思いサッカー部に入部しました。



最長到達記録賞の置時計と母親お手製の肩掛けカバン。母の愛情が伝わってくる



築場駅前に広がる中綱湖。岩間氏が見たのは日本海ではなく、仁科三湖の一つ中綱湖であった



表彰状
岩間氏は、24時間終点地無制限時代の最長到達記録者である167.1km(築場)

◇加藤 さて、「強行遠足」を振り返っていただきたいと思います。

■岩間 1年生の時は、体力が無く様子もわかりませんでしたので、みんなと一緒についていこうと思いました。真中から後ろのほうでした。途中から雨が降り始め、上諏訪を通り過ぎようとした時「体を拭いて、列車で帰りなさい」と途中中止の指示が下りました。

2年生の時は、サッカーのおかげで体力が付き、予行演習(三川一周の36km)で学年2位となり、先生方から期待をかけられました。しかし、本番では葦崎の穴山橋で腹痛のため無念のリタイアとなりました。「これでは参加したことにもならないよ」と先生から言われ、悔し涙に泣きました。不思議な事に、弟も腹痛のためリタイアしてしまいました。「来年こそ、コンディションを整え少しでも遠くへ行きたい」と肝に銘じました。具体的には、3年生になってもサッカー部をやめませんでした。土日の休みも無く毎日練習しました。さらに練習後、雨の日も雪の日も毎日、湯村山までのランニングを自分に課しました。

3年生の時は、天候やコンディションが気になりましたが、「やれることはやった、あとはマイペースで歩きぬこう」と決心しました。2年生の時に母が作ってくれた「肩掛けカバン」に選び抜いた携行品を詰め込みました。靴に関しては、最初の三分の一は運動靴で、次の三分の一は草鞋で、最後の三分の一は運動靴で行こうと計画を立てました。全行程草鞋の人もいましたが、それには問題があると思っていました。三分の一のみ、通気性の良い草鞋にする計画だったのです。

昭和32年(1957)10月14日、その日は本当に良い天気でした。そうです良かったんです。午後4時、甲府一高を出発しました。当日の私の足どりは快調でした。トップで松本に到着すると、そこからは体育の先生が自転車で並走してくださいました。「大町駅」の手前から先生も歩かれました。「木崎駅」に着くと「ここが先輩の最高到達地点だよ」と教えてくれました。私は疲労困憊で、「はい」と答えるのが精一杯でした。「おい、なにか飲まないかと心配だよ。水か牛乳を飲みなさい」と先生がおっしゃり、駅前で牛乳を買って飲もうとしました。しかし、体がまったく受けつけないのです。無理して飲むとこれは大変な事になると思い、牛乳を吐き出し、水で口をすすぎました。残り時間は2時間、精根限り歩こうと思い、重い足を引きずりながらやっとの思いで「築場駅」にたどり着きました。目の前に中綱湖が広がり大変心が和らぎました。時刻は午後3時45分でした。「あと15分あるけれど、次の白馬駅までは10kmあるから無理だよ」と先生がおっしゃいました。「はい」と私は答えました。駅長さんから検印をいただき、ベンチに腰をかけたたん、私の体は言うことが聞かなくなっていました。先生に抱きかかえられて階段を上り、松本行きのSL(蒸気機関車)に乗り込みました。

◇加藤 劣等感にさいなまれ、生きる意味に苦悶されながらも部活動をやめず、常人には到底なしえない、最高到達地点「築場」167.1kmを達成された瞬間ですね。最後に、後輩へのメッセージをお願いします。

■岩間 「強行遠足」は、甲府一高の得がたい伝統行事です。全力で自分をぶつけるまたとない体験の場です。全力で自分をぶつけた者には、その後の人生に大きな勇気と自信を与えてくれます。人間の人生は、山あり谷あり困難の連続です。私もそのような場面に直面した時「あれだけやれたのだから、やれるだけやろう」と自分を奮い立たせ、困難を乗り越えてきました。百万遍の言葉による教育よりも、一つのかげがいのない、この貴重な体験から多くのことを学んだのです。

* 岩間孝吉氏は、長い教職生活を退かれ、現在はNPO法人・山梨ホスピス協会理事として、山梨県立中央病院「緩和ケア病棟」で末期がん患者のための終末医療に携わるボランティア活動と、財団法人・山梨YMCA理事として、青少年の健全な育成のためのボランティア活動をされている。

岩間氏は、「強行遠足」に関する講演については、これまですべて辞退されてきた(その偉業を誇りたくないという氏の謙虚な精神のあらわれと思われる)が、このたび、望月同窓会長の尽力で「強行遠足出発式における生徒激励」として実現し、生徒に深い感銘を与えられた。この対談も、その折に実現したものである。

次に、出発式における「生徒激励の全文」と、『佐久往還強行遠足20周年記念誌』に寄稿された手記を掲載する。

強行遠足出発式における生徒激励・全文

「きみは うみ 見たのかと問う 信濃路に」

岩間孝吉

その日、1957年 昭和32年10月14日 月曜日 午後4時、合図とともに校庭を出発しました。

前の年に葦崎の先の穴山橋のところで落伍して帰ってきた苦い経験から、今年こそはマイペースを守ることを心に決めていました。

ゆっくりスタート。30km過ぎるあたりで、先頭になり、走り歩きを交互にして116kmの松本で朝を迎え、再び走り出しました。当時、松本からは先頭者には確認のため先生が自転車で併走する決まりでしたので、私は自転車の先生と30kmくらいを走ったでしょうか。

24時間で、JR大糸線沿いに日本海の糸魚川を目指すこのコースでの先輩の記録は、大町の先の木崎でした。その木崎を通過した時、制限時間まで約2時間残ってはいましたが、疲労困憊し、歩き続けてきた足はもう自分の身体の一部ではないような感じでした。次の海の口駅を通過し、その次の築場駅に到着した時、駅の大時計は、3時45分をさしていました。あたりを見渡す気力もなくなっていました。ふと目に映ったのは、駅の外に広がる湖でした。

自分でも信じられない167kmでした。どんな力が、なぜ私をそこまで行かせたのか、自分でもよくわからないのですけれど、私の人生にとって、かけがえのない経験になっています。

80周年の強行遠足に参加される皆さん、マイペースでチャレンジして下さい。ご健闘を祈ります。

「きみは うみ 見たのかと問う 信濃路に」 (1958年 昭和33年卒 岩間孝吉)

ありがとうございました。

手記

岩間孝吉

青年期の象徴としての強行遠足

人生がよくマラソンにたとえられるが、高校時代の強行遠足は、わたくしの青年期をよく象徴しているように思われる。16歳の高校1年時代、甲府一高に入学したわたくしは、2、3年生にまじって伝統の強行遠足に初参加した。とにかく、24時間で行けるところまで行ってみようとはりきったが、雨のため上諏訪で中止となり帰ってきた。17歳の高校2年時代、サッカー部で鍛えられつつあった足にものをいわせて、少々気負いたって出発したけれども、穴山橋で腹痛のため落伍して帰宅する破目になった。

18歳の高校3年時代、学業の面での不振などによる劣等感にさいなまれつつも、サッカー部の練習にはしがみついていた。また、自己の精神面での充実を求めたかったのだろうか、ハイY(高校YMCA)運動に加わって活動を続けていた。

24時間で167kmを行く

1957年(昭和32年)10月14日、その日はうすぐもりだったが、比較的暖い日だったように記憶している。学帽、学生服、白いトレパン、くつ下にアップシューズ、という服装であった。腰のベルトには手ぬぐいをはさみ、ポケットには、学生証、検印カード、ちり紙、帰りの汽車賃、手袋などを入れた。肩から斜めにかけて小さな布カバンには、約3食分の小さなめにつくったおにぎり、わらじ1足、キャンデー(ドロップ)、ふろしきなどを入れてあった。

午後4時、甲府一校校庭を太鼓の合図とともにスタート。走る集団の中程より少しうしろのところを、自分なりのペースで走り続けた。葦崎の検印所を通る頃は大勢だった人の群も、少しずつまばらになり、釜無川の土手の辺を走る頃は、2年生のK君といっしょになって2人で励ましあいつつ走り続け、台ヶ原の辺で先頭を行くと思われる数人に追いつき、追い越して国界橋の先まで完走したように記

憶している。富士見には、夜10時5分に到着したが(41km地点)、この辺までの平均時速約7kmである。

夜の甲州街道を松本方面を目ざして走り歩き、歩き走りを交互にくりかえすやり方で塩尻まで行った。途中、岡谷(72km地点)には夜中の0時57分着。富士見、岡谷間はややペースをあげ、平均10kmくらいで走った。例の岡谷のしじみ汁を立ったまま、足ぶみしながら、寒い外気の中ですすり、検印してもらおうと足早に出発していったように思う。富士見から塩尻峠あたりまでの間は、用意していったわらじをはいて走り歩いたように記憶している。全行程の中程の3分の1にわらじをはき、初めと終りはアップシューズを用いたことになる。

暗やみの塩尻峠の検印所で、先生方がたき火を明るくして待っていて下さった。夜明けの前が一番寒い時間帯である。おり悪しくも、2人で歩き続けてきたK君が、峠を下りはじめた頃から身体の不調を感じ、2人はペースをおとした。松本検印所に2人で着いたのは、10月15日の朝8時5分であり、朝の通勤・通学の人たちの行きかう松本の町であった。

残りのおむすびとキャンデーだけをふろしきに包みなおし、肩からかけて、他の不用になった荷物をおき、少し身軽になった。K君も検印所の先生方がみて下さり、1人で先をいそぐことになった。塩尻からゆっくり歩きつづけたおかげで、体力も少し回復したように感じられた。

松本から先は、先頭の人だけ付添いの先生が交代で付いて下さるとのことで、体育科の先生が自転車に乗って走り、わたくしはマラソンのような調子で走ることを再開した。松本から豊科(127km地点)あたりまで、平均時速10kmくらいで走りつづけた。2・3人の先生が交代で自転車による伴走をして下さったが、松川あたりからだったろうか、先生も自転車でなくいっしょに歩いて下さる方が1人付かれた。豊科あたりから少しペースが落ちはじめ、大町(151km地点)ころには、平均時速6kmくらいとなり、大町をすぎると時速5kmくらいにダウンした。

大糸南線、木崎駅に着いたとき、ここまでが今までの最高記録のところだよ、と先生が言って下さったことをおぼえているが、疲労困ぱいし、あまり

明瞭な返事もできなかつたように思われる。木崎(156km地点)に、午後1時45分着、制限時刻の4時まであと約2時間ちょっと。もうこのあたりでは、水分を補給するくらいで、食物はのどを通らない有様だった。木崎の次の海ノ口までは約3km半なので、とにかく1つの駅だけはがんばって行こうと思い、自分を励ましつつ歩く。

海ノ口に着くと、1時間半くらいの時間がさらに残っていたが、次の築場までは、約7km半ある。何とかもう一つくらい行けるのではないか、1時間半残してストップは残念だ、との先生の励ましをいただき、足はすでに棒のようであったが、行くだけ行ってみようと心に決め、歩きはじめる。それでも大町から築場(167km地点)まで平均すると、時速5kmくらいで歩いたことになる。築場の駅舎が見えた時には、本当にほっとした気持ちになっていた。駅の待合室のベンチにすわって大きな掛時計をみると、3時45分であった。

先生が、次の駅は白馬(当時は築場と白馬の間には駅はなかった)だが、15分ではとうてい行けないので、ここで止まることにしようと言って下さり、駅長さんに検印カードの印をいただいて再びベンチにすわったら、どっと体中の力がどうにかなったという感じであった。腰から下の筋肉が硬直し、容易に曲がらない有様であったが、頭の中ではポーとした気持ちのまま、松本行きの汽車を待っていた。

経験とは最良の教師である

20年以上たった今、強行遠足という学校行事を通じて受けた教育、学んだことの意味は、何だったのかと考えてみると——これを体験することによって、自己教育の場を得たこと(自分自身を強行遠足という場に投入することによって自己教育すること)だと思ふ。

百万遍の言葉による教育よりも、1つのかけがえのないこの体験が自己をつくる、といったら言いすぎだろうか。こういう体験による自己教育の場を周到な準備によって用意しつづけて下さったことを感謝したいと思う。また、そういう場に自己を投入し、自己をみきわめることの重要性を感じられる青

年(高校生)の感性(人間性)を貴いことだと思わずにはいられない。

『佐久往還強行遠足20周年記念誌』
(1982年)所収

— 追 想 —

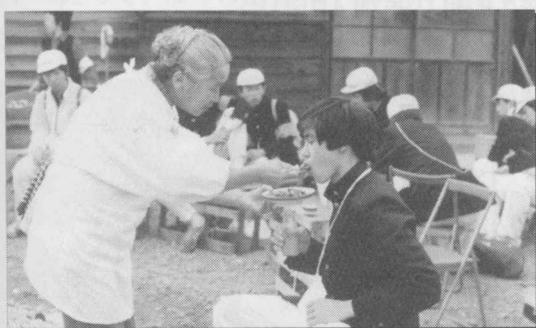
「ありがとう、白田のおばあちゃん」

依田家と甲府一高とのご縁

加藤 忍



依田トミ子さんとお孫さん
(昭和54年)



「えらかったじゃろう、さあたべなさい」
やさしい白田三反田のおばさんたち(昭和54年)

■40年間の恩

一高生をわが子のようにお世話くださった「白田のおばあちゃん」こと依田トミ子さん(1911-2006)が、平成18年2月22日逝去されました。95歳でした。

依田トミさんは、夫の寿倭次(すわじ)さんとともに昭和38年(1963)の「第38回強行遠足」より一高生のお世話を始められ、途中、昭和43年(1968)に寿倭次さんが他界された後もその遺志を引き継ぎ、平成14年(2002)の「第76回強行遠足」まで実に40年間も、全身全霊をかたむけて一高生をお世話してくださいました。私たちは、その恩を一生忘れることは出来ません。ここに依田家とのご縁と、ト

ミ子さんと接しられた方々からの思い出やトミ子さんの手記を記すことによって、生前のご厚誼にあつく感謝申し上げ、心よりご冥福をお祈りしたいと思います。

■依田家とのご縁

昭和37年(1962)より「小諸方面(佐久往還)」にコースが変更され、男子は松原湖(66km)が終点地となった。しかし、このコースでは物足りないとい多くの生徒から不満が出たため、翌昭和38年(1963)より中込(87km)に延長された。このため、途中の白田に救護検印所を開設する必要性が出てきた。本校職員が適地を探していたところ、白田町三反田の交差点にある依田酒店が目にとまった。お伺い事情を話したところ、ご夫妻は快くお受けしてくださり、それが今日までのご縁につながっていくのである。

■依田寿倭次さんの紹介

◇山梨県人からの恩

寿倭次さんは、大正2年(1913)佐久郡の山村に生まれ育った。大正の末年から昭和の初年にかけて、日本経済は深刻な不況状態にあり、耕地の少ない山村の若者たちは次々と出稼ぎに出て行った。

昭和4年(1929)、16歳に成長した寿倭次青年は、養蚕の盛んな山梨県に行って働こうと決心した。そこで得られる日当50銭を貯金しながら、それを元手にいずれ佐久平(白田)に出て、自分で仕事をしてみたいという夢を持っていた。

その年の養蚕は、天候不順にたたられて病気が発生し、各地の蚕は全滅に近い状態であった。加えて、アメリカの株式市場暴落に端を発した世界恐慌が起こり、生糸の価格は暴落していた。このような状況下で、山梨県北巨摩郡(北杜市)に出稼ぎに行ったところで、仕事にありつける状況ではなかった。夢破れ、一人さみしく山道を引き返すこととなった。日はだんだんと西に傾き、夜となり空腹はつるばかりである。空腹は苦痛に変わり、その激しさは増

すばかりで、ついに一軒の農家の戸をたたき、事情を話して助けを求めたのである。その農家の主婦は、やさしい心の持ち主で塩むすびを握って渡してくれた。

「地獄に仏」とはこのことである。家に帰り、そのことを語り一夜は明けてしまった。人に対する親切の大切さをしみじみ知らされたのである。それから、親切をむねとして働き、若き日の夢の実現へと進んでいった。

昭和10年(1935)、佐久平(臼田)に移り住み、今まで蓄えた全財産を投入して耕地3反(30アール)と動力糶摺り機を購入した。労働に励み、やがて10人の子供にも恵まれた。子供たちの将来を考えて、彼は酒屋と牛乳販売店の経営もすることとした。牛乳の販売はすべて子供たちに任せ、それによって労働の尊さ、独立精神を培わせた。彼の一家は、全員で労働と奉仕に励み、生活を高め円満な家庭を築いていった。

寿倭次氏が、救護検印所の開設を快くお受けくださったのには、若き日に山梨県人から受けたその恩に報いたいという気持ちがあったからである。

◇寿倭次氏の遺言

昭和43年(1968)に寿倭次氏は他界された。死の直前、彼は枕元に家族を集め、「甲府一高の強行遠足への奉仕は、自分が死んでからも続けるように」と言い残して息を引き取られたという。享年55歳。

■トミ子さんの真心

寿倭次さんは、酒屋と牛乳販売店を経営されているので、救護検印所の采配は、妻のトミ子さんが振るわれた。前日の午後5時ごろ甲府一高を出発した生徒たちは、深夜2時から正午まで400人がばらばらになって臼田を通過する。家族総出で接待にあたるが、それでも足りないので近所のおばさん7、8人を頼んで接待にあたる。真夜中の1時頃から消防器具置場前で火をたいて生徒の目印にし、ご飯を炊きお湯を沸かし、にぎりめしを作る。お茶・お菓子・リンゴ・牛乳なども出す。疲れきった者には休養もさせる。靴ずれの手当てもしてやる。その奉仕に皆が感動した。

強行遠足が終わると、トミ子さんや三反田のおばさん一同あてに、学校、生徒そして保護者から礼状や年賀状がたくさん届く。依田さん夫婦は、「8月になれば学校からまた頼んでくるだろう、真心で世話をしてあげたい・・・」とわが子を待ちわびる思いで心待ちにされていたそうである。

平成15年(2003)からのコース変更により、臼田は伝説の地となってしまった。トミ子さんは、ご家族に「寂しいねー、けれど仕方がない。」とおっしゃっていたそうである。その後、トミ子さんは目に見えて衰弱されていった。それでも強行遠足が近づくと「頼むから私を車に乗せて、一高生を応援させておくれ」と懇願されたそうである。平成18年2月22日、トミ子さんは冥土へと旅立たれた。一高生に限りない慈愛を与えられて。

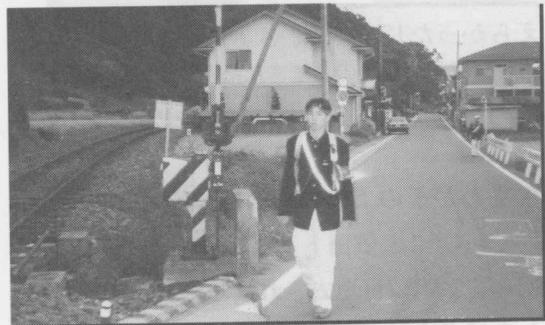
(編集委員)

■ 参考文書

- 『佐久新報』(1967年4月5日号)
- 『佐久往還強行遠足20周年記念誌』(1982年)
- 「依田寿倭次伝」渡辺富弘氏
- 『強行遠足70回記念誌』所収(1997年)

リンゴの神様

深澤太郎



朝の八千穂、一步前

一高は古い学校だけあって、数々のイニシエーションが用意されている。応援練習では団員の理不尽な要求に耐え、強行遠足では到底完走できそうもない距離を歩かねばならない。時代錯誤と嗤う者もいるかもしれないが、少年から青年へと脱皮する階梯は苦しみと共にある。死の世界を思わせる夜道。孤独に歩む行者。その先に、新しい世界が必ず存在

する筈だ。

18歳で甲府を離れて東京に暮らしているけれど、挫けそうな気持ちを抱いたことは何度もある。そんな時、決まって思い出すのは強行遠足のこと。俺は100キロ歩き抜いたじゃないか。もう一度「臼田のリンゴ」を手にするまでは、まだまだ歩みを止めるわけにはいかない。

真っ暗な夜道の中を聞こえてくるのは、ひたひたと歩く自分の足音だけである。野辺山を過ぎれば、もはや集団で歩く生徒も少ない。幽鬼の如く黙々と進む学生服の背中が、一つ二つ見えるばかりであった。「次の検印所まであと5km」と書かれた掲示を見掛けてから随分歩いた筈なのに、痛む足を引き摺る目の前に現れたのは「次の検印所まであと4km」という無情な文句。10月初旬ともなれば信州の夜は寒く、残り少なくなった温かいお茶に心細い思いがする。それでも、ぼくは臼田まで辿り着かねばならない。いつだって、ぼくの臼田は小諸と同じくらい大切な場所だったのだ。



臼田参り(故寿俊次氏の霊前で合掌)

かつての臼田は、甲州街道と中山道を結ぶ佐久往還の宿場町であった。目立って古い建物が残されているわけではないけれど、一定の道幅を隔てた両側に延々と民家が立ち並ぶ様は古い街道筋の面影を保っている。甲府から数えて約85km、つまり20里以上も先の臼田までは2日かけて歩くのが通常であったが、強行遠足では遅くとも18時間で踏破しなければならない。終点の小諸までには30kmほど先があるとは言え、甲州と信州の間に横たわる平沢峠を越えるのに相当な体力を消耗するのだから難儀な道程であることに大差ないのである。そんな臼田の宿が、ぼくの目標の一つになった背景には幾つか

の理由がある。

一高応援団には「臼田参り」と呼ばれる強行遠足当日の行事があり、新任の団長は検印所で依田家代々の霊前に両手を合わせる。これは、一人前の応援団長になるために絶対欠くことのできない通過儀礼なのである。自宅を臼田の救護検印所に提供して下さった依田寿俊次さんが、自分の死後も強行遠足への協力を惜しまぬように、と家族に言い遺して亡くなったのは昭和43年のことであった。以来、寿俊次さんの御霊を慰め、強行遠足の無事を祈願することが応援団の責務となり、いつの頃からか団長職継承儀礼の一環として定着したのである。

2年生のぼくは、夏の野球応援が終わって暫くしたある日の晩、応援団の先輩から呼び出しを受けた。如何なる用件かは薄々勘付いていたが、団長なのか、副団長なのか、或いは旗持ちを命ぜられるのかは蓋を開けてみなければわからない。緊張の一時である。オレンジ色の裸電球が一つだけぶら下がった団室には幹部が勢揃いしており、真ん中に陣取った団長から下された言葉は「次の団長は… オマンがやれ」。畢竟、平成6年秋の強行遠足で臼田を前に挫折することは、自他共に許されぬ状況になった。強行遠足当日の結果は、ぼくがここに元団長として筆を進めている事実が十分に示しているであろう。

では、翌年は小諸を目指すことだけを考えていればよかったのだろうか。実は、3年生になるまで古城の畔に到達した経験はなく、男の本懐を遂げたい気持ちは大きかった。けれど、それ以上に臼田を重視しなければならない事情が存在したのである。そう、「小諸必着」の御守をくれた娘に、「臼田のリンゴ」を持って帰らなければならないのだ。



小諸到着

寿倭次さんが亡くなった後、検印所を護り続けてきたのは奥さんのトミ子さんであった。ぼくらが一高生だった頃、既にトミさんは「臼田のお婆ちゃん」になっていたが、検印所を切盛りして通過する生徒に真っ赤なリングを振舞ってくれた姿は今でも憶えている。ぼくも最後の年は小諸を征服して「小諸のリング」まで手にすることとなったが、これは自分で美味しく頂いてしまった。「小諸必着」に対する返礼は、「臼田のリング」と決まっているのである。さて、このリングを手渡した結果や如何に。それは、後日二人でアップルパイを食べた事実が十二分に示しているであろう。

今年の早春に、担任だった依田源先生から「臼田のお婆ちゃん」が亡くなった、という知らせが届いた。寿倭次さんが他界されてから40年近くもの間、トミさんは数多の一高生を送り出してきた。そして、ぼくたちは臼田を通り過ぎていった。

松原湖で夜が明け、千曲川を小海、八千穂と下れば臼田は目の前だ。とは言うものの、血豆だらけの足を庇いつつの歩みである。遅々として進みはしない。一転して気温は上がり、朝日は眩しく舗道を照らしている。道端には、動けなくなった男が虚ろな顔で座り込んでいる。向うでは、元気な男が弱った仲間に肩を貸している。街道筋の角を曲がれば、そこが検印所。握り飯を口に入れ、お茶を流し込み、気付けば「ほら、飲みなさい、食べなさい」と声を掛けてくれたのが「臼田のお婆ちゃん」その人だった。一息ついて見上げると、水色の大空が広がり雲は悠然と流れていく。リングを頂戴して大切に仕舞い……さあ、小諸まであと一息だ。

「臼田のお婆ちゃん」こと、依田トミさんの御冥福を心より祈っています。ありがとうございます。また会いましょう。ぼくたちの「臼田」はどこにだってある、と思っています。

(平成8年卒 元応援団団長)

臼田のお婆さん ありがとう

中込誉世夫

「このままでは、足がもたん！」これは、若神子までの間に思ったことだった。

今年は葦崎まで長いこと走って疲労が早くから出てきたのだ。しかし、2年の時一緒だった友達が「今年は上位到着をめざすから早く行こう。」とはりきっているのにひきずられ、疲労も忘れて歩いていった。

「苦しい、もう止めよう……。」何度も思った。これは、ほんの一部の人を除いてみんなが思うことだろう。しかし、これを乗り越える何かがあって、やがて小諸に着くことができる。

これを乗り越える何か……。それは口では言い表すことができない。

けれどそれが、今、言えそうな気がする。

それは、臼田に着いた時のことだった。友達と2人で腰をおろして火にあたり、ポーっとしていると、背後からポンツとなれなれしく、少々強めに肩をたたいた人がいる。

「疲れてまいっているのに、肩の骨がはずれたらどうするんだ。」と思って振り向くと、臼田のお婆ちゃんがいて、「よう来た、よう来た。」とニコニコうなずいているのだ。

お婆あちゃんは何か、とても輝いていた。そして、僕等にこう言う。

「苦しいじゃろう、えらかったじゃろう……けれど、世の中に出れば、きっと、苦しく険しい道が待っているんだ。そして、もういやになってしまうこともたくさんある。でも、決してくじけてはいけないよ。小諸へ行く時の気力を忘れてはいけないよ。いいかえ…… いいかえ……。」

僕は涙がこぼれそうになるのを押さえながら、失いかけていた気力が、盛りかえってくるのを感じた。

足がグチャグチャになっていたが、それをも克服する気迫が出てきた。「これだ！」と思った。

お婆あちゃんが言った、あの気力と気迫が小諸に自分を引っ張っていくのだ。

僕達2人は、感無量で臼田を出発し、苦しんでいる人、疲れている人達を励まし、手をかし、肩を組み合って小諸に元気よく着いた。

そして、9時48分の電車に乗り帰途についたのだった。

最後に、臼田のおばあちゃんや励ましてくれた方々に、心からの感謝の気持ちをこめてお礼を言わずにはられない。

「ありがとうございました」と。

(昭和56年度 3年生)

『佐久往還強行遠足20周年記念誌』(1982年)所収

支え合う生

小林理恵

前夜から降り続いた雨がいつとき上がった。雪をまだらに被った八ヶ岳の暗く深い青を背景に、晩秋の山々が濡れている。終わりかけた紅葉が冬枯れの木々と混じり合う中を、霧が緩やかに流れて行く。放送部の生徒六人と、「臼田のおばあちゃん」の取材のために長野県臼田を訪れたのは、11月も終わりに近いそんな朝だった。

「臼田のおばあちゃんのことを、映像の記録にしよう。」そう思い立ったのは、放送部の生徒の言葉がきっかけだった。甲府一高の強行遠足で、四十年にも渡って一高生のために力を尽くしてくださった「臼田のおばあちゃん」こと、依田トミ子様。一高生が臼田に辿り着く夜中に、手を真っ赤にして熱々のご飯でお握りを握り、焚き火で瓶の牛乳を温め、赤い紅玉林檜を一つ一つぴかぴかに磨き、「頑張って」の励ましの言葉と共に、疲れ切った子供達に与えてくださった「臼田のおばあちゃん」の話を、たまたま耳にした放送部の生徒が、「こんなに優しい人がいたんですね。このおばあちゃんのことを、もっと知りたいです。」と言ったのだ。強行遠足のコースが変わって四年。生徒は誰も、臼田の検印所を知らない。私自身も、臼田のことは伝え聞いた話の中でしか知らないし、同窓生ではあっても、女子の終点は小海だったため、臼田という場所に足を踏み入れたことすらない。しかし、人の優しさ、人の情けに、素直に心を動かされているこの子供達の気持ちを、甲府一高の生徒達にこの先ずっと伝えて行きたいと、そしてそれが、母校で勤務する自分に与えられた使命だ

と、その時私は強く心を揺さぶられたのだった。

臼田の依田様一家は、放送部の私達を温かく迎え入れてくださった。「頑張っている子供達を見るのが、幸せだったから。」トミ子様の長男寿政様と奥様の信子様は、長年一高生の世話を続けてくださった理由を尋ねると、そうおっしゃった。心づくしの昼食まで用意してくださり、きのこご飯やきのこ汁、焼きお握り、採れたての真っ赤なトマトや蜜入り林檎を、美味しそうにたいらげていく子供達の姿を、お二人は目を細くして見守ってくださった。そのお二人の様子から、私は夜中の救護検印所で、疲れ果てた子供達の体や心を温めてくださった「臼田のおばあちゃん」の姿をも、容易に思い浮かべることができた。

「臼田に行き着けなければ、死んでも死に切れない。」そんな思いを語ってくださった同窓生の方がいた。「観音様のような方だった」臼田の依田トミ子様は、今年二月にお亡くなりになった。人が死ぬということは、生きるということは、どういうことか。依田様一家と甲府一高の強行遠足の関わりについてお話を伺いながら、私は心の中で問い続けた。高校生の時分には思いもしなかったが、自分が高校生の子供を持つ年になった今は、「臼田のおばあちゃん」が、母親のような深く大きな愛を抱いて一高生に接してくださったことを、痛いほど感じる。夜中の検印所で、一高生を迎える「臼田のおばあちゃん」を想像すると、それは、苦痛にもがきながらも自分の道を進んで行こうとする我が子を、慰め、癒し、励まして、そっと背中を押して出立させる母親の姿になる。命を慈しみ育てる母親は、自分の生を子に分け与え、子の生を支えて生きて行く。依田トミ子様は、40年もの間、一高生にとって慈しみ深い母であったのだ。

自分が生きることで人の生を支える。支えられた人は一生懸命に自分の生を生き、また別の人の生を支える。こうして脈々と受け継がれ繋がって行く、一人一人の生。「臼田のおばあちゃん」の生き様を通して、私達人間が、お互いの生を支え合って生きる存在であったことを、私は改めて実感した。自分が一生懸命に生きることで、私も人を支え、自分の生を全うしたい。臼田から戻った晩、そんな思いで私

は胸が熱くなった。

(放送部顧問)

臼田のおばあちゃん、ありがとう

金子 寛

公会堂で、協力のお母さん方と「わたしゃ、今から嫁にいくだよ」などと、冗談を言いながら軍手とタオルでリンゴを磨く。「今年は湿気が多いから、トップは少し遅れるよ」天候の状況で、生徒の到着時間を的確に予想、「来るのが遅かったね」と職員到着を迎えてくれ、表示看板設置に向かおうとすると、「まだ早いからゆっくりお茶を飲んでいけし」、検印所の開設作業では「火鉢はこの辺だよ」「焚き火をそろそろ燃やすだね」、夜中には「おむすびを中込に幾つ、羽黒下に幾つそろそろもって行ってやるだね」、明け方には「みそ汁を作る時間だよ」と、毎年狂いのないコンピューターのようである。

先頭の生徒を待つまで、公会堂で臼田特別大宴会(?)で、協力して下さる保護者や職員を心のこもった手料理で歓待してくれる。鯉こく・手打ちそば・朝鮮人参の天ぷらは定番料理、寿司・キノコ料理等々、他の検印所には申し訳ないと思いつつおいしくいただく。

「校長先生は遅いね。」PTAの役員さんと共に巡回してくるのを楽しみに待ってくれる。

夕食後、我々は仮眠をとる。その間に依田宅では、家族や近所の方がおむすびづくりをして下さる。

生徒の到着時間に間があるので、「少し家で寝てきてください」と声をかけると「いいや、大丈夫だよ」といってテントの下で徹夜で生徒を待つ。

60才から始めた書道は、80才で師範となり、『秀晃』の号を取り公民館で地域の方に教える。日新ホール内南側に掲げられている書『大吉祥』は85歳の時に寄贈されたもので、おばあちゃんの一高の強行遠足に対する熱い思いが込められている大切な財産の一つだと思います。ゲートボールは88才まで続けたそうです。10人の子供を立派に育てあげ、長男寿政氏ご夫妻は近所で酒屋を営み、次男正晴氏ご夫妻は家業の牛乳店を引き継ぎ、当日は他県に嫁いだ娘さんも駆けつけて一家総出で応援して下さる。

岩松今朝市さんは、丹精込めた紅玉リンゴの提供者で、一高のために木を切らず残しておいてくださっている方である。生徒がもらうリンゴにも、地域の方の温かい思いがこもっているのです。「紅玉」はほとんど飴などの材料になるとのこと。

鯉沢出身で一高OBの地域の名士、雨宮久雄医院長は臼田署長に「特に一高の強行遠足の警備巡回は気合い入れてやってくれ」との協力依頼や、ビタミン剤などの提供と緊急時の対応をして下さる協力医である。

臼田町教育長 新津真澄氏、町議 大工原隆夫氏、町建設課長など歴任された井出充氏、佐久穂町が気に入り移り住んでいる焼き絵画家 竹内一躬氏、歴代下越区長さん等々様々な方が激励に来て下さる。

愛用の帽子をかぶった「おばあちゃん」は到着した生徒に、リンゴ・おむすび・温めた牛乳を「頑張ってる」との言葉と一緒に一人一人に手渡してくれる。「おばあちゃん今年も来たよ」の生徒の一言に、孫が会いに来てくれた時のように、おばあちゃんの顔に笑みがこぼれる。生徒は、おばあちゃんから手渡されたリンゴに込められた優しさと温もりをリュックに入れて、次の中込に一步を踏み出し、小諸をめざしていく。おばあちゃんに会えて嬉しくて安堵し、残念ながら臼田止まりになる生徒もいる。シートに横たわる生徒、足をもむ生徒、酒瓶のケースに腰掛け焚き火で暖をとる生徒、おいしそうにおむすびを頬張る生徒を、優しく見つめているおばあちゃんの姿が渾然としているのが臼田検印所の光景そのものである。

その勲章とも言えるリンゴを彼女に渡し、後日彼氏にアップルパイを作りお返しするという伝統がいつ頃から始まったそうです。持ち帰った牛乳を神棚に供える生徒もいる。応援団長は、検印所隣の依田家に向かいご主人の霊前に線香を手向け、強行遠足の実施に感謝し成功を約束し、小諸に向かう。

2日目集計の確認報告終了後、昼食をいただく。おばあちゃんは睡眠不足を押して談笑しながら食事を一緒にしてくれる。そして我々職員と協力保護者を見送ってくれる。おばあちゃんは、それからやっと自分の睡眠時間になる訳です。

平成6年～13年(第68回～75回)の9年間検印所を担当させていただき、おばあちゃん、家族・地域の方々からたくさんのお話を教えてもらい、最高到達地点が八千穂である私にとっても、通過した生徒や保護者の方、関係した職員みんなが感謝の気持ちと同時に、臼田という地に親戚ができたという思いを持っていると思います。

平成18年2月22日(95才)の訃報はあまりにも残念で悲しいものでした。

おばあちゃん本当に長い間有り難う。天国から一高の強行遠足を末永く見守り応援してください。私達はおばあちゃんからいただいた、言葉では言い尽くせないたくさんのお話・思い出・人としての生き方を大切に宝物として持ち続けたいと思います。

(元臼田検印所主任・ひばりが丘高等学校長)

故 依田トミ子さん手記

昭和38年(1963)に強行遠足が始まって、佐久方面に来た時は中込まででした。思えば20年目の年になりますが、今になってみれば、ちょっと前のことの様に思い出されます。強行遠足とは、中込までの92kmという長い道のりで、一高からは主に登りの野辺山まで、そして、それ以降は少し下りにむかう中込までの道だったと思います。高校生では、大変な遠い道でしょう。38年頃は、まだまだ土や石の多い道でした。臼田まで何人来られるかと心燃やして待っていた年、そして初めての救護所とは何をしあげたら良いのか、お茶だけで良いのかと不安な年でした。

前日からお願いしておいた、おばさん達4、5人と共に、午前4時より待っておりました。6時頃、やっと見えた1人。また、2人、5人と元気よく歩いて来ます。生徒さん1人来るごとに、おばさん達は、なぜか目が真っ赤になり、後ろを向いてハンカチで目を押さえ、生徒にお茶をあげていた時もありました。私のお友達は、同じ年頃の子供を持つ人たちだったため、感激がたかまり、生徒達を迎えることに拍手の手の中に涙がおちたことも多かったのです。おばさんたちは、下向きになって生徒の足をさすりながら、励ましの言葉をかけ、そばで見ている亡き夫も、「頑張れ、頑張れ、行くのだ、飴玉でも口に入れて、男の子なら行くのだ。」と元気づけるのでした。そして、「牛乳もいいよ。」とさし出したりもしました。数十人が通り過ぎて、11時頃だったと思います。1人の生徒に夫が、「お前、お腹がすいているのか。」とたずねたところ、「おじさん、そうなんです。」と返事がありました。「お～い、おにぎりを作れ！」とのことで、友達皆で、朝ごはんの残りをにぎりはじめました。生徒さんが「おいしい」と食べてくれ、それから毎年、あたたかいおにぎりをあげるようになったと思います。

力むすびを食べ、牛乳でも飲んで、目的地まで行け、行けよ、と励ました夫でした。その時、1人の子供に「ぼくは、もう歩くことが出来ない。」と言われた時は、本当にかわいそうな生徒さんと思いまし



た。後から来た数十人の子供さんも皆そうでした。おばさん達も共にないた時でした。ある子供さんはお茶を飲みながら、甲府にはぶどうがあるけれど、りんごはないよと、指さして言いました。夫曰く、「来年こいや。きっとリンゴを沢山用意して置くからなあ。今日はおしんこで間に合わせてくれよ。」と肩をたたいて、頑張れよ、と元気付けた事でした。

その後、生徒さんからのお礼の手紙が来て、大変喜んでいました。39年(1964)は、早々にリンゴを沢山用意して待っていました。一高の生徒は頑張り屋だと感動した夫でした。39年頃は、まだ車が少ない頃で数人の子供さんが朝の10時頃にはもはや足のいたみで歩けないのです。見ておれないお母さん達は、肩を組んで駅まで送って行ったこともありました。

41年(1966)頃、小諸まで行くようになった時は大変だと思いましたが、子供さん達は一層元気を出して目的地に向かって行くのでした。本当に小諸までとは永遠の道であるのに、若者の元気で勇気のあるのには驚きました。1年ごとに生徒さんの熱心さが増し、多くの人々が小諸まで行くようになったことは、私達おばさんの方も喜んでおります。けれど、朝霧の多いため、足にまめを作る生徒さんが何人か出たこともありました。オリンピックの年の前後だったと思いますが、私がおにぎりを作り始めた時でした。1人の先生が来て、「一番が今来ますよ。」と言われた時は、まだ12時頃でした。皆が大急ぎになり、たき火をし、お茶・おにぎり・牛乳・リンゴ・飴玉などを用意していたら、1時前でした。元気良く一番が走って来ました。一同手をたたいて迎え、生徒さんは5分ぐらい休んで元気よく行こうとしましたが、私は「ちょっと待って。」と言って、飴玉を口に入れてあげました。その時の顔が今でも思い出されます。

43年(1968)の時は、前夜より曇り、当日の朝から雨で、先生方は、一日延期の電話連絡を受けて一日待つことになりました。その夜も、夫は先生方と一ぱい交わしながら、色々話しながら夜遅くまで楽しく過ごしました。その時のことは、今でもはっきりと覚えています。夫が「自分がいなくなっ

ても家には子供もいるし、お母さんもいるので、強行遠足のことは一高がやめるまで白田では続けさせていきます。」と言ったこと、今も心にしみております。男は苦しい時を頑張って行ってこそ男だ。長い人生、足で行こう。痛みも沢山あるが、それが人生の行く道だ。そんなことも言っていました。

その年の10月23日に、夫は急死しました。葬儀には、今の校長をしておられる岩波先生、守山先生、萩原先生、そして生徒さん2人が、感謝状を持って来てくださり、本当にありがとうございました。夫は貧家に生まれましたが、日々、人は生きていく上で、感情の豊かな人、世の中の人に信じられる人に成るようにと、いつも口にしていました。それから毎年、生徒さんは強行遠足にはお線香を持って来てくださるのです。本当に私は心より喜んで、毎日一本ずつ仏にあげております。他にも品々を頂き、その中には千羽鶴もありました。毎年、PTA様にもなにかとお心づくしをいただいております。また、90年祭、95年祭、100年祭と、私は3度もお招きにあずかり、参上いたしまして、一生のすばらしい思い出となりました。

20年間に一度だけですが、小雨の時もありました。生徒さんは、カッパを着て、木の棒の大きなたえをついて、数人がやって来ました。その年は、数名の生徒がくつずれがひどく、おばさん達が看護に大忙しの年でした。強行遠足が終わってから、お母さん方の御苦労をねぎらう会でのお茶飲み話では、色々たくさん話題がありました。あの元気な子、足がかわいそうな子、身体の弱い子、なんにも言わずに黙ってうつむいている子、など様々話をしていた時、救護所の黒板に大きく「おばさん方、本当にありがとうございます。一高生」と書いてあったのを、皆さんで見で、感激の涙でお茶を飲んだこともありました。

その後、良い天候で秋空が高く、寒い朝が多く、たき火の灰が舞って、子供さんの黒い制服の肩を白くしたこともあったなと思い出します。生徒さんも、今では先輩に何かと教えられ、あまり足の痛みもない様な気がします。強行遠足の頃は、長野県の朝は冷えることがあります。その寒さをおしのけて、無心に走る生徒さん達は、本当に良いことと思いま

す。95年祭後、毎年のように小諸まで走る子供が多くなっていくようです。また、小諸まで走ることの出来た人々は、心にしみた喜びがあったことと御推察申し上げます。4、5年前から、PTAのお母さん達がお手つだいに来てくれているので、救護所もありがたく思っております。900個のリンゴを、ピカピカになるまでみがかれる父母様方、一心に真っ赤になったリンゴを見つめながら、様々な思いで明日を待つ心は、何にたとえたらよいでしょうか。夕空を見上げて心配する先生方、区長様に御あいさつにまわったあと、一同がそろって、晴れる朝を願って夕食をとるひとときは、私達一同の楽しい前夜祭です。

今は、学校のほうでも様々に注意してくださって、子供さん達も一層歩き良くなったようです。つえにすがる生徒さんが少なくなったことのようにです。救護所も笑いの中に「がんばれや！」の声のひとつもありません。年がたつごとに、元気な子供さんがふえて行くのが見うけられます。そして、一高の生徒さんは、礼儀正しく、感じが良いと皆様にほめられます。3年生は、「3年間、ありがとうございました。」と言って行きます。言われるたびに、頑張れよと心中で祈っております。炊きたての御飯を手の平を真っ赤にして、ふうふう吹きながらにぎるお母さん達、牛乳をあげるOB、リンゴをさし出すおばさん、お茶碗をきれいにしてくれるお母さん、また、子供さんの口におしんこを入れてあげるおばさん、足の痛みを見てくださる看護婦さん、道を守るお父さんや先生方、そして、足を引きずりながら歩く生徒さん達、みんな一心同体の心のつながりがあると思います。人間にとって、大切なことだと考えさせられた私です。

一高の生徒さんは、本当にやさしく、感謝の念の深いことには、毎年何人からもお手紙をいただきます。私は、ちょっとした事でこんなに喜びのお手紙をいただき、心よりうれしく読ませて頂いております。また、一高の御父兄にお願いですが、お子様に強行遠足の時は、あまり品々を持たせないほうが良いと思います。小諸まで101km歩くお子様は、少しでも身に付けるものは大変なお荷物に感じられますから。本当にこの子供さんに必要と思われるもの

けで良いと思います。どうか身軽にして上げて下さい。強行遠足は、生徒さんにとっては1か月前より体の健康と心の準備にと、大変なことでしょう。どうか、注意を守り、一人でも多く、小諸まで行かれることを祈っている私です。そして、今から10月をお待ちしている依田家です。

明治生まれの私、今年72歳です。若者は大すぎです。20年間とは思い出もたくさんありますが、良い文もできずにこまっている私です。どうぞ、悪くならず。

夕空を見上げては待つ一高生

朝霧よ天までのぼれ一高生

『佐久往還強行遠足20周年記念誌』(1982)所収



水谷法栄さんの交通事故死を乗り越えて

平成14年・第76回強行遠足における水谷法栄さんの交通事故死とこれに伴うコース変更の経緯について

斉藤正敏

平成14年の第76回強行遠足(10月2・3日実施)において、悲惨な事故が起きた。3日午後1時55分頃、女子終着地小海駅に間近い長野県小海町豊里の町道を歩行中の、1学年水谷法栄さんが暴走してきた車にはねられて死亡したのである。近くを歩行していた女子生徒も軽い負傷を負った。車を運転していたのは18歳の少年だった。大会史上初めて起きた死亡事故であった。

事故が、生徒・保護者・職員及び同窓生をはじめとする県民に与えた衝撃は大変に大きかった。水谷さんの死を深く悼むとともに、強行遠足はその意義やあり方について、廃止の可能性を含めて根本的な検討を迫られることとなった。

結果として、強行遠足は大きな変更を加えながら翌年も継続され、現在に至るが、継続決定に至る過程には多くの苦悩が伴った。ここでは事故後の状況と、強行遠足のあり方に関する検討経過の一端を、記録として留めておきたい。

(編集委員)

(1)(資料)事故の状況(翌日の「山梨日日新聞」の報道から)

山 梨 日 報

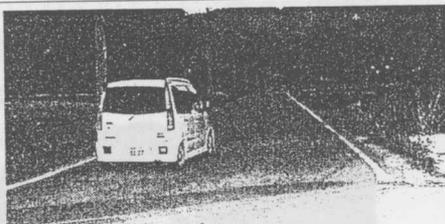
2002年(平成14年)10月4日 金曜日

一高強行遠足

女子生徒はねられ死傷

小海で対向車 運転の少年逮捕

三日午後一時五十分ごろ、長野県小海町豊里の町道で、甲府一高の伝統行事「強行遠足」に参加していた同校二年の水谷法栄さん(17)が、三ノ三三が、近に住む会員の少年(18)の乗用車にはねられた。水谷さんは病院に運ばれたが、頭を強く打ち、重傷を負った。水谷さんの前を歩いていた同校二年の女子生徒(16)も、転倒するなどして足に軽いやけどを負った。長野県警は同日、業務上過失致死と通交法違反の疑いで少年を逮捕した。



道路の端(写真右)を歩いていた女子生徒がはねられ死亡した交通事故現場。長野県小海町豊里



女子高生の死亡事故現場。JR小海線と赤岳の交差点付近にあり、同署は少年がスピードを出し過ぎてハンドル操作を誤ったとみて

現場は約七メートル、センターラインが踏切らない。同署員は「車がカーブを曲がりきらず右側に寄り、道路の端を歩いていた水谷さん(17)の生徒の列に突っ込んだ。同署は少年がスピードを出し過ぎてハンドル操作を誤ったとみて

現場は約七メートル、センターラインが踏切らない。同署員は「車がカーブを曲がりきらず右側に寄り、道路の端を歩いていた水谷さん(17)の生徒の列に突っ込んだ。同署は少年がスピードを出し過ぎてハンドル操作を誤ったとみて

生徒を差倒した。カーブの教員や父母らが、まだ事故を受け、同校は直ちに強行遠足を中止。翌朝、山梨県警は「事故が起きた現場は女子のゴール地点から約三・四キロ手前だった。男子生徒は二日午後一時半に同校を出発、四百六十五人が、長野県小海町の小海市民会館を目指して約三・三キロのコースを歩いていた」と話していた。

山本秀校長は「事故が起きないよう万全の準備と指導を取り組んできたが、亡くなった生徒のめいを祈りたい」と話している。

は今年で七十六回目。女子生徒は北巨摩郡須玉町の須玉小を同日午前六時半に出発、四百三十五人が約四十六キロ離れた長野県小海町のJR小海駅前を目指して歩いた。

(2) 事故後の対応と強行遠足のあり方についての検討経過

- 10月 4日 全校集会 事故について保護者への報告(文書による)
5日 水谷法栄さん通夜(敷島アピオセレモニーホールに於いて)
6日 水谷法栄さん告別式(同上)
7日 臨時職員会議(事故及び生徒の心のケアについて)
9日 強行遠足委員会・主任者合同会議
11日 現場検証立ち会い(生徒・職員)
16日 生徒アンケート実施
17日 PTA役員会(事故への対応について)
18日 同窓会理事会(事故について及び強行遠足継続の要望)
25日 職員アンケート実施
- 11月 8日 職員会議
16日 PTA強行遠足報告会(保護者全員対象)水谷さん四九日法要
19日 保護者アンケート実施
- 12月13日 PTA本会・保健体育委員会役員会学校へ強行遠足継続の申し入れ
14日 同窓会常任委員会(事故の経過の概要説明)
18日 強行遠足委員会(各種アンケートの分析・今後の方針等について)
19日 学校評議員会(説明と意見聴取)
- 1月20日 強行遠足委員会(問題点の洗い出しと改善の可能性について)
22日 職員会議
- 2月 3日 第1回強行遠足諮問会議(強行遠足継続に関する基本方針について) 注1
19日 強行遠足委員会(同上)
保護者及び報道機関に対し今後の方針について報告・説明 注2
- 3月11日 強行遠足委員会(実施のための具体的方策について)
13日 第2回強行遠足諮問会議(実施方法について説明と了承)

注1) 強行遠足諮問会議はPTA本会役員・同保健体育委員会役員、同窓会正副会長及び本校関係職員をメンバーとする。

注2) (3)の「強行遠足の今後について(ご報告)」にあたる。

*この間を通して、本校管理職・体育振興係を中心とする強行遠足検討小委員会が問題点を整理し、安全対策等について調査と提案を行ってきた。

(3) (資料)「強行遠足の今後について(ご報告)」

*この資料は、強行遠足のあり方について、事故の後4ヶ月余りをかけて検討して得られた結論を、保護者に向けて説明した文書である。この間の議論の要約でもある。

その後、この方針に従ってさらに具体的なルート・時間設定・安全対策の細部等が練られ、翌年度の第77回強行遠足が実施された。

(資料)

保護者各位

強行遠足の今後について(ご報告) 平成15年2月19日

校長 山本秀彦

立春を過ぎながら、未だに寒い日が続きます。諸兄には御健勝のことと拝察いたします。また日頃、本校の教育活動にご理解、ご協力をいただき、感謝申し上げます。

さて昨年10月、本校第76回強行遠足において発生した水谷法栄さんの死亡事故は、まことに痛恨の出来事でした。前途有為な若者の命とその未来が失われたことを思う時、未だに胸のつぶれる思いがあります。故水谷さん、及びそのご家族の皆様、あらためて哀悼の意を捧げたいと思います。

この事故以後、私どもは強行遠足のあり方について、行事の存続も含め根本的な見直しを進め、約4ヶ月にわたり、強行遠足の教育的な意義の再確認をはじめ、コースや健康管理、支援態勢など安全に係わる諸事項の点検を進めながら、諸方面からのご意見を伺ってまいったところです。その過程で、とりわけ行事に深く関わるPTA会員の皆様からは、アンケートその他を通じて多くの好意あるご意見を頂戴いたしました。また昨年12月13日にはこうしたご意見をふまえ、皆川会長をはじめとする代表の方々から「安全に十分の配慮をした上で、この行事を存続できるよう検討をお願いします」という旨の申し入れをいただいたところです。

ここにいたり、ようやく行事のあり方について以下の基本方針を得ることになりましたので、保護者の皆様にご報告させていただきます。

強行遠足に関する基本方針

以下の基本方針をふまえ、来年度も実施する。

- (1) 安全確保を最優先する
- (2) コース、方法、日程などのリニューアル化(改善)を図る
- (3) 当面昼夜の兼行を避け、日中の実施とする

私どもが、問題を検討する過程であらためて認識いたしましたことは、多くの皆様のこの行事に寄せる熱い思いと、その教育的意義への高い評価でした。また、故水谷さんのご両親が述べられた、行事存続へのご希望も深く受け止めねばならないものでした。しかし、一方で一人の命が失われたことの重さと、現在の交通事情に照らして安全性への大きな懸念が存在することもよく理解されました。少数ですが行事を廃止すべきとのご意見もありました。

こうした中で、伝統の行事と精神を守り、同時に現在の交通上の悪条件のなかで安全を確保できる方策があるか、相反する意見の双方に納得の得られるあり方があるか、この間私どもが悩み続けてきたところです。

以上の事情をお汲みとりのうえ、基本方針へのご理解をいただきたいと存じます。

これからは、この方針をふまえ、具体的な計画を策定していくこととなります。その際は、これまでの強行遠足のあり方を一つひとつ再点検し、洗い直して、再度基礎から積み直していく所存です。このため、当初からの完成型は求めず、力の及ぶ範囲から始めて、徐々にその可能性を拡大していくこととします。その意味で、来年度は再出発のための第一歩とご理解ください。

基本方針の策定につきましては、PTA・同窓会の代表者を交えた諮問会議でご意見を頂戴し、賛同いただきました。

諮問会議に出席され、またこの間、おしみのないご援助をいただきましたPTA正副会長・保健体育委員会役員の方々に厚く御礼申し上げます。

H18年度 強行遠足体験記

◆深澤みずき(1年)

第80回強行遠足。一高の最大かつ誇りあるこの行事、強行遠足の、記念すべき第80回を私たちは終えた。終えてみて振り返ると同時に、その意味を、また、この行事が80回という、こんなにも長い間続いている理由を考える。

強行遠足は最近まで、男子は百kmもの距離を走っていた。さらに、かつては24時間でどこまで行けるかを挑戦したという。そのために和田峠を上ったりしたそう。しかし、私たちは四年前の事故があったため、男子は約50km、女子も約30kmに短縮された。そのため、私たちは体育の授業で30分間走をする程度だったが、その中でもしだいに走行距離が伸びていき、その度に少し嬉しくなった。また、授業が終わったあとの疲れも回を重ねることに和らいでいき、持久力がついてきたなあ、と実感するようになった。強行遠足を通じてまず第一に身につくのは「持久力」であると思う。

そしてもうひとつは、「精神力」だろう。私たちは50km、または30kmなので、比較的以前より楽だったと思う。

それでも普段は経験することのない距離なので、キツかった。キツイ中でも、友達と励まし合い、支え合うことで、「行こう」、そう考えることができた。その強い精神力があつて、辛さを乗り切れるのだと思う。以前の距離はまさに自分との勝負だったと思う。中学の時「気持ちで負けたら試合でも負ける。」と顧問に言われたことがある。要するに、気持ちが強いほど目標に達する可能性は高くなるのだろう。

来年からは距離を伸ばすという噂がある。それだけ大事にされている行事なのだと思う。50km、30kmでも大変なのに… と思うが、やっぱり100kmこそが一高の強行遠足なのではないか、とも思う。また、距離が伸びれば「持久力」や「精神力」はさらに向上し、その他にも何か大切なものを見つけられる気がする。

◆丸茂綾子(1年)

長距離を地道に淡々と行くのは私の大の苦手で、あまり好きではなかった。でも、今回の強行遠足で持久走の良さを発見することができた。

まず、走っていて思ったのは、走ったり、歩いたりしている途中に色々考えられる機会があることだ。私も色々なことを考えた。部活のこと友達のこと、家族のこと、勉強のこと。最近、自分の中で「この程度でいいや。」という気持ちが出てくるようになってそれが生活の中に影響を与えはじめていると考えていたので、これからどう直していくべきか、考えることができた。

二つ目には、友達の良さを実感できるということだ。部の中でも、ペースが合う友達と一緒に走ったので、ペースは苦しくはなかったが、徐々に2人のペースがずれてくる時もあった。その時はお互い励ましあったり、手で引っぱって行ってあげたりして順位をなるべくおとさないようにゴールまで行くことができた。いつもはニコニコしていて、おだやかな印象の友達が歯をくいしばって一所懸命走るのを見て、意外な一面を見た気がした。

一番良かった点は、達成感だと思う。最後のゴールまでの一直線の道を順位を少しでも上げようと、靴ずれの足でダッシュした後の校長先生の握手は本当に感動した瞬間だった。30キロ走るといって生まれて初めての経験は私を成長させたと思う。これからの生活の場面ででてくるどんな小さな達成感もこれからは大切にしていきたいと思う。そして、来年は、順位をもう少し上げたいと思う。

◆高山 智(1年)

第80回という記念すべき年に私達は走るようになった。5、6年前までは100km。という先生の言葉には、力強さもあり、今年も55kmという短い距離ではあるが生徒に頑張ってもらいたいという気持ちが込められている感じがした。

体育の授業でも、同様に先生は生徒にたくさん強

行遠足の意義・つらさ・OBの体談を話し、「絶対に完走してほしい」という気持ちを全面的に出していた。生徒の面から言わせれば「あ～また始まったよ」「早く終わらないかなあ～」と面倒臭さをむき出しにさせてしまう。しかし、それは、生徒に対し先生からの激励であり、一喝でもあった。私は清里へ向かう最後の下り坂で先生の言葉の意味が分かった気がした。

この強行遠足の目的である自己の限界に挑戦する。私ははっきり言って限界に挑戦してはいないと思っている。清里から野辺山までの5km。この距離は妙に長く感じた5kmであり、足がガクガクになっていた。でも足が震えているにかかわらず、次の一歩が出る。自分でもなぜか分からない。無意識状態でありながら一歩前へ出られる。自分の中でゴールしなければならぬという気持ちが原動力なのだろうと思う。

甲府第一高校の伝統である強行遠足は、最初想像していたつらさをはるかに超えるものだった。なぜこんなことをしているのだろうと思った回数は数えきれない。精神面での強さはよほどのことがない限り成長しないとこの強行遠足で知った。私は、この強行遠足でのつらさをバネに、これからの学校生活を充実させたいと思っている。

◆中澤和奏(1年)

私は昔から運動が苦手でこの一高に入学することが決まったときは、強行遠足さえなければいいのにと思ったりしました。

夏休みが明けて、体育の授業で30分間走が始まりました。最初はすぐに息が切れて、走り続けることもできませんでした。しかし、回を重ねるにつれてだんだん自分のペースをつかめるようになり、体力をつけられているというのが実感できていきました。

そして強行遠足当日、須玉から野辺山まで30.3kmという長い遠足がスタートしました。初めのうちから坂道が続き、こんなんでも最後までいけるんだろうかと心配でした。最初の検印所の高根までがすごく長くてこれがあと何度続くんだろうと、とても不

安でした。延々と続く道をひたすら歩きました。坂道ばかりで、足も痛くて、すごく辛かったです。特にまきば公園までの道のりは大変でした。でも励まして一緒に歩いてくれる友達の優しさに触れたりして、ちょっと感動しました。途中、すれ違っていく車やバイクの速さがとても憎らしく思ったのと同時に、文明の進歩の素晴らしさも感じました。車なんて無かった頃はこんな大変な思いをして移動していたんだと思うと、今の生活に感謝しなきゃいけないなあと思いました。ゴールの野辺山まであと少し、あと2kmと旗が見えて、自分を奮い起こして最後の力をふりしぼって歩きました。最後の1kmはまるで5kmのように感じました。そして午後2時半、ようやくゴールの野辺山にたどり着くことができました。ちゃんと完走できたという安堵感の中で飲んだしじみ汁はとても美味しかったです。

私は強行遠足から自分の体力の限界に挑戦することを知りました。とても辛い遠足でしたが、一歩ずつ前に進めばちゃんとたどり着くことが出来るんだと実感することができました。これから先、何事も一歩ずつ進んでいきたいと思います。

◆中島杏子(1年)

私の家族は強行遠足に対してとても協力的だった。姉は一高の卒業生で、「強行遠足」の雰囲気を見せてくれたし、なにより父と弟と共に野辺山まで練習で一緒に歩いてくれた。3人の歩くペースが速すぎてついていくことができず、自分に情けなさを感じた。このままで果たして完走できるのだろうか、と。

しかし、体育の授業でペース走が設けられ、家族も率先して家の近くまで走ってくれた。と言うより、私の家族は毎週かかさず走っている異様な人々なのだが。

部活に入っていない分、個人的に走った努力が功を奏したのか、体育で走っても息が切れなくなった。そしてなにより、走ることが楽しくなった。これなら強行遠足も、完走することくらいならできるかもしれない、という自信が生まれた。ただ悲しいことに、強行遠足にスタッフとして参加するは

ずだった父が倒れてしまい、病院に入院してしまった。そんな風になるまで私の為に頑張ってくれていたのかと思うと、更に闘志が湧いた。

強行遠足当日、天気は良好。体調はあまり優れないが多分大丈夫であろう。

最初の合図が鳴る直前、私は父の言葉を思い出した。

「最初に走るとばてるから、おさえて行け。」というものだった。

父の言う通りにし、なんとか完走したものの、やはりつらかった。

強行遠足は長い歴史と共に数多くの協力者のもとに成り立っている。以前と比べると半分の距離とはいえ、初めて体験してみて、正直しんどかったというのが本音である。感動とか言う前に、歩き終えたという安堵が私を支配している。

伝統というものの重みを骨身にしみて味わうとよく言うが、私の場合、プラス家族の重みも加わっているようだ。

◆若尾日香里(1年)

座っていることがどんなに楽なことか、何度も実感した強行遠足だった。

私たちは、須玉を出発し野辺山のゴールを目指した。はじめは、周囲の景色を楽しむ余裕もあり、歩くことが大変であるとはまったく感じなかった。しかし、大泉の検印所が近づくにつれて上り坂が急になり、腰や足首には痛みがでてきた。そしてこの頃から、私は「座る」という解放感の誘惑にたえながら歩き続けた。

私が大泉の辺りを過ぎてから、一度も座らずにゴールまで進んだのは、二つの理由があった。一つ目は、一度座ってしまい楽な気持ちを味わうと、そこから抜け出せず、もう一度走り出すことができなくなってしまうのではないかと感じたからである。二つ目は、どんなに遅いペースでも歩き続けること、つまり継続することで一歩ずつゴールに近づいていることを実感できると考えたからである。この結果、強行遠足では一応の成果を上げることができた。

しかし強行遠足を終えた今、私は完走と同じくら

い大きな成果を、もう一つ得ていたことに気づいたのである。それは、あの時私が単に、ゴールをするためだけに考えていた二つのことが、勉強をはじめとする日常生活においてもそのまま当てはまると分かったことだ。具体的には、勉強を一度やらずに楽な気持ちを味わってしまうと、再び始めるのには強い志が必要であり、とても大変なことである。今何をしなければならないのか、それを見極めることが大切なのである。また、毎日少しずつ継続することで目標に近づいていることを感じられるのも、強行遠足とつながる点ではないかと感じる。

このように、私ははじめての強行遠足を通して、体力と精神力を鍛えるとともに、日常生活にも大きな影響を確実に与えることができたと思っている。

◆植田祥平(1年)

10月15日、午前5時10分。初めての強行遠足がスタートした。始まる前はブッチャケめんどくさいと思ってたけど、号砲を聞き、走り出した瞬間僕の考えは変わった。「相棒の翔伊と絶対野辺山に行つてやる」これだけだった。

まず最初の検印所である葦崎までがとにかく長い。徒歩での12.5kmは初めてだった。これから先がすごく不安になった。

須玉でアクシデント発生。翔伊の足が大変なことに。それから先、これまでの会話が消えてツラかった。でも翔伊は頑張った。泣きそうになりながらも僕のペースについてきた。おいていこうかとは思わなかった。それは最初の決意があったからだ。実際、翔伊がダメになったら背負って野辺山まで行くつもりだった。途中、翔伊のために休憩したりもした。だから、翔伊はもっと僕に感謝するべきだ(笑)。言葉ではちっともそういう気持ちがない。けど一応心の中では感謝してくれてると僕自身勝手に思っている。本当の友達っていうのは言葉なんかじゃなく、心がつながっているものだと思った。共に励まし合って歩いた55.4km。きっと更に2人の間は強い絆で結ばれただろう。これからはずっと友達でいたい。

そんな事を考えながら歩いていたら、野辺山まで

あと2km。最後の直線は長すぎだよ。左に曲がってあと数百m。ゴールの実感が湧き、体が軽くなった。ついに、ついにゴール！本当に長かったけど貴重な体験になった。またあと2回もやると思うと大変だけど。でもあの達成感としじみ汁。また味わいたい。

とりあえず一番疲れたのは帰りのバス。満員で通路の補助席に乗った。もう絶対嫌！

この強行遠足で、支えてくれる人達の大切さを実感した。声をかけてくれたみなさん。本当にありがとうございました。そして一緒に走ってくれた翔伊。本当に本当にありがとうございました！

◆鈴木暁子(2年)

青いなあ。足が痛くて口数少なになる度に友達の横で空を仰いで思った。去年よりも1ヶ月弱遅い時期にてスタートした今年の強行遠足の空は抜けるほどに晴れ渡り、空気も澄み、なにより紅葉で山がいろとりどりだった。歩を進めていくにつれて、もやがかかった遠くの山がみるみるうちに大きくはつきりと視界に入ってくると、少しずつでも確かに進んでいるんだ、野辺山に近づいているんだという思いが湧いてきた。

1人で走る人、2人で歩く人たち、1人に寄りかかって手を引いてもらいながら歩く人、足を引きずりつつ励まし合いながら走る人達… 色んな人を時には後ろから時には振り向いたときに目にして、ああ、おもしろいなあと感じた。そしてこの80年間続いてきた行事の一部分に自分も加わっていて、今、この瞬間に歴史を紡ぐ役割を担っているんだと悟ったとき、改めて一高の伝統の重さや大きさを肌で感じた。伝統とか歴史とかいうものは実際にその時その瞬間に生きている人達が一生懸命その時間をその人達の色で染めて、全うしたものが積み重なることでできあがっているのだと思う。嫌だ嫌だと文句を垂らしつつ、痛いからもう無理だと投げやりになりながらも、それでもゴールを目指して足を運んでいく姿は1年前も80年前も変わらない、高校生のありのままの姿なんだろう。そんなことを思いながら、バスにゆられてうとうとしつつ帰甲の途についた。

この強行遠足を通じて、歴史や伝統、そして自分の生き方について秋空と共に考えることが出来、とても良かった。

◆藤田共子(2年)

人に合わせるということは、案外難しい。隣を歩く彼女と私とは、疲れ方も、体力も違う。目標への意欲も違う。一緒なのは、相手を気遣う気持ちだけだ。どちらかが追い越したら、頑張っただけについてゆく。速度をゆるめるのではない。そうやって、挫けそうになる自分たちを励まし合っていた。

校長先生や同窓会の方々をよく壇上で、「強行遠足は自分との闘いだ」とおっしゃる。確かに、第1回大会のときはそうだったのだろう。戦後まもない時期で、人と助け合うことが必然の時代だったからである。しかし今はどうだろう。第80回大会を迎えた今、人と助け合うことは、人々の頭の片隅に追いやられてしまったように思う。人はひとりで生きようとしすぎた。

私たちが代表するこの世代は、ひとりで闘うことの苦しさ、厳しさゆえに思い悩むことの多い世代だと感じる。先頭を走る生徒には先生がついてゆくように、すべての生徒には伴走する仲間がいる。前日に交換し合ったお守りや、検印所のお茶、風にたなびくコスモスや、隣を走る友だち。何かの何かの形で、必ず一人一人に伴走してくれる。強行遠足で見える景色の全てには、力強く自分を後押ししてくれる優しい力があつた。ひとりで闘うことと同じくらい、人を気遣うこともまた忘れてはならないことだと思う。また、そう思っているのに、それを実行できない歯がゆさを感じている人も多いのではないだろうか。第80回大会に参加した今、80回続いてきたからこそ感じ得る時代の流れ。10月15日は、関わったすべての人に、その流れを感じさせてくれた貴重な1日であったと思う。今は、あの景色を創り出してくださったすべてのものに感謝したい。

◆本田ルミ(2年)

バスに乗ると、去年の様子が頭の中に浮かんできた。一体何のために走っているのかも分からず、辛くて何度も止まりかけた苦い思い出が、私にはあった。そして、80回という記念すべき年を迎えた今年。私は一つの目標を決めて走った。「人生一度くらい、何も考えずがむしゃらに走ってみるのも良い。」この言葉の実行だ。

この強行遠足は、自分との戦いだと思う。順位も速さも早いに越したことはないが、それよりも走り抜くことが大切だと思った。長距離が大の苦手、5分間走り続けることすら辛かった去年の私は、高校から始めた部活動を通し、50分間も走れる体力をつけた。

いざスタートしてみると、なんだか気持ちの良い天気だった。体調も良かった。今まで体験したことなかった30キロという距離に何度も負けそうになった去年とは違う気持ちがあった。少しの自信と大きな好奇心が私の中から溢れてきた。

最初の坂道も悠々と超えることが出来た。今年は10月という事もあり山の紅葉の美しさや空気の綺麗さを十分に味わいながら走った。高根を越え、若林から大泉、そしてここからまきば公園までの坂が辛いのだ。足が重くなり立ち止まりたくなる。そんな時何よりも力になったのは、友の声だった。お互いに支え合いゆっくりと進んだ。決して止まろうとはしない。マイペースに前に進むことだけを考え走った。まだ成長途中の私達は、無限の可能性と少しの不安を抱えている。どんなに強がっても、みんな一人では生きられない。支え合うことがどれだけ大切で力になるのか身にしみて分かるのも、この強行遠足の素晴らしい点の一つだと思った。

清里、そして野辺山。完走した。ゴールで待っていた校長先生と握手をした。友に、先生方父兄の方にたくさんのお礼を言いたくなった。今回学んだたくさんのお礼をこれからの人生に生かしていきたいと思う。

◆中島誠也(2年)

「がんばれ!!」「あと少しだよ」強行遠足スタッフの方々や先生方、そして地域の方々からの暖かい応援、私たち一高生のために、たくさんの人、一高と関係が少ない人々までもが協力してくださっている。そんな思いや声が私の足を動かした。昨年度はまきば公園で前進停止という苦い体験をしたが、昨年度とは周りの声が違うように聞こえた。おそらく2年目ということで心に少し余裕があったからなのだろうが、その声は予想以上に助けとなってくれた。つらい坂道や長い農道では「がんばらなきゃ」という気持ちを湧きたたせてくれた。人気のない山で久しぶりに人にあうと不思議と安心感とやる気が満ちてくる。

現在の生活から考えてこの強行遠足は非日常である。非日常から学べることは一般に、貴重なことであるとよく言われる。確かに辛い事に打ち勝つ事や諦めないことなど、大切なことを学ぶことができた。しかし私はそれ以上に、人間的で日常的で、そして当たり前なことを再確認することができた。それは他人の協力なしに物事は成り立たないということだ。交通の整備、一人も事故にあわないようにするための配慮、検印所の設置、これらは全て先生方スタッフの方々の協力によって行われる。もしこれらが無ければ強行遠足は実現しない。このことは当たり前だがすべてのことに共通する。当たり前なのが忘れがちなことである。それを今回の強行遠足という非日常の中で思うことができた。

最後になりますが、強行遠足で「声」をかけてくれた方、準備・運営をしてくれた方、全ての協力してくださった人々に感謝の意をこめ、「ありがとうございました」

◆伊藤 岳(3年)

この強行遠足は3年間の中で一番忘れられないものになりました。3年目でもあり、野辺山までの距離、そして自分の体力面からして出発前に計画を立て、第80回強行遠足に挑戦しました。

朝5時出発。まだ空には星がみえていました。ま

ずは12.5km先の葦崎まで足も軽く順調なペースで走りきり、それから中田、須玉、高根と、早歩きをしながら自分でも3年間で一番良い調子でした。しかし若林からの山道、かなりの急な坂で足に異常を感じてきました。足をつめから出血し、足首が固まってしまったのです。ようやく大泉到着。体はずでにボロボロでした。まだまだ続く急な坂道。自分ではかなり歩いたつもりなのにあと2kmという紙がはってあったりすると精神面も相当痛めつけられました。やっとのことでまきばに到着。坂道はここで終わり。しかし僕が一番つらかったのは清里までの5kmでした。急な坂道などはないのに足が自分の足ではないかのように一步一步がつらく、おまけに手がマヒしてきました。まだ清里まで2kmあるというところで、立てなくなったのです。5分ほどそこで足をほぐしたりしました。しかしまったく変化なし。歯をくいしばってやっとのことで清里に着きました。残り時間は2時間。時間があるとしてもゴールの野辺山まではまだ5km。あきらめようと思ったりもしました。しかし高校3年目の大会であきらめたくありませんでした。ラスト5kmのことはほとんど意識がありませんでした。すべてが限界。しかし、ゆっくり歩いていくと前にゴールが見えました。先生の声が聞こえます。「あと少しだ。がんばれ」その声が最後の大きな力となりゴール野辺山に到着。その瞬間体の力がすべてぬけ、倒れてしまいました。

そのとき雲一つない青空をその日初めて見ました。

◆原 彩香(3年)

私の強行遠足3年間は、毎年違った経験だった。一年生の時は雨で途中中止となり、くやしい思いをした。二年生の時は、北海道の北見北斗高校の強行遠足に参加し、日程の関係で一高の強行遠足では検印所の補助員をした。そして今年、私は女子で2番目に、しじみ汁を飲むことができた!!初めて飲んだ、しじみ汁はとてもおいしかった。

順位がいいからすごいとか、強行遠足はそんなに単純なものではないと思うし、2位ということを自慢するつもりはない。私はただ、私を支えてくれた

人みんなに報告したい。みんなの応援が、私の背中を押してくれたよと。みんながくれたパワーのおかげで、私は最後まであきらめないで、がんばれたよと。

5月に部活を引退してから、ほとんど走っていなかったのも、体力が落ちてしまった。陸上部の私としては少しくやしいけれど、こうなったらもう速さとかは関係なしに、ただ強行遠足を楽しもうと思って今回の強行遠足に臨んだ。

スタートしてすぐに、もうリタイアしてしまおうと思ったほどひどい腹痛におそわれたり、道に迷ったり、ハプニングばかりだったけれど、みんなの応援が私の足を動かし、忘れかけていた「走るのが好き」という気持ちを思い出させてくれた。走るのが、歩くのが、前に進むのが楽しくて、私はひたすら足を動かした。保護者、先輩などのスタッフはもちろん、吹奏楽部の先輩の演奏、観光客やお店の人、車の中の子ども、すれ違う人みんなの声援が、本当にうれしくて涙が出そうだった。毎年、本当に多くの人に支えられて、強行遠足が行なわれているのだということを実感した。私達を支えてくれた多くの人に感謝したい。

強行遠足はこれからも続けてほしい。あきらめないで頑張れば、筋肉痛の他に得られるものが必ずあると思うから!

—高生でヨカッタ!!

◆興石佳奈(3年)

走ることが好きで、苦しなかった私にとって、今回の強行遠足は地獄だった。

7時30分、昨年と同じ足取り、昨年と同じ友達とスタートした私は、昨年のように上位でゴールするという目標を立てていた。スタートしてしばらくは「今年もいける!」と思っていた。しかしそれは、昨年2位であったという気持ちの余裕であることに気づいていなかった。昨年こんな感じだったから、少しオーバーペースでも、息が苦しくても大丈夫だと思っていた。スタートして一つめの難関である上り坂に差し掛かった時「あれ?」と思った。見る見るうちに友達の背中は小さくなっていき、自分のペー

スが遅くなっていることに気づいた。と同時に、今までの気持ちはまちがっていたことにも気づかされた。昨年は毎日走り、部活も現役で体力もあったが、今年は全く違う状況であることに。こんなことは始めからわかっていたことなのに、それを認めなかった自分が恥ずかしく悔しかった。

大泉に着く頃には、足は鉄のように重く、思い通りにならず苛立った。でも野辺山に着くまでは足を止めるわけにはいかない、何としても自分の足でゴールしなくては、と自分を奮い立たせた。この一番辛い時に声をかけて下さったスタッフの方々の笑顔にどれだけ助けられたかわからない。本当にうれしかった。そして野辺山まであと5km。この頃の事は何も覚えていない。ただ早くゴールしたい、早くこの苦しさから逃れたい、とばかり考えながら足を進めていただろう。

12時ちょうどにゴール。この瞬間とてもうれしかったが、目標を達成できなかった悔しさと、屈辱的な順位は忘れられない。

しかしそれ以上に3年間の強行遠足では、人の優しさや温かさ、自分の気持ちに負けないこと、そして何かをやり遂げた時の達成感やうれしさなど多くのことが学べた。このことを胸に刻み、そして自信として、今後の生活にいかしていきたい。

◆藤網祐太(3年)

「もう駄目だ。」やる気はあった。自信はあった。それがみな砕かれた。もともと故障していた足は前へ進んでくれない。痛さに体が悲鳴を上げた。一度目の挫折。ゴールをあきらめてしまった。

「大丈夫？」立ちつくす自分に声がかかった。まぎれもない友の声。痛みが引いた。信じられなかった。大泉までの坂道を一緒に歩き、ゴールを目指した。友のありがたみが身に染みて泣きそうなくらいうれしかった。先が明るくなり、やる気が満ちたのもつかの間、大泉の検印所で動けなくなってしまった。二度目の挫折。友を先に行かせ、自分はリタイヤしようと思った。友は腰を痛めていた。痛いだろうに、つらいだろうに、彼はあきらめず歩き進めた。時間

がたつにつれて、自分がなさけなくなってきた。自分の不甲斐なさを責めた。氣力が戻ってきた。二度目の復活。動かない足を引きずり、先に行く友を、ゴールを目指した。

一歩を出す大切さ、歩み続ける大切さとともに、その難しさを知った。どの検印所でもあきらめようと思ったけれども、そうしないで一歩を出し続けられたのは友のおかげだ。

前進停止時刻と闘いながら、清里についた時にはあと1時間。間に合うと思った時には走っていた。自分でも不思議なくらい足は痛くなかった。

数十メートル先はゴール。この強行遠足で学んだものが、次々と心に浮かんだ。友の大切さ、関係者への感謝、進み続ける大切さと難しさ。その全てが、これからの人生の中で自分の中で生き続けるだろう。苦しみを越えられる強さを得ることが出来た。一高の生徒でよかったと思える1日だった。

帰りのバスへ乗る時、先を行った友の名前にラインマーカーが引いてあった。うれしくて涙が出た。

◆小林 茜(3年)

強行遠足の意義は、自分で考えて行動するということにあるのだと思う。何が必要か自分で考え、用意し、体験する。改善すべき点は来年に生かし、より上の目標に向かって努力する。この行動は、勉強にも大いに通じるものがあると思う。とは言え、強行遠足を行うにあたり、保護者や教職員の方々の支援は必要不可欠なものだと実感した。道の途中で声をかけてもらったり、検印所で励まされたりすると、何故かもう少し頑張ろうという気になれた。なかには道の途中で車をとめ、自分の子を見るためだけに来ている野次馬のような親がいて憤りも感じたが…。

今年は去年よりも30分以上早く野辺山に着くことができた。これは、去年の失敗点を今年に生かすことができたからだと思う。また、体育のペース走で自分の速さを把握しておいたことも大きいと思う。去年は自分のペースがわからなかったので、走る歩くをくり返し、すっかり疲れてしまっていた。

しかし今年は何分歩けば次の検印所だとわかったので、あと何分頑張ろうと思えた。

これは今年ではなく去年強く感じたことなのだが、気力も完走には重要な要素だと思う。何がなんでも時間内にたどり着いてやるという気持ちの有無で、例えばあと少しで制限時間という時に最後の直線を見た時の気持ちはだいぶ違うだろう。

受験は体力と気力勝負だと言われる。そこで強行遠足完走という記録は、大きな糧となると思う。今回得たものを最大限利用し、受験はもちろん、これからの生活に役立てていきたい。



○甲府一高強行遠足を終えて○

北見北斗高校 2年5組 渡辺 健太

「よく走ることが出来たな……。」というのが完走しての正直な気持ちです。

僕は決して長距離が得意ではありません。しかし、何故この強行遠足に北斗代表で出ようと決めたのかは断固たる思いがありました。

「甲府の皆さんと交流をして将来の人生への糧としたい。」ということでした。

僕がお世話になった2年7組の皆はとても優しく良い人達で、最初クラスへ行く時に緊張していた自分が恥ずかしくなるくらい仲良く接してくれました。また男子の出発は女子よりもだいぶ早いにもかかわらず、クラスの男子と僕のために朝飴を配っている女の子を見て感動したのを覚えています。

そして一高の先生の皆さんには本当に感謝しています。毎日僕たちのために様々なおもてなしをして頂き有り難く思いました。

このような心温かい人達の中で僕が走れたことはとても良い経験となり一生の宝物となりました。お手伝い頂いた保護者の皆さんには心強い応援をもらい、何度も歩こうという弱い部分が出たときに助けられました。また、僕はたくさんの人達の応援のおかげで最後まで走りきることができたと思っています。もう走れない。苦しい。でも足が動いていました。きっとそれは皆さんの応援の一つ一つが僕の一步となっていたのかもしれない。

一高の強行遠足を通して僕は人と人との繋がりを改めて実感させられました。僕が一高の皆さんを走って抜かしていくとき、何人もの人が頑張ると声をかけてくれました。学校で会ったときもそうでした。全く知らない人達に囲まれ、異なる環境の中で不安にならなかったのも皆さんのおかげです。皆さんがささえてくれたことは決して忘れることはないでしょう。そしてこれからも僕は多くの人に支えられ、助けられながら生きていきます。ですから今後ともその人達への感謝の気持ちを忘れず、逆に自分が人を支えてあげられるようなそんな人間になりたいなと思いました。

最後になりますが、本当に甲府一高の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。第八十回の記念となる強行遠足に参加できたこと、そして交流できたことは自分にとっての財産となりました。毎日お世話くださった先生、優しく迎えてくれた生徒の皆さん、応援やお手伝いしてくださった保護者の皆様ありがとうございました。

○甲府一高強行遠足に参加して○

北見北斗高校 2年 辻 泰世

今回、甲府一高の強行遠足に参加させて頂くことになり、初めて甲府の町並みを見てとても驚きました。北海道よりも道幅が狭く、すぐ傍に建物がある道を車で通った時には、建て物にぶつかったりしないのだろうか心配してしまうほどだったからです。また、町からとても近い所にある緑豊かな山々や、北海道ではあまり見られない瓦屋根の家々を見ることができ、そのような風景の中を走ることが更に楽しみになり、そしてとても嬉しく思いました。

翌日、初めて甲府一高へ行き、そしてクラスでは色々な人が緊張していた私にとっても気軽に話しかけてくれて、本当に嬉しかったです。また、強行遠足の前日には甲府一高の陸上部の皆さんと一緒に練習をさせて頂き、強行遠足についてのお話など色々なお話を聞けて、とても楽しく練習することが出来ました。

そして、強行遠足当日、移動中のバスの中やスタートする直前にも、クラスの皆さんとたくさんのお話をして、その中で不安や緊張は少しずつ薄れていき、私は落ち着いた状態で走り出すことが出来ました。

スタートした後、しばらくの間は、所々で多くの方々に声をかけて頂き皆さんのパワーをもらいながら、余裕を持って走ることが出来ました。ですが、坂道の傾斜がどんどん急になり、更に坂道の距離が長くなるにつれて、足は一気に重くなり、辛抱して走ってみてもなかなか思うようにペースをつくることが出来ず、走っては歩くを繰り返していました。

坂道は想像をはるかに上回る過酷なもので、一步でも立ち止まると途端に下へ転がり落ちてしまいそうなほど、体は限界に近い状態でした。なんとかゴールしたいという一心でひたすら坂道を登っていました。

ですが、力尽きそうになるたびに、周りの方々から本当に暖かいご声援を頂き、そのおかげで私は苦しい場面を乗り越えることが出来ました。また、道の途中だけでなく、車からも本当に多くの方々に声をかけて頂き、何度も励まされました。

そして、ようやくゴールすることができ、ゴールでもたくさん嬉しいお言葉をかけて頂いて、諦めずに走りきることが出来て本当に良かったと思いました。しじみ汁もとてもおいしかったです。

強行遠足の途中、お手伝いの方々と生徒の皆さんからの暖かいご声援がなければ、私は決して走り抜くことは出来ませんでした。また、強行遠足当日だけでなく、甲府滞在中に本当に色々な面で私たちを支えて下さった先生方や関係者の皆さんのお陰で、とても楽しく過ごすことが出来ました。この素晴らしい経験を北斗高校へしっかりと伝えると同時に、より一層文武両道に励みたいと思います。

本当にありがとうございました。



H18年度 強行遠足新聞

第1号 (1)

強行遠足新聞

平成18年9月1日 (金)

強行遠足新聞

甲府一高 生徒会係
平成18年度版 第1号
平成18年9月1日(金)

第八十回強行遠足を迎えるにあたって

伝統が息づく強行遠足

校長 高瀬 孝人



本校最大の伝統行事である「強行遠足」は、今年度で第八十回を迎えます。大正十三年（一九二四年）十

一月三日に発足して以来、終戦と台風襲来による三回の中止を除いて、毎年営々と行われてきました。まさに「伝統」の威力と息吹を感じさせる一大行事です。

「強行遠足」という名称が初めて使われたのは、大正十五年の第三回大会からでした。創始者の第十代江口俊博校長による『本校における強行遠足の意義と其の実際』には、「敢えて強行遠足と名づけたのは、自分の体力に忠じて歩けるだけ歩くという事を強調せんが為である」と、その由来

が説かれています。さらに、「強行」の意味については、次のような解説を加えています。「由来、人情の弱点は安易なものとの妥協である。歩く場合でも少しく疲労を感じると乗り物に乗るのを考える。或いはある程度で止めてしまおうという事になり勝ちである。之等一切の妥協と怠慢を排して、精根限り歩くという事を重視したのである。」

「功をせせらず、マイペースで、そして決して止めないことを私は強行遠足から学んだ。」今思えば、強行遠足は人生の如しで、一杯やれば必ず目標へ到達できるという自信を僕に与えてくれた。といった感想が各々のかけがえのない体験として回想されます。自らの体を通して味わった、こうした感激や充実感こそ一生の宝であり、「生きる力」の源泉であり、人生の支えであるとの実感が共有されているのを感じ取ることが出来ます。

ところで、昨年は、たいへん残念なことが起こりました。永いこと「白田のお婆ちゃん」で慕われてきた依田トミ子様が九十四歳で他界されました。この名物

「お婆ちゃん」は、毎年、一高生と会うのを無上の楽しみとし、りんごや牛乳やおにぎりを用意しながら、生徒たちが来るのを今や遅しと待っていてくださいます。家族ぐるみの親身も及ばぬ歓迎ぶりは語り草となっており、この時ばかりは自分を中心となって温かく迎えたいといつも張り切っておられました。

私たちが決して忘れてはならないのは、強行遠足の伝統の陰には、こうした沿道で温かい声援や協力をしてくださる方々、救護検印所や沿線の要所にあつて接待や巡視に当たってくださった保護者や同窓生の方々、さらには警察や病院などの関係機関の方々など、この行事の安全無事を願って御

支援くださる実に多くの人々のお力添えがあるという点です。これら多数の協力者への深い感謝の気持ちを、共に、その恩に報いるためにも、準備段階から周到な取り組みをし、本番では自らのベストを尽くして、果敢に自己の可能性に挑戦してほしいと思います。

今年、北海道・北見北斗高校の代表生徒も参加します。全校を挙げて心から歓迎すると共に、共通の伝統に立って、自己と闘いながら競合し合う良きライバルとして、相互の交流と親睦を深めてください。この大成功と諸君の大奮闘を期待しつつ、本番を迎えたいと思います。



【早朝、一高をスタートする男子生徒(昨年の強行遠足より)】

本年度の実施概要決まる コースは昨年と同じ 実施日は10月15日(日)

今年の強行遠足の概要が固まった。今年十月十五日に実施となる。昨年は北海道・北見北斗高校との強行遠足交流の派遣の関係で例年十月に実施してきた本校強行遠足を九月下旬に実施したが、今年例年通りに戻して実施する。

また、昨年に続き、実施日は日曜日となる。休日の方が保護者や医師の協力が得やすく、出発から二時間ほど、生徒が集中する時間帯と通勤時間帯が重ならない事などのメリットが大きいと判断したためである。また、今年も雨天に

備えての予備日は設けられない。コースは、概ね昨年と同じであり、主だった変更点はない。今後、台風などの災害により通行止めの箇所が出るなど状況が変わった場合にはコースが変更となる可能性もある。

強行遠足当日は、男子は早朝四時三十分までに学校に集合、五時出発、終了は十六時で制限時間は十一時間。女子は、朝五時三十分、緑が丘体育館前に集合し、六時にバスで須玉小学校まで移動。須玉小学校から七時三十分はスタートする。終了は十五時。制限時間は七時間三十分。男子、女子とも昨年と同じである。

強行遠足健康上の留意点
事前の諸注意について
強行遠足に臨むにあたり、心の準備と体の調整を万全に行うことは非常に重要なことである。強行遠足は、心身共に自己を鍛える良い機会である。心身共にベスト・コンディションで参加できるように体調を整えておくことが求められる。

朝夕の気温が下がってくる。風邪をひいたり、胃腸を悪くするものが例年多くなる時期であるので、予防にしっかりと努めるようにする。

③規則正しい食生活で、胃腸の調子を整える。

④便秘の予防を心がける。

⑤睡眠を十分に取って、疲労の蓄積を避ける。

以上の事柄に留意し、無事故で、自分の力を十分に発揮できるように取り組んで欲しい。



平成18年度

第80回 強行遠足



発行所
甲府一高新聞部
甲府市美咲二丁目13-44

第八十回強行遠足

暁に響く号砲の下
スタートがきられた



十月十四日(土)
第80回強行遠足出発式に先立ち、強行遠足を通して交流行っている、北海道北見北斗高等学校の皆さんを迎え、歓迎式が実施された。

続いて行われた出発式では、高瀬校長の挨拶の後、竹内有二PTA会長が「運営を下される皆さんに、感謝の気持ちを忘れないように。」と述べ、望月操三同窓会長が「ゴール目指して頑張ってください。」と激励した。また、強行遠足で百四十六kmという到達記録を持つ岩間孝吉さん(昭三卒)が自らの体験を語り、ゴール野辺山を目指した。

第80回強行遠足記録

男子(55.4km)	
参加者数	406名
参加率	96.7%
野辺山到着者数	320名
野辺山到着率	78.8%
女子(30.3km)	
参加者数	392名
参加率	95.4%
野辺山到着者数	368名
野辺山到着率	93.9%

強行遠足を終えて

校長 高瀬 孝人

今回の強行遠足は、第80回という記念すべき大会でした。皆さんの努力と協力により、こうして無事に終了することができましたことを何より嬉しく思っています。皆さん一人一人にとって、厳しいチャレンジの場であったと同時に、得難い、充実した体験として、良き思い出のページとなったことと思います。どうかここで得たことを今後の生活に生かして行ってください。

北見北斗高校からは、金山校長先生をはじめ教職員・生徒の皆さんに参加して頂き、思い出深い大会になりました。よい交流ができたと思います。

北見北斗高校参加者



3年 秋山 耕一君

70kmの自校の強行遠足と比較して少々甘い考えで参加しましたが、予想以上に死ぬほど登り坂がキツくて厳しい強行遠足でした。



2年 渡辺 健太君

思った以上に苦しくて、何度も歩こうとしたとき、周囲の人達の応援で助けられました。一緒に走ってくださった皆さんに感謝しています。



3年 古屋 茉莉絵さん

走ったり、歩いたりくり返して、到着のことばかり考えていました。一高の女子と話をしながら、走りきることができて、いい思い出となりました。



2年 辻 泰世さん

長い長い坂道の途中、周囲の人々からの暖かい声援でのりきることができました。皆さんの暖かい人柄にふれ、すばらしい経験をさせていただき嬉しく思っています。



- ・昨年は北見北斗の強行遠足に参加したため初めて野辺山にゴールしました。最高の強行遠足でした。(3年女子)
- ・ワクワクして、前日は2時間ほどしか眠れませんでした。無事目標通りゴールでき嬉しく思っています。(1年男子)

稀有の誉れ

北海道北見北斗高等学校
校長 金山 繁樹

少し腐寒い早朝の寒気は「さあヤルゾ!」という生徒の気概を優しくつつんでくれているようでもある。全国のどこにもない稀有の行事に参加させていただけたいことは、北見北斗高校の誉りでもあります。輝かしい80回目の強行遠足は伝統の中に立派に終了しました。生徒も教職員・関係支援者、全てが意欲的で建設的でありました。本日の天候と完走率がそれを証明して居ります。今後更なる発展と良き交流を祈念し、感謝の心で帰道致します。

ようこそ北海道北見北斗高校の皆さん～



暁の甲斐の高原を駆け抜ける北の若人



強行遠足の出発式に先立ち、北海道北見北斗高等学校の関係者及び、生徒の皆さんを迎える歓迎式が行われた。

北見北斗高校からは、金山繁樹校長、高橋利雄事務長、渡辺和勇同窓会長、大川博司教諭。生徒代表として、3年生の秋山耕一君・古屋茉莉絵さん、2年生の渡辺健太君、辻泰世さんの計8名が来校した。歓迎の言葉に続き、来校者の紹介、本校吹奏楽部による北見北斗高校校歌の演奏、記念品の贈呈、応援団からの激励が行われた。

また、北見北斗高校の金山校長から、「第80回という記念すべき大会に参加でき光栄です。強行遠足という行事は、克己心を養うのに大切な行事です。両校の生徒諸君の健闘を祈ります。」という励ましの言葉があった。

体育振興主任
進藤 和弥

第80回強行遠足にあたり、同窓会・PTAの皆様には早朝よりの御協力をいただき、無事に当初の目的を達成することができました。関係の皆様にも心より御礼申し上げます。今回の強行遠足は天候にも恵まれ、例年になく高い完走率となりました。個々の生徒もそれぞれ自己の目標を達成したのではないかと思います。北見北斗高校からの参加者も良く健闘し、交流も深まったこととおもいます。

強行遠足 Q & A

進藤和弥

Q1 : 強行遠足を24時間実施していたのはいつまでだろうか？

A : 大正14年第2回から昭和36年第36回まで信濃大町方面コースで24時間制で実施していた。

【解説】条件が揃えば現在でも24時間制でやりたいが、交通事情、健康・安全保持のための人員確保など難問があり現実的には不可能である。

Q2 : 24時間制での最高到達地点はどこまでだろうか？

A : 昭和32年第33回強行遠足において長野県大町市築場まで(167.1km)を岩間孝吉さんが走破した。

【解説】小諸までが103.3kmですので、あと約64km。あなたは時間があれば歩けますか。

Q3 : 女子が参加したのはいつからだろうか？

A : 昭和25年第26回強行遠足から女子も参加した。

【解説】女子は終点指定制で実施した。初期の頃の女子の具体的な記録が残念ながら残っていない。

Q4 : 強行遠足が中止になったことはあったのだろうか？

A : (1)全部中止になった年

- ①昭和20年、終戦につき中止
- ②昭和34年、伊勢湾台風による道路欠損が多く中止
- ③平成2年、台風による降雨のため中止

(2)女子のみ中止になった年(男子は実施)

- ①昭和46年、降雨のため中止
- ②昭和51年、降雨のため中止

【解説】男子は実施し翌日出発の女子のみ中止。昭和51年には、バスで出発地(高根東小)に行ったが、雨が激しくそのままバスから降りずに帰校した。

(3)途中で中止になった年

- ①昭和7年第9回
- ②昭和12年第14回
- ③昭和15年第17回
- ④昭和29年第30回
- ⑤昭和30年第31回
- ⑥昭和44年第44回
- ⑦昭和46年第46回
- ⑧平成16年第78回

【解説】信濃大町方面は24時間制だったので途中降雨中止が幾度かあった。佐久往還コースになっても昭和44年には女子が降雨のため野辺山で中止、昭和46年に男子が降雨のため途中中止になったが、中止命令が出た時のトップの21人は小諸に到着していた。終点が野辺山になってからは平成16年度に男女とも降雨のため途中中止になった。

Q5 : コースはどのくらい変更されたのだろうか？

A : 昭和37年に信濃大町方面(国道20号線)の交通事情の悪化のため現在の佐久往還コースに大変更された。また、次表のとおり佐久往還コースでも幾度か変更された。

【解説】出発地・最終地の変更の他に一部区間の変更も道路状況の変化に伴い毎年のようにあり、実施距離も変動が多い。平成15年第77回より大幅なコース変更により距離が半分に縮小された。

	年度(回)	出発地～最終地点	距離(km)
男子	昭和37年(37)	学校～松原湖	66.0
	昭和38年(38)	学校～中込	87.0
	昭和40年(40)	学校～小諸	100.0～107.3
	平成15年(77)～	学校～野辺山	53.7～55.4
女子	昭和37年(37)	箕輪新町～松原湖	38.0
	昭和38年(38)	箕輪新町～海ノ口	32.0
	昭和39年(39)	若神子～野辺山	26.0
	昭和40年(40)	三軒屋～小海	32.0～33.0
	昭和47年(47)	高根東小～海ノ口	32.0～33.0
	昭和50年(50)	高根東小～小海	41.5～46.0
	平成3年(65)	須玉小～小海	45.8～46.0
	平成15年(77)	穂足ランド～野辺山	31.0
	平成16年(78)	旧須玉商～野辺山	32.8
	平成17年(79)～	須玉小～野辺山	30.8～30.3

Q6：参加率が最高なのはいつだろうか？

A：男子 第73回の98.7% (468/474人参加)が
最高

※第80回は96.9% (406/419人参加)

女子 第38回の98.2% (319/325人参加)が
最高

※第80回は95.4% (392/411人参加)

【解説】毎年95%以上の参加率であり他校に比べ高
い。これは本校強行遠足の特徴の一つである。

Q7：到達率が最高なのはいつだろうか？

A：男子 第57回の69.3% (415/599人参加)が
最高

※第80回は78.8% (406/419人参加)

女子 第16回の95.7% (487/509人参加)が
最高

※第80回は93.9% (392/411人参加)

【解説】第77回より最終地点が野辺山になったので
小諸まで実施していた時と比較はできない
が、距離から見た場合いかに約70%の到達
率がすごいものか驚かされる。

Q8：参加者の平均走破距離が最高なのはいつ、ど
のくらいの距離だろうか？

A：男子 第55回の93.9kmが最高
(岩村田の手前1.6km付近まで到達)

女子 第67回の43.8kmが最高
(小海の手前1.8km付近まで到達)

【解説】昭和55年は到達率でも69.2%と最高の昭和
57年と0.1%しか変わらず、平均距離では3
km以上長い。つまり途中中止者もかなり遠く
まで行った頑張りがうかがえる。

Q9：終点地小諸での最高記録はどれくらいだろ
うか？

A：男子 第62回が最高
所要時間：11時間18分(到着時刻：1時48分)

走行距離：102.0km(平均速度：9.03km/h)

女子 第64回が最高

所要時間：3時間34分(到着時刻：10時14分)

走行距離：41.5km(平均速度：11.65km/h)

【解説】大会によって実施距離が違い、天候などの条
件に大きく影響されるので単純比較できな
いが、所要時間(到着時間)で見ると上記のと
おり。

昭和62年(62回)の男子の最高記録は以前の
記録(3時間09分)を大幅短縮した大記録で
あり、各救護検印所の到着予想をはるかに上
回るペースであった。そのため小諸寄りの救
護検印所では仮眠をとっている最中にトッ
プの生徒が職員を起こして検印してもらっ
たエピソードが残っている。

Q10：小諸方面コースでの記録を合計するとどの
くらいになるのだろうか？

(注)第40回～第80回までの全日制の記録

A：(1)参加総数

男子 27,349人

女子 18,395人

(2)参加率

男子 97.0%

女子 94.8%

(3)総走行距離

男子 2,102,526km

女子 701,864km

(4)平均走行距離

男子 68.3km

女子 36.6km

【解説】男女合計すると総走行距離は2,804,390km
になり、地球と月を約3往復相当の距離に
なる。平均走行距離は、男子では松原湖、女
子は、海ノ口を超えたことになる。第1回
から第39回までの正確な記録が確認できな
い部分もあるが、確認できる範囲の記録を
合計すると参加総数89,386人、総走行距離
5,561,556kmになる。確認できない分を入
れると、実際はそれ以上の数字となる。強行
遠足の歴史と重みを改めて感じる。

(編集委員)

強行遠足の記録

第40回－80回

昭和40年・1965－平成18年・2006

(表1)

各地到着者数の記録(男子)

年	度	昭和40	昭和41	昭和42	昭和43	昭和44	昭和45	昭和46	昭和47	昭和48	昭和49	昭和50	昭和51	昭和52
回	数	第40回	第41回	第42回	第43回	第44回	第45回	第46回	第47回	第48回	第49回	第50回	第51回	第52回
葦	崎	48	66	47	21	20	13	18	2	9	3	4	1	1
若	神	14	23	19	18	23	16	17	7	11	15	3	7	5
箕	輪	24	30	26	13	13	16	19	4	1	6	5	6	2
長	沢	27	72	25	33	24	37	27	20	11	6	12	10	5
三	軒	16	7	10	2	9	4	5	12	12	12	7	14	6
清	里	165	186	190	111	154	43	109	94	59	34	49	41	23
野	辺	343	297	263	226	247	194	142	113	97	73	71	82	15
市	場	5	10	4	14	10	6	59	4	1	4	13	33	28
海	ノ	115	141	154	135	94	68	109	104	64	46	40	104	36
松	原	50	69	23	32	11	5	69	9	24	25	8	52	12
小	海	227	157	193	160	71	37	44	71	53	18	9	8	6
八	千	49	11	49	66	48	149	45	31	33	23	40	18	16
羽	黒	50	53	21	5	11	5	5	14	9	5	0	4	9
白	田	58	37	60	87	80	56	46	102	113	128	56	31	73
中	込	62	82	58	62	32	70	33	39	21	30	46	19	31
岩	村	5	22	9	3	4	10	92	7	9	13	11	12	8
三	岡	6	8	4	6	13	8	39	3	4	6	9	11	14
小	諸	228	170	191	188	163	213	21	219	306	404	455	347	436
在籍者数(人)		1,562	1,511	1,397	1,233	1,085	990	930	875	860	877	858	821	742
不参加者数(人)		70	70	51	51	58	40	31	20	23	26	20	21	16
参加者数(人)		1,492	1,441	1,364	1,182	1,027	950	899	855	837	851	838	800	726
参加率(%)		95.5	95.4	96.3	95.9	94.7	96.0	96.7	97.7	97.33	97.0	97.7	97.4	97.8
到達率(%)		15.3	11.8	14.2	15.9	15.9	22.4	2.3	25.6	36.6	47.5	54.3	43.4	60.1
総走行距離(km)		93,705	86,961	84,544	78,225	65,965	67,810	56,917	65,507	67,494	72,906	73,132	64,753	66,540
平均距離(km)		62.8	60.3	62.8	66.2	64.0	71.4	63.3	76.6	80.6	85.7	87.3	80.9	91.7
実施距離(km)		100.0	103.0	102.1	102.1	102.0	103.0	103.0	107.3	106.0	105.0	105.0	105.0	105.0

年	度	昭和53	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2
回	数	第53回	第54回	第55回	第56回	第57回	第58回	第59回	第60回	第61回	第62回	第63回	第64回	—
葦	崎	3	17	16	(1) 2	1	1	22	13	2	1	4	20	
若	神	2	1	3	1	8	2	7	0	3	4	3	3	
箕	輪	3	4	1	4	0	1	2	1	1	4	7	6	
長	沢	6	2	5	5	4	4	5	4	3	0	5	0	
三	軒	6	4	4	7	4	6	14	7	5	1	2	0	
清	里	8	6	3	17	9	10	16	14	16	2	19	17	
野	辺	21	23	16	17	14	14	25	37	46	50	41	24	
市	場	24	3	18	17	6	5	6	8	10	10	11	16	
海	ノ	14	22	12	18	33	61	40	28	40	48	51	38	
松	原	7	4	4	0	4	7	15	1	12	9	28	17	
小	海	2	5	15	35	24	2	4	1	9	3	11	29	
八	千	33	31	13	25	17	11	32	6	51	35	15	23	
羽	黒	4	5	4	3	3	6	11	10	1	3	1	3	
白	田	49	68	49	26	27	36	40	40	43	51	45	52	
中	込	36	24	17	25	10	5	11	14	7	13	17	9	
岩	村	9	17	8	9	7	4	4	1	4	3	2	11	
三	岡	9	13	9	3	13	13	14	8	12	7	7	0	
小	諸	438	378	442	394	415	414	342	391	281	295	272	292	
在籍者数(人)		695	655	651	639	622	622	629	607	572	560	578	584	—
不参加者数(人)		21	23	15	30	23	20	19	23	26	21	37	24	—
参加者数(人)		674	632	639	609	399	602	610	584	546	539	541	560	—
参加率(%)		97.0	96.5	98.2	95.3	96.3	96.8	97.0	96.2	95.5	96.3	93.6	95.9	—
到達率(%)		65.0	59.8	69.2	64.7	69.3	68.8	56.1	67.0	51.5	54.7	50.3	52.1	—
総走行距離(km)		60,767	58,018	59,978	54,128	54,387	54,385	51,180	51,759	46,130	46,548	44,969	46,885	—
平均距離(km)		90.2	91.8	93.9	88.9	90.8	90.3	83.9	88.6	84.5	86.4	83.1	83.7	—
実施距離(km)		105.0	105.0	105.0	101.0	101.0	101.0	101.5	101.5	101.7	102.0	102.0	102.0	—

各地到着者数の記録(女子)

年 度	昭和40	昭和41	昭和42	昭和43	昭和44	昭和45	昭和46	昭和47	昭和48	昭和49	昭和50	昭和51	昭和52
回 数	第40回	第41回	第42回	第43回	第44回	第45回	第46回	第47回	第48回	第49回	第50回	第51回	第52回
高 根 東 小	-	-	-	-	-	-	女 子 の み 中 止	0	0	0	(1)	女 子 の み 中 止	0
長 沢	-	-	-	-	-	-		0	0	1	0		1
三 軒 屋	0	0	0	0	0	0		2	3	3	1		0
清 里	0	0	2	3	0	1		6	6	4	0		2
野 辺 山	3	11	7	2	351	1		23	19	8	6		8
市 場	4	0	0	2	途	0		6	8	7	2		20
海 ノ 口	30	14	34	18	中	17		412	417	446	32		232
松 原 湖	171	91	51	55	中	46		-	-	-	20		52
小 海	153	253	272	276	止	310		-	-	-	447		293
在籍者数(人)	388	392	398	389	398	417		-	479	493	500		540
不参加者数(人)	27	23	32	33	47	42	-	30	40	31	31	-	19
参加者数(人)	361	369	366	356	351	375	-	449	453	469	509	-	608
参加率(%)	93.0	94.1	92.0	91.5	88.2	89.9	-	93.7	91.9	93.8	94.3	-	97.0
到達率(%)	42.4	68.6	74.3	77.5	0	82.7	-	91.8	92.1	95.1	87.8	-	48.2
総走行距離(km)	10,653	11,281	10,910	10,838	4,142	11,970	-	13,923	14,061	14,711	20,792	-	22,466
平均距離(km)	29.5	30.6	29.8	30.4	11.8	31.9	-	31.0	31.0	31.4	40.8	-	37.0
実施距離(km)	32.0	33.0	33.0	33.0	33.0	33.0	-	32.0	32.0	32.0	42.0	-	42.0

年 度	昭和53	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成 2
回 数	第53回	第54回	第55回	第56回	第57回	第58回	第59回	第60回	第61回	第62回	第63回	第64回	-
高 根 東 小	0	0	0	0	(1)	0	0	0	0	0	0	0	雨 天 中 止
長 沢	0	1	0	0	1	0	0	6	2	1	4	0	
三 軒 屋	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	2	
清 里	5	5	0	2	1	1	1	1	1	0	5	4	
野 辺 山	8	7	3	3	2	1	3	7	4	5	1	9	
市 場	11	11	4	2	1	4	3	0	1	3	1	1	
海 ノ 口	20	17	7	6	4	10	12	4	1	14	10	6	
松 原 湖	31	32	17	16	20	45	22	11	13	36	25	42	
小 海	499	452	521	535	543	533	538	535	487	446	497	516	
在籍者数(人)	611	555	591	609	624	636	627	603	549	555	584	617	
不参加者数(人)	37	30	39	45	50	42	46	39	40	50	43	37	-
参加者数(人)	574	525	552	564	574	594	581	564	509	505	543	580	-
参加率(%)	93.9	94.6	93.4	92.6	92.0	93.4	92.7	93.5	92.7	91.0	92.7	94.0	-
到達率(%)	86.9	86.1	94.4	94.9	94.6	89.7	92.6	94.9	95.7	88.3	91.5	89.0	-
総走行距離(km)	23,354	21,302	22,642	23,129	23,501	24,212	23,697	22,936	20,711	20,479	22,013	23,450	-
平均距離(km)	40.7	40.6	41.0	41.0	40.9	40.8	40.8	40.7	40.7	40.6	40.5	40.4	-
実施距離(km)	42.0	42.0	42.0	41.5	41.5	41.5	41.5	41.5	41.5	41.5	41.5	41.5	-

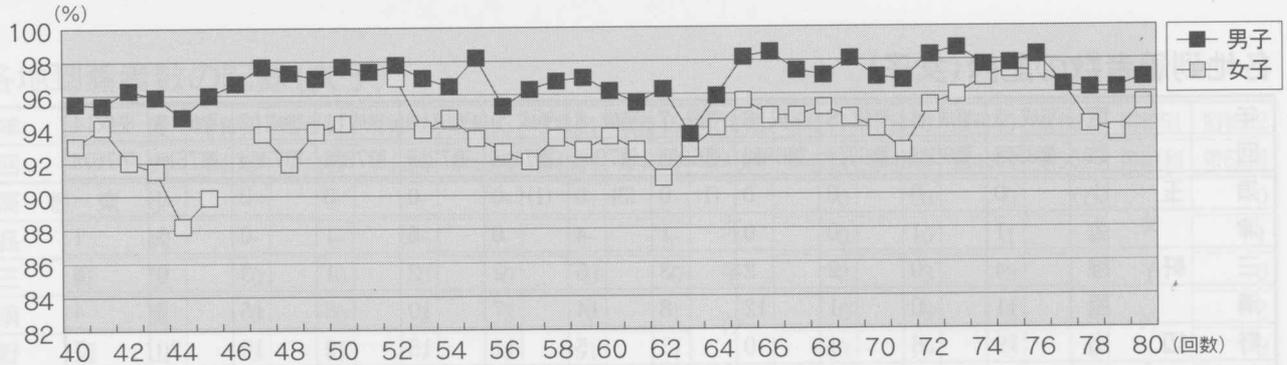
各地到着者数の記録(女子)

年 度	平成 3	平成 4	平成 5	平成 6	平成 7	平成 8	平成 9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
回 数	第65回	第66回	第67回	第68回	第69回	第70回	第71回	第72回	第73回	第74回	第75回	第76回
須 玉 小	0	0	0	0	(1) 0	(3) 0	(1) 0	0	0	0	0	-
津 金	1	1	0	0	1	4	6	6	1	0	1	1
三 軒 屋	4	0	2	2	3	5	2	2	1	3	0	0
清 里	11	0	1	12	8	14	7	10	8	15	7	4
野 辺 山	79	6	1	0	13	5	11	15	19	10	20	7
市 場	64	10	9	0	14	19	14	15	26	21	9	0
海 ノ 口	12	68	61	83	61	71	70	64	59	43	66	70
松 原 湖	55	151	70	53	36	52	56	54	57	48	45	47
小 海	318	281	360	243	335	291	285	304	324	353	332	306
在籍者数(人)	569	546	532	522	499	494	488	493	516	509	493	447
不参加者数(人)	25	29	28	25	27	30	36	23	21	16	13	12
参加者数(人)	544	517	504	497	472	464	452	470	495	693	480	435
参加率(%)	95.6	94.7	94.7	95.2	94.6	93.9	92.6	95.3	95.9	96.9	97.4	97.3
到達率(%)	58.5	54.4	71.4	48.9	71.0	62.7	63.1	64.7	65.5	71.6	69.2	70.3
総走行距離(km)	21,602	22,214	22,054	21,351	20,005	19,138	19,548	20,333	21,595	21,737	21,153	18,639
平均距離(km)	39.7	43.0	43.8	43.0	42.4	41.2	43.2	43.3	46.6	44.1	44.1	42.8
実施距離(km)	46.0	46.0	46.0	46.0	45.8	45.8	47.4	47.4	47.4	47.4	47.4	45.5

年 度	平成15	平成16	平成17	平成18
回 数	第77回	第78回	第79回	第80回
高 根	20	342	6	4
若 林	4	65	10	0
大 泉	26	0	0	5
ま き ば	29	0	15	5
清 里	14	0	4	5
野 辺 山	347		369	368
在籍者数(人)	456	438	437	411
不参加者数(人)	16	26	26	19
参加者数(人)	440	412	409	392
参加率(%)	96.5	94.1	93.6	95.4
到達率(%)	78.9	00.0	90.2	93.9
総走行距離(km)	12,441	4634.5	11,954	11,491
平均距離(km)	28.3	11.2	29.2	29.3
実施距離(km)	31.0	32.8	32.8	30.3

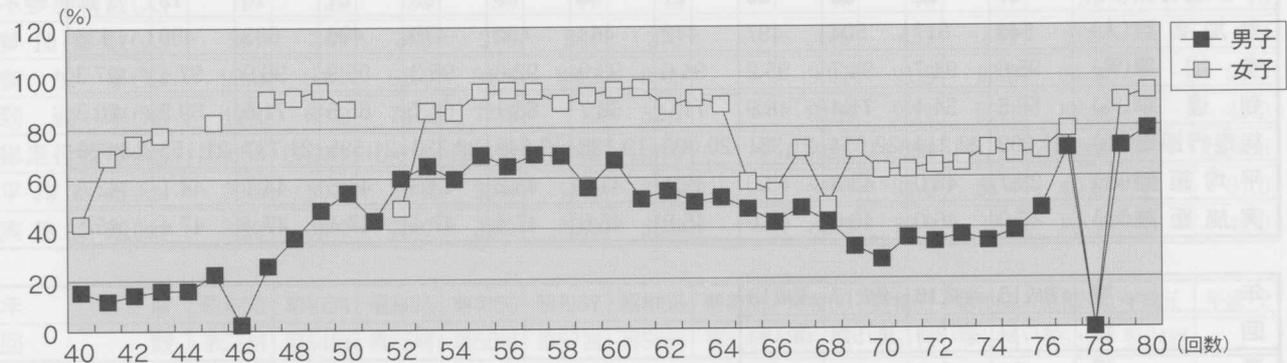
〈表2〉

小諸方面 37回参加率及び野辺山終点4回参加率の変遷



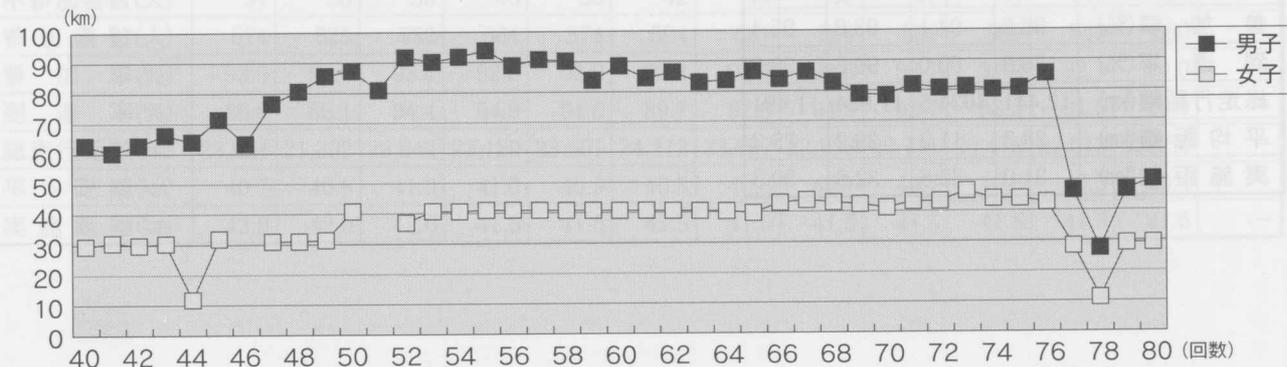
- 【解説】
- 女子46回・51回は中止
 - 男子平均：96.9% 女子平均：93.7%
 - 男子73回(98.7%) 女子75回(97.4%)が過去最高参加率
 - 第78回は、雨天途中中止

小諸方面 37回最終地点及び野辺山終点4回最終地点到達率の変遷



- 【解説】
- 女子46回・51回は中止
 - 男子は52回から60回にかけてほとんど60%以上の到着率であったが、ここ10年間以上50%にも達せず低下減少が続いている。平均すると参加者の37.9%が終点小諸に到着したことになる。
 - 女子は42km前後で実施していた頃には90%以上の到着率であったが、65回以後距離が延びたため低下した。しかし、ここ7年間はコースに慣れてきたため60%以上の到着率に回復した。
 - 第73回以降のコースの距離は男子105.3km、女子47.4km。
 - 第77回より距離が短縮されたが、高根からまきば公園まで上り坂が続くために生徒にはきついコースとなっている。
 - 第78回は、雨天途中中止のため、最終地点到達者なし。

小諸方面 37回平均走行距離及び野辺山終点4回平均走行距離の変遷



- 【解説】
- 女子46回・51回は中止、44回は野辺山にて雨天中止。
 - 男子は52回から58回にかけてほとんど平均90kmを越えた。
 - 女子は65回以降到着率は低下したが、距離が延びたため平均距離は反対に延びている。
 - 第78回は、雨天途中中止のため、最終地点到達者なし。

〈表3〉

山梨県立甲府第一高等学校強行遠足年表

*参加者数は全日制・定時制・通信制各男女の合計

コース	年度	回数	参加者数	制限時間	実施期日	特記事項	
※①	大正13 (1924)	1	不明	男子:12時間 女子:不参加	11/3	最高到達地-上野原駅(70.0km) 14人 ※①差出の磯・御嶽金桜神社・新府城・東京本面から各自コースを選び実施	
※②	大正14 (1925)	2	不明	男子:24時間 女子:不参加	11/4	最高到達地-松本(120.4km) 到着者数不明 24時間制で実施 ※②松本方面へコース変更	
	大正15 (1926)	3	588人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-松本(120.4km) 14人	
※③	昭和2 (1927)	4	666人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-木曾福島(158.0km) 3人 ※③木曾福島方面へコース変更	
	昭和3 (1928)	5	786人	男子:24時間 女子:不参加	11/5~6	最高到達地-贅川(124.0km) 3人	
信濃大町方面	昭和4 (1929)	6	858人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-豊科(128.9km) 2人	
	昭和5 (1930)	7	853人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-松本(120.4km)5人 ●実施要項初めて作成される ●最優秀者に金メダル授与	
	昭和6 (1931)	8	859人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-有明(135.9km) 1人	
	昭和7 (1932)	9	859人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	降雨のため先頭上諏訪にて中止	
	昭和8 (1933)	10	892人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-有明(135.9km) 1人	
	昭和9 (1934)	11	875人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-梓橋(122.7km) 2人	
	昭和10 (1935)	12	891人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-合染(140.4km) 1人	
	昭和11 (1936)	13	890人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-有明(135.9km) 1人	
	昭和12 (1937)	14	890人	男子:24時間 女子:不参加	11/5~6	降雨のため先頭辰野にて中止 辰野到着 7人(86.0km)	
	昭和13 (1938)	15	871人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-豊科(128.9km) 1人	
	昭和14 (1939)	16	914人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-豊科(128.9km) 2人	
	昭和15 (1940)	17	936人	男子:24時間 女子:不参加	11/13~14	降雨のため先頭松本にて中止 松本到着 59人(117.5km)	
	昭和16 (1941)	18	1,046人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-有明(135.9km) 2人	
	昭和17 (1942)	19	1,184人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-有明(133.7km) 2人	
	昭和18 (1943)	20	1,255人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-松川(141.3km) 2人 ●強行遠足20周年記念行事 ●記録映画撮影、厚生省関係者来校	
	昭和19 (1944)	21	685人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	戦時中につき、1・2年のみ小野まで実施 小野到着 111人(91.7km)	
	昭和20 (1945)						大東亜戦争終戦につき中止
	昭和21 (1946)	22	1,743人	男子:24時間 女子:不参加	10/29~30	最高到達地-穂高(131.5km) 4人	
	昭和22 (1947)	23	1,429人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地-松川(141.3km) 2人	
	昭和23 (1948)	24	1,160人	男子:24時間 女子:不参加	10/29~30	最高到達地-松川(141.3km) 1人 ●併設中学と新制高校合同参加のもとに実施される	
昭和24 (1949)	25	1,240人	男子:24時間 女子:不参加	10/26~27	最高到達地-信濃大町(152.6km) 1人 ●当固より定時制生徒希望者89人参加		

コース	年度	回数	参加者数	制限時間	実施期日	特記事項
信濃大町方面	昭和25 (1950)	26	1,548人	男子:12時間 女子: 6時間	10/31~11/1	男子:最高到達地-信濃大町(152.6km) 1人 女子:学校から穴山(距離不明) 104人参加 ●当固から女子が参加する ●創立70周年記念記録映画撮影
	昭和26 (1951)	27	1,657人	男子:24時間 女子: 8時間	10/25~26	男子:最高到達地-木崎(156.9km) 1人 女子:学校から台ヶ原(28.6km) 206人到着
	昭和27 (1952)	28	1,638人	男子:24時間 女子: 8時間	10/25~26	男子:最高到達地-松川(141.1km) 2人 女子:学校から日野春(距離不明) 338人到着
	昭和28 (1953)	29	1,555人	男子:24時間 女子: 8時間	10/25~26	男子:最高到達地-信濃大町(152.6km) 1人 女子:学校から日野春(距離不明) 到着者数不明
	昭和29 (1954)	30	1,206人 ※④ 男子のみ	男子:24時間 女子: 8時間	10/25~26	男子:降雨のため先頭川岸(76.6km)で中止 川岸到着 3人 女子:学校から日野春(距離不明) 314人到着 ※④ 女子参加者数不明
	昭和30 (1955)	31	1,322人	男子:24時間 女子: 8時間	10/25~26	男子:降雨のため先頭岡谷(77.5km)で中止 岡谷到着 6人 女子:学校から富士見(45.2km) 132人到着
	昭和31 (1956)	32	1,421人	男子:24時間 女子: 8時間	10/25~26	男子:最高到達地-松川(142.8km) 1人 女子:学校から富士見(45.2km) 182人到着
	昭和32 (1957)	33	1,437人	男子:24時間 女子: 8時間	10/14~15	男子:最高到達地-築場(167.1km) 1人 【当コースの最高記録となる】 女子:学校から富士見(45.2km) 86人到着
	昭和33 (1958)	34	1,494人	男子:24時間 女子: 8時間	10/29~30	男子:最高到達地-木崎(160.2km) 1人 女子:学校から富士見(45.2km) 156人到着 ●記録映画「若き脚の記録」を撮影
	昭和34 (1959)					伊勢湾台風による道路欠損多く中止
小諸方面	昭和35 (1960)	35	1,507人	男子:24時間 女子: 8時間	10/28~29	男子:最高到達地-信濃大町(152.6km) 1人 女子:学校から富士見(45.2km) 96人到着 ●創立80周年記念行事の一環として実施される
	昭和36 (1961)	36	1,378人	男子:24時間 女子: 8時間	10/19~20	男子:最高到達地-信濃大町(152.6km) 1人 女子:学校から富士見(45.2km) 126人到着
	昭和37 (1962)	37	1,403人	男子:15時間 女子: 7時間	10/16~17	男子:終点松原湖(66.0km) 267人到着 女子:箕輪新町から松原湖(38.0km) 14人到着 ●佐久往還コースに変更
	昭和38 (1963)	38	1,576人	男子:17時間 女子: 5時間	10/10~11	男子:終点中込(87.0km) 72人到着 女子:箕輪新町から海ノ口く32.0km) 18人到着
	昭和39 (1964)	39	1,787人	男子:17時間 女子: 5時間	9/30~10/1	男子:終点中込(87.0km) 127人到着 女子:若神子から野辺山(26.0km) 146人到着
	昭和40 (1965)	40	1,959人	男子:20時間 女子: 5時間	10/15~16	男子:終点小諸(100.0km) 235人到着 女子:三軒屋から小海(32.0km) 146人到着 ●創立85周年記念行事として実施 記念記録映画撮影 ●スタジオ102出演
	昭和41 (1966)	41	1,810人	男子:20時間 女子: 5時間	10/17~18	男子:終点小諸(103.0km) 170人到着 女子:三軒屋から小海(33.0km) 253人到着 ●水道道、敷島金属、ガソリンスタンドコース採用
(終点地制)	昭和42 (1967)	42	1,796人	男子:20時間 女子: 5時間	10/16~17	男子:終点小諸(102.1km) 191人到着 女子:三軒屋から小海(33.0km) 272人到着
	昭和43 (1968)	43	1,564人	男子:20時間 女子: 5時間	10/7~8	男子:終点小諸(102.1km) 188人到着 女子:三軒屋から小海(33.0km) 276人到着 ●二校選抜 ●女子学年別ユニフォーム着用
	昭和44 (1969)	44	1,439人	男子:20時間 女子: 5時間	10/7~8	男子:終点小諸(102.0km) 163人到着 女子:降雨のため野辺山で中止
	昭和45 (1970)	45	1,352人	男子:20時間 女子: 5時間	10/6~7	男子:終点小諸(103.0km) 213人到着 女子:三軒屋から小海(33.0km) 310人到着 ●創立90周年記念行事

コース	年度	回数	参加者数	制限時間	実施期日	特記事項
小諸 方面 (終点地制)	昭和46 (1971)	46	911人 男子のみ	男子:21時間 女子: 5時間	10/13~14	男子: 終点小諸(103.0km) 21人到着 降雨のため途中中止 女子: 雨天中止 ●小諸コース10周年 ●定時制生徒最後の参加 ●男子反射テープ使用 ●団体乗車方式採用
	昭和47 (1972)	47	1,304人	男子:21時間 女子: 6時間	10/17~18	男子: 終点小諸(107.1km) 219人到着 女子: 高根東小から海ノ口(32.0km) 412人到着 ●松原湖迂回、原口タリー、上の山コース採用 ●NHKカメラリポート取材
	昭和48 (1973)	48	1,290人	男子:21時間 女子: 6時間	10/17~18	男子: 終点小諸(106.0km) 306人到着 女子: 高根東小から海ノ口(32.0km) 417人到着
	昭和49 (1974)	49	1,320人	男子:21時間 女子: 6時間	10/16~17	男子: 終点小諸(105.0km) 404人到着 女子: 高根東小から海ノ口(32.0km) 446人到着 ●現在と同型の検印カード採用
	昭和50 (1975)	50	1,347人	男子:21時間 女子: 8時間	10/14~15	男子: 終点小諸(105.0km) 455人到着 女子: 高根東小から小海(42.0km) 447人到着 ●創立95周年 ●三校選抜 ●記録映画「今青春を行く」(YBS16ミリ50分カラー)制作 ●NHK同行取材「よーいどん」
	昭和51 (1976)	51	800人 男子のみ	男子:21時間 女子: 8時間	10/13~14	男子: 終点小諸(105.0km) 347人到着 女子: 雨天中止
	昭和52 (1977)	52	1,334人	男子:21時間 女子: 8時間	10/5~6	男子: 終点小諸(105.0km) 436人到着 女子: 高根東小から小海(42.0km) 293人到着 ●四校選抜
	昭和53 (1978)	53	1,248人	男子:21時間 女子: 8時間	10/3~4	男子: 終点小諸(105.0km) 438人到着 女子: 高根東小から小海(42.0km) 499人到着 ●須玉バイパス使用 ●NHK新日本紀行「八ヶ岳青春譜」放映
	昭和54 (1979)	54	1,157人	男子:21時間 女子: 8時間	10/3~4	男子: 終点小諸(105.0km) 378人到着 女子: 高根東小から小海(42.0km) 452人到着 ●安全運転依頼標識作製 ●「フォト」週刊サンケイ記者同行取材
	昭和55 (1980)	55	1,191人	男子:21時間 女子: 8時間	10/1~2	男子: 終点小諸(105.0km) 442人到着 女子: 高根東小から小海(42.0km) 521人到着 ●創立100周年記念行事 男女で好記録続出
	昭和56 (1981)	56	1,173人	男子:21時間 女子: 8時間	10/6~7	男子: 終点小諸(101.0km) 394人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 535人到着 ●佐久往還20周年記念行事 ●反射タスキ使用(男子)
	昭和57 (1982)	57	1,173人	男子:21時間 女子: 8時間	10/6~7	男子: 終点小諸(101.0km) 415人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 543人到着 ●テレビ朝日「モーニングショー」で全国に放映
	昭和58 (1983)	58	1,196人	男子:21時間 女子: 8時間	10/5~6	男子: 終点小諸(101.0km) 414人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 533人到着 ●五校選抜
	昭和59 (1984)	59	1,191人	男子:21時間 女子: 8時間	10/4~5	男子: 終点小諸(101.0km) 342人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 538人到着 ●小諸終点20周年記念 ●女子松原湖~小海間新コース
	昭和60 (1985)	60	1,148人	男子:21時間 女子: 8時間	10/2~3	男子: 終点小諸(101.5km) 391人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 535人到着 ●創立105周年・強行遠足60回記念 ●女子高根東小~長沢間新コース
	昭和61 (1986)	61	1,055人	男子:21時間 女子: 8時間	11/4~5	男子: 終点小諸(101.7km) 281人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 487人到着 ●かいじ国体のため11月実施
	昭和62 (1987)	62	1,044人	男子:21時間30分 女子: 8時間	10/7~8	男子: 終点小諸(102.0km) 295人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 446人到着 ●研数学館の記者同行取材

コース	年度	回数	参加者数	制限時間	実施期日	特記事項
小諸	昭和63 (1988)	63	1,084人	男子:21時間30分 女子: 8時間	10/6~7	男子: 終点小諸(102.0km) 272人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 497人到着。 ●雨天のため1日順延 ●女子出発時刻を1時間繰り下げる
	平成元 (1989)	64	1,140人	男子:21時間30分 女子: 8時間	9/27~28	男子: 終点小諸(102.0km) 292人到着 女子: 高根東小から小海(41.5km) 516人到着 ●TBSテレビ「ギミアブレイク」取材 ●NHK教育「青春スクランブル」取材
	平成 2 (1990)					雨天中止 ●創立110周年
	平成 3 (1991)	65	1,085人	男子:21時間30分 女子: 8時間10分	10/2~3	男子: 終点小諸(103.6km) 257人到着 女子: 須玉小から小海(46.0km) 318人到着 ●若神子~三軒屋間新コース ●女子出発地を須玉小に変更
	平成 4 (1992)	66	1,038人	男子:21時間30分 女子: 8時間40分	10/13~14	男子: 終点小諸(103.6km) 220人到着 女子: 須玉小から小海(46.0km) 281人到着 ●北見北斗高校との交流開始、代表4人参加
	平成 5 (1993)	67	999人	男子:21時間30分 女子: 8時間40分	10/6~7	男子: 終点小諸(103.6km) 237人到着 女子: 須玉小から小海(46.0km) 360人到着
	平成 6 (1994)	68	964人	男子:21時間30分 女子: 8時間40分	10/4~5	男子: 終点小諸(103.6km) 197人到着 女子: 須玉小から小海(46.0km) 343人到着
	平成 7 (1995)	69	928人	男子:21時間30分 女子: 8時間40分	10/3~4	男子: 終点小諸(103.3km) 148人到着 女子: 須玉小から小海(45.8km) 335人到着 ●創立115周年記念 ●北見北斗高校代表4人参加
	平成 8 (1996)	70	916人	男子:21時間30分 女子: 8時間40分	10/1~3	男子: 終点小諸(103.3km) 124人到着 女子: 須玉小から小海(45.8km) 291人到着 ●北見北斗高校強行遠足へ本校代表4人参加
	平成 9 (1997)	71	908人	男子:21時間50分 女子: 9時間	10/1~2	男子: 終点小諸(105km) 164人到着 女子: 須玉小から小海(47.4km) 284人到着 ●津金~三軒屋間一部変更 ●コース上で下水道工事が多く行われた
	平成10 (1998)	72	922人	男子:21時間50分 女子: 9時間	10/6~7	男子: 終点小諸(105km) 156人到着 女子: 須玉小から小海(47.4km) 304人到着 ●北見北斗高校代表4人参加 ●YBSテレビ「永六輔:小海線ロマン紀行」
	平成11 (1999)	73	963人	男子:21時間50分 女子: 9時間	10/5~6	男子: 終点小諸(105.3km) 174人到着 女子: 須玉小から小海(47.4km) 324人到着 ●男子コース一部変更、葦崎~若神子間 ●男子参加率、過去最高98.7%
	平成12 (2000)	74	961人	男子:21時間50分 女子: 9時間	10/3~4	男子: 終点小諸(105.3km) 162人到着 女子: 須玉小から小海(47.4km) 353人到着 ●創立120周年、北見北斗高校代表4人参加 ●PTA保体専門委員会で心肺蘇生法講習会実施
	平成13 (2001)	75	962人	男子:21時間50分 女子: 9時間	10/3~4	男子: 終点小諸(105.3km) 186人到着 女子: 須玉小から小海(47.4km) 331人到着 ●男子コース救護検印所変更(岩村田) ●女子参加率、過去最高97.4%
平成14 (2002)	76	900人	男子:21時間50分 女子: 9時間	10/2~3	男子: 終点小諸(103.4km) 221人到着 女子: 須玉小から小海(45.5km) 306人到着	
野辺山方面 (終点地制)	平成15 (2003)	77	886人	男子:11時間 女子: 7時間	10/2	男子: 終点野辺山(53.7km) 318人到着 女子: 須玉町穂足グラウンドから野辺山(31.0km) 347人到着 ●男子コース学校~野辺山、女子コース須玉~野辺山に変更
	平成16 (2004)	78	886人	男子:11時間 女子: 7時間30分	10/5	雨天途中中止 ●コース一部変更、清里~野辺山間
	平成17 (2005)	79	831人	男子:11時間 女子: 7時間30分	9/25	男子: 終点野辺山(54.2km) 304人到着 女子: 須玉小から野辺山(30.8km) 369人到着 ●北見北斗高校、強行遠足へ本校代表4人参加
	平成18 (2006)	80	798人	男子:11時間 女子: 7時間30分	10/15	男子: 終点野辺山(55.4km) 320人到着 女子: 須玉小から野辺山(30.3km) 392人到着 ●北見北斗高校代表4人参加

(編集委員)

資料翻刻

本校に於ける強行遠足の意義と其の實際(抜粋)

「山梨県立甲府中學校」昭和12年12月20日発行

注：原文を写真製版しているため旧漢字及び旧かなづかいである。

昭和初年、強行遠足はすでに組織的な計画のもとに実施され、綿密な統計がまとめられるようになっており、問い合わせも増えてきた。昭和10年(1935)、東京で世界教育大会が開催されることとなり、隈部以忠校長の発案で、強行遠足の沿革と統計とを英文で印刷、配布しようとしてまとめられたのが、この『本校に於ける強行遠足の意義と其の實際』である。が、英訳、刊行に至らず、職員室の戸棚にしまわれたままになっていた。12年(1937)、大野芳麿校長の手により出版、公表されて以来、日本一の行事として一躍有名になり、全国から教育関係者ばかりでなく、医学・体育学の分野の専門家の視察・研究が増えた。強行遠足草創期の理念を知ることのできる貴重な資料であり、83年を経て今なお続いている強行遠足の原点であると考え、ここに翻刻した。

本校に於ける**強行遠足の意義と其の實際**

第一 **強行遠足の意義**

一、起 源

明治大帝の御徳を追慕し奉り、大正十三年明治節を中心として、全國體育週間の設定を見た時、本校では十一月四日を以て體育日と定め、全校職員生徒一同、一齊に強行遠足を行ふ事になつた。

敢て強行遠足と名づけたのは、自分の體力に應じて歩けるだけ歩くといふ事を強調せんが爲である。由來人情の弱點は安易なものとの妥協である。歩く場合でも少しく疲労を感じると乗物の事を考へる。或はある程度で止めてしまふといふ事になり勝である。之等一切の妥協と怠慢とを排して、精根限り歩くといふ事を重視したのである。今一つは今迄何處の學校でも、遠足の翌日は休日にするといふ事が不文律的習慣になつてゐたが、この慣習を打破して、平常通り午前九時始業で、授業を行つて行くといふ事を建前にした。

かうした所謂眞剣勝負に因つて、剛毅不屈の精神を養ひたいと思つたのである。

次に特に遠足を選んだのは、次の諸點から考察して、最もこの記念すべき運動日の運動として、適切であると考へたからである。

一、歩くといふ事は最も原始的、普遍的、個性的の運動である

歩く事には特別の技術も練習も器具をも要しない。老弱男女誰にでも出来る事である。

現今の各種競技會、試合、又は運動會等の催を見るに、その多くは一部選ばれたる所謂選手の活躍に止まつて、一般大衆の運動ではない。従つて全校一齊的の運動としては、この歩く事以外に適切なものはないと思ふ。

二、「歩く」ことの重要性

交通機關の發達は漸次歩くといふ事を輕視して來る。殊に本校のやうに盆地の中央部にあつて、汽車、電車、自動車、自転車等あらゆる交通機關が通學に利用せられる學校では、ともすれば歩く事が億劫がられ等閑視される。

その結果は脚力の減退となり、延いては健康方面にも憂ふべき現象を來す事になる。

だから歩くといふ事が最も自然な健康法であることを悟らしめ、その重要性を認識せしめたい。

三、自分の體力、脚力の認識

自分の體力や脚力に對して認識を持つといふ事はその人の一生に於て必要な事である。精根の續く限り一日歩いて、どの位の里數を突破し得るか。之は自分一人でも試みられぬ事もないが、さて實行となると種々の障害や、決斷力の缺乏やで困難のものだ。

然し全校一齊の行動となると、一種の責任觀念も働かし、加へて興味もあり、競争心も生じて、本常に精一杯の力量が發揮出来るものだ。さうしてかうした催に因つて、眞に自己の體力脚力に對して強い自信力を持つ事が出来る様になる。

四、傳統を繼いで

古來武田流の軍學に於ては健脚といふものを重視し、甲州勢の超人間的の行軍は當時の戰國時代の武將の一大脅威であつた。

又近來にあつては、我甲相健兒よりなる歩兵第四十九聯隊はすぐれた行軍力を有するのを以て天下無比と聞いてゐる。

かくの如く歩くこと、健脚を誇る事は本縣民の特長であり特質である。この特質を承け繼ぐ吾等は、この尊い傳統を學びこの傳統を生かさねばならぬ。

五、絶好の時季

記念すべき明治節前後は秋天高く澄み、身心頗に引きしまり、かうした遠足を試みる好季節である。

以上五點が歩くことを選んだ眼目である。

つまり最も自然的原始的な歩くといふ事を一晝夜二十四時間續行して、一面體育の向上を圖り、一面精神的訓練を施さうとするのである。

二、第一回の試み

第二回は大正十三年十一月四日を以て行はれた。

當日は全校生徒を自己の志望により三班に分ちて、各方面への遠足を行つた。

第一班 校庭より甲州街道を東へ制限時間内に自己の歩き得る限りを進み、歸途は汽車を利用すること。

第二班 本縣北巨摩郡穴山村新府城址迄往復約八里。

第三班 本縣中巨摩郡宮本村昇仙峽迄往復約六里。

右の中の第一班が今日の吾校強行遠足の濫觴をなすものである。

當時の記録は不完全でその詳細を知る事は出来ぬが、その概略を記すと、當日は午前六時校庭出發中央線に沿つて東へ甲州街道を進み午後六時を以て終了時とし、正味十二時間歩き續ける事にしたのである。この最高記録は本縣北都留郡上野原町迄約十六里であつた。

この日職員は、一部は生徒と共に歩き、一部は自轉車を使用し、共に生徒に附添つて救護の任に當つた。

凡て組織や設備等今日の如く整備したものでなく、よくあれでたいした事故をも生じなかつたものだと、今更ながらその大膽さに驚いてゐる次第である。

然しこの試みは吾人に甚だ尊い教訓と指針とを與へて呉れた。

三、第一回の教訓

- 一、東方面は途中に笹子小佛等の坂路があり、且つ道路上に險悪の場所があつて、全校一千の生徒の運動舞臺としては不適當である。
- 二、新コースとして西方面、即ち信州往還を選ぶ。之は東方面に見るが如き諸障害なく、且つコースに沿うて、中央線が通じてゐて、騎途汽車を利用し得る便宜も東線と異なる所がなく寧ろまさつてゐる。
- 三、体育日の意義を徹底させ、眞に自己の持つ力量を遺憾なく發揮させ、學校が期待する目的を達成するには十二時間では物足らぬ。故に時限を延ばして、一晝夜二十四時間にすること、而してその出發の時間は午前零時とすること。
因にこの午前零時出發に就ては、その後種々研究論議が重ねられて、或は午後十時説などもあつたが、生徒の睡眠時間等の關係もあつて、この零時出發を變更するの理論に到達し得ない。
- 四、今後引き続き舉行すること。
- 五、救護監督上に就ては更に一段の考慮を拂ひ、過失その他の事故を生じない様注意すべきこと。

四、第二回以後

第一回の結果から第二回以後は中央線富市以西の沿道、即ち信州往還を歩く事になつたのは前陳の通りであるが、第四回迄は足弱生徒の爲に、穴山村新府城址、及び御嶽昇仙峽遠足は第一回通りに依然として許してゐた。

然しこの頃になると、強行遠足に對して生徒はよくその眞意義を諒解し、その態度は著しく積極的になつて、かうした足弱の爲に設けられた方面への志望者は眞の病後者のみとなり、苟くも健康體である限りこの全校的運動に参加し得ないのを、一大屈辱かの如く考へる様になつた。因つて第五回からは西線と同方向にある北巨摩郡穴山村穴山驛迄の遠足だけを存し置き、御嶽昇仙峽への遠足を廢止した。

現に昨年度即ち第十三回強行遠足の際にも穴山驛行きは僅に四名に過ぎない。

之等の事實によつても本校生徒がこの遠足に對する意氣込の如何に大であるかが窺はれると思ふ。

かくて連年實施して、經驗を重ねて行く中に準備上、實施上、救護監督上等につき種々と教へられる所があり、その度毎に改善を加へ、漸次今日の體制を具へる様になつたのである。

五、其の日の概況

天候係の豫報及び天氣圖の研究によつて、いよく十一月四日に舉行と決定すると、職員も生徒も三日の式後歸宅就寢する。

電燈灯る頃になると、交通不便の者は、漸次學校控所の特設休憩所を集る。十一時半頃には制服制

午前九時稍々過ぎ、第一着は上諏訪救護所に到着する、間もなく健脚者は陸續とつゞいて休憩時も惜しんで潑刺たる元氣を以て西北へと迎る、而して全校三分の二以上は少くともこの地には來る。

諏訪湖畔の道路の午後は乗物が雜沓する、然しこの埃道を颯爽と歩みつゞける我等健兒の希望には果てしが無い。日は漸次山の端に傾く頃になると、流石に下級生は、下諏訪、岡谷邊で打切る者が多くなる。然し健脚を誇る者は、これ等の驛の名には縁はない。

天龍川に夕日は映えて、再び夜の幕が四方をつゞみはじめても、電燈が驛に明るく燈されても、寒さが身にしみても、健兒は鹽尻へ松本へと進むのだ、前途には難路善知鳥峠が横たはつてゐる、然しここに撓まずひるまざる甲中精神は燦として輝く。毎年この峠を越えて鹽尻（一〇三、七軒）に到る者が五、六十名に及ぶのだ。

桔梗ヶ原の夜は暗く淋しい、この原野を尙、希望を捨てずに松本への十六軒を進む。然し松本で彼等の目的は終るのではない、更に大糸南線に鐵脚を進める者は、眞に剛毅不屈の精神の所有者である、それ等の者の脚は尙餘裕を残してゐるのだ、さうして十二時を目指して進んでゐる。

六、結果をかんがみて

この強行遠足を實施して來て、昨年で十三回になる。各回に於ける成績は別表に示すが如く逐年向上の跡を示してゐる。

最初は漫然歩くといふ事を唯一目的と考へて、その他は副貳的收穫として軽く見てゐたが、この歩く事を續けてゐる中に歩く事自体以外に重大なる精神的陶冶の存することが明瞭になつて來て、この吾人の催は教育的作業として偉大なる使命をもつ事を自覺する事が出來た。

或者は「一日中歩き廻る事は体育でも何でも無い」といつて非難する。或は体育的方面、醫學的方面から見ると論點があるかも知れぬが、然しこの遠足が直接原因となつて、病氣になつたり、身體をこはしたりした者が、過去十三回を通して、殆ど皆無であつたといふ點から考察して、決して非體育的のものではないと言ひ得られると思ふ。

尤も吾々はこの運動實施に當つては、常に「無理をせぬやう」「飽く迄頑張れ」といふ事を注意してゐる。そして最高記録の向上よりも、全校平均軒數の向上を目標としてゐる。

血氣に逸つて、暴虎馮河的の行爲をしてはならぬ。最初の元氣に任せて猪突的の疾走をしてはならぬ。病後や病身では絶対に參加しないこと、途中で故障が起つたら中止すること、等呉々も戒めてゐる。特に實施の前日には各學年各組に亘つて、學級の監督が生徒一人々々にわたり其の身體狀況につき細心の視察を行ひ、如何かと思はれる者に就ては、適當の指示をなし、或は校醫の診察をうける等の細かい注意も拂つてゐる。校長からも講堂訓話其他の機會を利用し、この點十分に注意して、無理を厳禁してゐる。だから生徒は先輩の經驗を聞き、自身の體力に應じたる計畫をたて、その計畫に従つて行動して、無理のない事を期すると共に、頑張りの指針となしてゐる。

この様に注意深く行つて、非體育的ならざる様考慮を拂つてゐるので、この非難からは免れ得ると思ふ。

然し吾々はこの運動の効果に於ては体育的方面よりも寧ろ精神的訓練を重視するものである。

全校擧げてこの一大行事は、全校職員生徒をして全一感情の中に融和せしめ眞に打つて一丸とするものがあるのは勿論、尊い精神上の悟りや體驗から、吾人の目標としてゐる剛健不屈の甲中魂が漸次培はれて行くのを見て、欣快に耐へぬのである。以下其の効果の概略について述べて見る。

一、一日に世界を一周回半

第十三回の成績から見ると参加人員九百二十六名、一人平均一七、五里、この相乗積は、一萬六千二百五里で實に一日にして地球を一周回半して、尙餘裕あるのである。この外之がための準備運動やその他有意的に行はれる運動量を加算したならば、眞に驚くべき數値を示す事であらう。

全校一齊的運動日の催として最も適當のものである事は、この事實が雄辯に物語つてゐる。

二、歩く事の興味

十一月四日のこの體育日は學校行事中の最大呼物となつて新涼の動く九月頃になると、早くも之に對する心構へが始められる。

自轉車通學者が徒歩に代へて、足の鍛錬をする。毎放課後一、二里の散策を試みて、脚力を鍛へる。或は日曜を選んで草鞋脚絆に身をかため登山と足馴らしの一舉兩得の快味を貪る者等、生徒の興味は勃然としてこの體育日に向つて行く。

其他廢物に關する研究、歩行と食事との關係、杖に關する注意等歩く事に對する實驗的理論的研究が進められるのである。

かくてこの強行遠足實施以來、歩くといふ事に就て非常なる注意と興味とが喚起されて來た。この興味が永續して、彼等の一生涯を通じての運動法となるのも決して空想ではないと思ふ。

三、精神鍛錬

十里近くも歩けば非常な疲勞と倦怠とを感じるのは誰しもの經驗である。これ以上五里十里と踏み出すには非常なる克己と勇氣とを要する。最早脚で歩くのではなくて氣力で歩くのである。

焔々たる篝火に送られ、歡聲をあげて勇躍校門を出發した一千の健兒も十數里を歩き續けては最前線に行く強剛のものは別として、流石に疲勞を覺えない譯にはいかぬ。

夕陽將に没せんとして晩秋の夕風身にしみ、一種の哀愁身に迫る時、坦々砥の如き信濃路を辿る。彼等の脚は痛み、彼等の疲勞はその極度に達する。然し彼等の意氣は少しも衰へぬ。必死の努力を續けて、飽く迄もゴール目掛けて突き進む。この悲壯の決意、不屈不撓の精神、それは將來彼等に何物を齎すであらうか。

由來本校生徒は、盆地の中央の恵まれた環境に育かれた爲か、粘りと頑張りとに缺けてゐたかの感が深かつた。

例へば運動競技や、野球蹴球等の試合などに於て、味方に少しく敗色が見えて來ると、試合を諦めてしまふ傾があつたが、近來面目一新、刀折れ矢つきる逆奮闘を續ける粘り氣が出て來た。これこそ強行遠足の行の哲學から得た尊い悟りではあるまいか。

又目下本縣山梨高等工業第三學年在學中の某學生が嘗て本校五學年生當時この強行遠足に於て、頑

張りくして、たうとう松本(三十里)迄いつた。その述懐に曰く、「人生は頑張りである」と。

又本校卒業生で現に第一高等學校在學中の某學生が、昨夏歸省した時本校職員に語つた話に、野外教練の一日、同一學年のもの皆疲勞困憊して落伍したが、自分は嘗ての強行遠足の事を回想して、猛然たる勇氣を振起し、たうとう最後迄頑張り通したといつてゐる。

百の金言も、千の名訓も机上の空論では價値に乏しい。眞の體驗から得た教誡は尊く強い。

冲天の意氣は燃えても、痛む脚、疲れた身體は見る目に痛々しい。荷車挽きや、自動車の運轉手などが痛く同情して、同乗を勧める。一度二度は斷る。然し三度四度となると意志の弱いものは、透ひうかうかとの誘惑に陥つてしまふ。又極僅少ではあるが街道を疾驅する乗合自動車を見ては、矢も楯もたまたまなくなつて、こつそり一、二里之を利用する。或はある區間人知れず汽車を利用して、自己欺瞞を企てる。かうした卑劣手段を弄するものが、この行事を始めてからごく僅少ではあるがあつた事は事實である。

學校では神聖なるこの運動行事にかゝる卑劣行爲の行はれる事は最大なる遺憾であるとなし、極力指導を加へ深い反省と自覺とを促した結果、最近に至つてはかゝる不正行爲は全く跡をたち、彼等あらゆる誘惑の陥穽を排除して、強い信念にたち正々堂々の歩みを續けるやうになつた。

瀆職事件、利益問題、カンニング等かうした呪ふべき不正行爲が敢行される世相をかへりみる時、確乎たる信念に燃え、正道に立脚して、獨立獨歩する人士の養成は吾人に課せられたる任務ではないだらうか。

困苦に堪へ、窮乏に忍び、不屈不撓、進みて止まざる甲中魂、顧みてやましき所なくんば千萬人と雖も我往かんの甲中氣魄はかうして漸次に實を結んで行くのである。

四、感情の融和

毎年四、五年生の若干名は、一、二年生の足弱生徒をいたはり介抱しながら、メタル線迄つれて行くのを見る。一、二年生にメタルを獲得する優秀成績者が多いのは、之等かくれたる蔭の力が預つてゐるのである。弱者に同情する武士道的精神、自己犠牲の尊い行爲であると共に、長幼相接觸の好機會である。

疲勞困憊した學友をいたはる濃やかな友情の發露は隨所に發見し得る。

疲勞しきつて寸歩も出ない友を相當に疲れてゐる身ながら抱く様にして伴ふもの、杖に縋らせて引張つて行くもの、一個の握飯を分けあつて飢を凌ぐもの、懷中藥を興へて友の氣力恢復をはかるもの、一杯の水筒の水を飲み交して渴を醫するもの、脚部の手當を施してやるもの、歸途の汽車中で腦貧血患者に甲斐々々しい介抱をするもの等、擧げれば擧すべき友情、涙ぐましい校友愛がどんなに展開される事だらう。

塩尻や松本迄にのびる健脚強剛のものも、亦互に助け合ひ、勵ましあつて、各自他の優勝を冀ふからこそあの輝やかなしい記録が作れるのである。

かうして艱難を共にして交はされた友情は彼等を強く堅く結びつけるのである。昨年始めて此遠足

に参加したある一年生の父兄が、一年のメタル線下諏訪迄(十八里)を歩いて来た子供に感想を叩いた。

「面白かったか」

「少しも面白い事はない。途中の景色を見る所か歩くで精一杯だ。その歩く事が苦しくて苦しくて、どこをどう歩いたか一寸も覚えなどはない。あゝ苦しいく」と、

昏々と眠りこけてしまふ。

暫くして上級の二、三の友がやつて来た。

強行遠足の話が出る。途上の愉快な話、最高記録者は誰か、誰が何時に上諏訪についたとか、臺ヶ原の麥湯、上諏訪の蜆汁、それから華やかな勇者禮讃の言葉等等。

疲労に苦りきつてゐた一年生、忽ち元氣恢復、それからそれへと話ははずみ、今日の艱苦は誇らしい勝者の歡喜となり、強行遠足が楽しい愉快なものになつてしまつたといふ話がある。

苦しかった事もやがての思ひ出となれば、苦しさが大きければ大きい程、強い印象と興味とが伴ふものである。そしてかうした共々に味はつた思ひ出を語り合ふ時に眞に親愛の情が湧き出るのである。

又一生徒の後日談に、

「桔梗ヶ原(壘尻と松本との間の淋しい街道、嘗ては時々追剥などが出没して、夜の通行人を脅した等の話が傳つてゐる處)で先生に戴いたキャラメル程おいしかったものはなかつた」と、之は途中救護の職員がここで彼に會つて與へたキャラメルである。

夜の九時十時頃、二、三の級友と、トボく迎る淋しい田舎道、語る言葉もなく淡い懐中電燈をたよりに只管前進をのみあせつてゐる時、學校名人の提灯をともした先生に會ふ、その事だけでも彼等はとびつく程に嬉しい。況して情のこもつたキャラメル、彼等をして歡喜せしめ、日本一のキャラメルと感ぜしめたのも尤もな事であると思ふ。

かうした何でも無い事でも、かうした機會には強い感激と感謝となり、不知不識の間に師弟の情誼が結びついて行くのである。

卒業生の會合などでも、先づ第一に話し出されるのは、この強行遠足の楽しい思ひ出である。

教師生徒卒業生、凡てを同一感情に融和せしめて、渾然として學校愛の一色の中に包含せしめるこの強行遠足の收穫も亦大といはねばならぬ。

七、今 後 へ

強行遠足が實施されるとすぐ翌日職員會議を開いて、實施結果からの檢討反省を行ひ、少しでも改善すべき點は改善して、この行事の遂行に精進努力して来た。

今や十三回の經驗を重ねて、其の設備、方法、救護、監督等形式的方面に於ては完全に近い體制を整へて来た事を確信するものである。

學校のすべての教育的作業は、人格陶冶といふ教育究極目的達成のための手段であり、方法であり、道程である。吾人のこの企ても亦人格陶冶の一部面である事は勿論である。

江口俊博校長の紹介

加藤 忍



大正12年6月27日、第10代甲府中学校長として着任されたのが、大島正健校長に次ぐ名校長といわれた江口俊博校長である。江口校長は、一燈園の西田天香師の熱心な崇拜者であり、大島正健校長同様の禁酒・禁煙主義の人であった。「勤労教育」を信条として自ら雑巾を握っては校内を隅から隅までピカピカに磨き上げた。夏休みには生徒数人を連れて白根連山に登った。ところが山小屋はいっぱい。そこで生徒だけを無理やり山小屋に押し込み、自分は松の枝を切り布団にして、外で一夜を明かしたという。このような勤労奉仕重視の思想やその誠実な人柄で校内外の信望を集め、たちまち校風は一新されたという。

また、全国に名高い「強行遠足」や校是となっている「贊天地之化育」・「苟日新、日日新、又日新」を創始された。まさに、甲府一高魂・甲府一高精神の柱を築かれた名校長であった。ここに、江口校長の言葉と、江口校長と接しられた方々の手記を掲載しその精神を知るよすがとしたい。

■ 略 歴

1873年(明治 6)	熊本県生まれ。父は帝国陸軍軍人
1901年(明治34)	東京帝国大学卒
1904年(明治37)	新潟県立小千谷中学校長
1908年(明治41)	広島県立忠海中学校長
1916年(大正 5)	長野県立長野中学校長
1920年(大正 9)	長野市市議会議員当選(校長職と兼務)
1923年(大正12)	山梨県立甲府中学校長
1932年(昭和 7)	退職され、東京市渋谷区伊達町十二の自宅に帰る
1945年(昭和20)	空襲により家屋焼失 小田原の宮崎家(愛娘美代子さんの婚家)に退く
1946年(昭和21)	夫人照子さん、愛娘美代子さんに看取られ逝去

(編集委員)

諸君勉強をして呉れ

江口俊博

諸君、何でもいいから勉強して呉れ、今一層勉強し玉へ。自分から勉強しやうと言ふ気のない生徒は、何と言ってもダメな生徒である。不屈な生徒と迄は言い得ないかも知れないが、断じて頼もしい生徒とは言はれない。出来ると出来ないとは別の事として、ドウゾ勉強する気になって呉れ。新校の玄関の正面に掲げた文字、アレは“天地の化育を賛く”と読む。中庸の中にある句である。吾々が此の校舎で学ぶ心持が、天地の化育を賛けやうと言ふ心でありたいと思って、アノ句を掲げたのである。千年万年世は幾たび変遷しても、学問する人の心は真にかくあるべきだと思ふ。天地の心は育てる心、吾々は天地の此の心に副うやうに心がけやうと言ふのである。伸ばしてやらう、栄えさせやうと努力しやうと言ふのである。伸ばし栄えさせるには、如何なる手段をとるべきかを考究しやうと言ふのである。此の心で人に接し、此の心で物を扱ふ時、人には親切になり物を大切にすやうになる。諸君、人間の持つてるものの中で、一番大切なものは命でないか。其の大切な命を学問をする程の人が、粗末にして済むか。怠けて暮し時間を粗末にする人は、明瞭に自分の命を粗末にする人である。人間罪惡の根源を怠けたと言ふのは尤もの事である。人間は悉く出世するとは限らぬ、悉くが金持になれるものではない、悉くが学者にはなれない。けれども一人残らず働く人になる事は出来る。一人でも怠けものになることは残念な事である。物を大切にし人に親切にし、勉め励みて其の天分を發揮しやうと骨を折る心が、天地の化育を賛くる心で、此の心のある人が人間の貴さを持つ人である。所謂成功者計りが偉い人では無い。自分が一人居なければ天地の進化発展が停頓すると言ふ自覺の持てる人は、悉く偉い人である。人は誰しも此の意味の偉い人にならうと心掛くべきである。諸君、勉強し玉へ、勉強しなければ偉い人になれる見込はない。

『校友会誌 第59号』(昭和4年3月)所収

江口先生と強行遠足

嶋田 武

秋がなつ酣ると共に、どこの学校でも運動会が催され、父兄も参加して秋の陽を浴びながら、心ゆくばかり手足を伸ばして跳ね歩くのは、健康的ではた目にも微笑ましい光景である。

秋の催物として運動会と並んで強歩大会とか剛健遠足とか、または強行遠足などと銘打って、歩く行事がしきりに行われているのは、山梨県の一つの特色だろう。よその県の学校では、脚を鍛えるべく、これほど力瘤を入れようとはしない。本県では高等学校はむろん、中学校でも強歩大会を行っている学校が少くない。戦前には、今の山梨大学の前身の山梨高等工業学校では、沿線の中央線に沿って東京方面に向って歩き、文部省の玄関をゴールとして歩み続けたものだから、さすが帝都人士もどぎもを抜かれたものであったが、その山梨高等工業学校の健脚者は、甲府中学で5ヶ年間鍛練した猛者であることに不思議はない。

甲府中学が大正13年の11月3月の明治節に、体育行事を行うべしとの文部省の命令に従い、「強行遠足」を計画したのは、時の校長江口俊博先生であった。一昼夜を歩き続けたら、人間はどのくらい歩けるものだろうか。歩き続けることによって不撓不屈の根性を植えつきたい—これが江口先生のねらいとするところであった。

24時間歩き続けるということは、大変な忍耐力を必要とする。孤独との戦でもあり、睡魔との戦であり、疲労、空腹、苦痛との戦でもある。それ等のすべてと戦いながら、それに堪え抜く精神—ガンバリズムの涵養になると信ずればこそ、江口先生は強行遠足を立案されたのであった。

けれども世間を挙げて賛成したわけでは決してない。一部からは反対の声もあった。秋も深い信濃路を夜をこめて歩くなど言うことは、夜露が体にさわらぬ筈がない。病人が続出したらどうするつもりか、無暴なことだと言うのである。併し江口校長は周到な準備の下に実施なされた。その結果は、すべての心配は杞憂に終って、大成功であった。生徒た

ちは精根を尽して歩み、健脚の者も脚弱の者も、快い満足にひたっていた。江口校長が引退なされた後の歴代校長は、先生の御意志を引継がれて今日に至っている。戦時中一時中断されたが今年(昭和42・1967年)は42回目になる。

甲府中学が選んだ強行遠足の舞台は、国鉄中央線に沿った国道を、長野県に歩むコースであった。1年生で上諏訪まで到達した者は、健脚者として草鞋を型どったメダルを与え、上級生は塩尻をメダル線として表彰した。メダル線に達してもなお、余力のある者は102キロの塩尻からさらに15キロ先の松本を目ざした。強行遠足の合言葉は117キロの「松本へ、松本へ!」であったが、更に松本を通過して152キロの大明に到着する者があって驚かされたが、今迄の最高記録は大明を越えて167キロの築場に行き着く者を生んだ。24時間内に167キロを歩くことが出来たのである。おそらく高校生としての世界最高記録ではなかろうか。驚くべき健脚者が生まれたものである。

終戦後甲府一高でいち早く復活しようとしたところが、進駐軍の教育担当者は、軍国主義に通じる疑ありとて、許可を渋っていたが、学校当局の熱心な要求と実施内容の説明で、許可が下り21年(1946)の秋には食糧不足に苦しみながら、実施することができた。

昨今の自動車の激増は、信州往還を千人もの生徒が、歩行することは極めて危険であることから、止むを得ず佐久往還にコースを変更し、小海線に沿い小諸を終点とせざるを得なくなってしまったので、「松本へ!」の魅力が消え失せてしまったことと、24時間を歩けるだけ歩くことが不可能になってしまったけれども、時勢の移り変りでいたしかたのないことである。

一昨年の秋(40年10月16日)第40回の強行遠足が、NHKの「スタジオ102」の番組に取りあげられて、全国へ放送されて話題を呼んだ。世は一万歩運動が提唱されて歩くことを奨励しているが故に、今や強歩は時代の脚光を浴びて、もてはやされている。甲府一高の強行遠足40年の歴史を省みるとき、無暴なことと批判され、野蛮な行事とのしられた

かと思うと、戦時中には戦場につながる健脚だともてはやされたこともあった。

世間の批判がどうであれ、信念に基き黙々と40年間歩み続けてきた歴史こそ貴い。強行遠足の創始者の江口校長は、生徒に歩くくせをつけようと専ら鼓舞激励されたが、先生御自身も必ず生徒に悟して歩み、50歳を越えておられた老体で、毎年上諏訪までは歩行されて実践垂範された。秋深い甲府盆地に展開されている歩け歩け運動を、地下の江口先生はあの温顔に笑をたたえながら、じっと眺めていられるにちがいない。

(大正14年卒 元甲府中学校教諭 昭和42年10月16日・1967 甲府放送局から放送)

たわ 撓まずひるまずたぢろがず

—江口先生と私—

小尾鳩三

1. 山岳部創設のこと

大正14年、甲府中学の5年生の時であった。そのころは全国的に見ても、中等学校には山岳部というものが、極めて少なかった。同級の有泉亨さん達と謀って甲中に山岳部をつくらうということになった。実はこれには時の校長江口先生の示唆に負うところが多かったのである。その頃、先生は愛宕山下の精乳舎に宿をとっておられて、私どもはそこへ夜お訪ねしては、先生のお話を拝聴した。山岳部を正式に学校から許していただき、諸準備をした時も、先生のご協力を仰いだことも忘れられない。

その年の8月11日から、駒仙丈、白根縦走という当時としては、無謀に近い計画をはじめて決行することにした。常盤町の野々垣邦富氏(日本山岳会員 甲斐山岳会幹事)をリーダーに、有泉亨、武井真次郎、抽木善次郎、宮川勝馬、矢崎太助、笹本武夫、小池寿郷の皆さんと私とでいくことになった。ところが監督として行って下さる先生がない。そうなるにつぶれてしまう。ところが江口先生はご自分が当然行くことにきまっているかのように打ち合わせ会において、発言された。これには私どもの方が驚き

喜んだ。まさか壮年を過ぎた校長、全国中学校長会長をなさっていらっしゃる超多忙の校長江口先生がご同行して下さるとは思ってもいなかったのであった。よくご決意なさったものである。これを今の教育に携わる校長さん方と比較してみられるとよい。

その山行は、5泊6日、深山幽谷、他にはわずか4名のパーティーに逢っただけ。その間、終日24時、先生のご人格に接して、その平凡なる偉大さをつくづくと教えられ、このことは後の私の生涯を大きく左右していたと思う。

私どもは若いから、みちみち常に議論が絶えない。駒の不動岩の険路では運命論に花が咲いた。その時、ニコニコ聞いていらしゃった先生が、「運命なんて必然的のものはないんだよ、しかしね、きょうのリングがあすのリングを決定し、あすのリングがあさつての運命を決定するということがあるんだよ。」といわれたことは今もなお心に銘じている。

それから仙丈の北馬鹿尾根で先生の笠が十数メートル浮遊して先生のところにおちて来たり、先生が数メートルほど転落されて皆が心配したり、両俣の小屋で友が病気になって先生が一晩眠らずに看病なさったり、農鳥小屋がせまいので先生は寒風にさらされながら一夜を小屋の外で過ごされたり、平凡なことだが、やはりえらいなあと思うことが多かった。

白根縦走を終って西山温泉に下山した夜、「数千巻の書物を読んだよりも、この数日間の体験の方が、感激がずっと深く、生涯に有意義であった。」と先生はしみじみ語られたことが忘れられない。

その後も先生は、山岳部の月例登山には、都合のつく限り参加下さった。恐らく山の感激が忘れられなかったものと推察申し上げている。その後、甲中の講堂にアイガー東山稜初登攀の榎有恒氏を招かれたのもこういう理由によるものと信じている。

晩秋の一日、部員と茅ヶ岳にお登りになった。その日、私が先生のお弁当をお預かりして、途中自分のも加えてどうしたわけだか、全部紛失してしまった。さてひる飯となって気がついた。私は顔色なし、恐縮なんていうものではない、スッカリ元気を失っていると先生は友達のさわぎで気づかれて、

「いいよ、いいよ、いいんだよ、だが君が困るだろ

う。さあみんなわけ合うんだよ。」といわれて、その後は一言もたべ物のことをおっしゃらず、朗らかにしておられた。参加者一同「えらい先生だナア」と感心してしまった。書けばこれだけのことだが、その日のふんいきから忘れられない出来ごとである。

2. 強行遠足発足のこと

その夏も終つてのある夜、先生のお宿をお訪ねした時「人間は一体一日にどのくらい歩けるだろうか。」という話題になり、それから「あるけるだけあるいて見たい。」という話になった。その数日後の夜、有泉亭さんが寄宿舍から許可を得て私の宿の橘町一番他の当時の小宮山圭助さんの宅に来られた。そこには当時山岳部長の矢島種次先生もご厄介になっておられたのである。

私どもはそこで秋の遠足にぜひあるけるだけあるくという案を一つ加えていただくように矢嶋先生にお願いし、それから江口校長にも校長室でお願いした。実はそれは実に虫のいいわがままのお願いで、今考えると身のちぢむ赤面汗顔のものであった。

恐らく職員会議では多くの異論も出たろうと思う。実はそのころはいい気なもので先生方におたずねもしなかったが、だんだん年をとって来ると恥かしくなってくる。先輩の先生方、もう時効期間は過ぎていよう。思い出してお赦しをお願いしたい。

その虫のいい案なるものは、希望者は足にまかせて東京方面に午前八時から夕方まであるけるだけあるく、それで道が不案内なので道しるべをするという意味で我々九名には午前四時に先発をゆるすというものである。よく学校で許可したものだと思う。

昇仙峡方面など遠足もあったが、私どもは笹子峠で道を迷ったりして、夕やみ迫るころに上野原駅で帰って来たが、後続の人達も同駅までは多勢来た。

それにしても、整然たる立案も組織もなくあんな遠足をよくやらせたものだ。今ならば、ソレ県がどうのこうのと、心配することだろう。こう踏み切った江口先生ほやはり大きかった。これが第一回の強行遠足である。

第2回からは信州方面に向かったが、成績は毎年先生から関西の私のところにとどけて下さった。

甲府中学に奉職してからも私は先生が生徒と一緒にあるかれるのを拝見しておどろいた。甲府駅で生徒がピッコをひいているのに、ご自分は足かろがろと、いたわっておられたのが目に浮かぶ。

強行速足は先生の一つの信念の現れである。

3. 江口先生のご信念

前の白州町長の古屋五郎さんの著書「南十字星の下に」をいただいて読んだとき、まっさきに浮んだのは、江口先生のお顔だった。古屋さんの、あの不義をにくみ正義をふまえ、弱者に同情して驕慢不遜の輩に対して一步も退かなかつたいわゆる不撓不屈の魂こそ、江口先生に培われた精神であると思ったのである。早速そのことを古屋さんに話した。もし江口先生が、要領のよい教員であられたなら、退職されるのが、もう1、2年はおくれたのではないかと、その頃のかげ出しの自分にも思われた、……妙ないみの官僚主義がありありと察知されたからである。

先生に私が学んだことは、古い徳目的にいうと教育愛、率直、淡泊、信念、誠意、信頼というようなことであった。また他人の気持にまどわされたり、要領のいいとか、空虚な宣伝とか、実力の伴わないみえとか大きらいだともおっしゃった。

今の高校で、大学入試に専心し、かつ進学指導や組担任がというような大学合格の数を誇り、点数の上下を校長自身が堂々と公の席上で宣伝することなどを、江口先生がごらんになったら、どうおっしゃるだろうか。今の生徒諸君が、右や左に乗ぜられやすいのも、広く社会を見る目がないからだろうと思う。私は角材、ヘルメットの大学生の気持も、わかるように感ずる。教育には「無用の用」が必要なのだ。

江口先生は信念の人であった。甲府中学の校歌の「撓まずひるまずたちろがず」ということばを思い、淡泊という文字をみると、「淡泊是高風」の書が眼に浮かぶ、そうして先生の温なお顔を思い出すのである。

私は江口先生に生徒の頃から我儘勝手を申し上げていたことを恥かしく思い、同時にこの頃の教育界の多事を思うて先生を偲ぶこと切なるものがある。

(大正14年卒 元甲府中学校教諭)

『江口俊博先生追悼集』(昭和44年)所収

平成18年度(80回)
強行遠足実施要覧

H.18.10.15



山梨県立甲府第一高等学校

学 校 055-253-3525
野辺山本部 0267-98-2099

第80回強行遠足実施大綱

1. 目的

歩くことを通して自然に親しみ、大きく伸びやかな心を養うとともに、自己の体力の限界に挑むことによって、日常では得られぬ貴重な体験を得ることを目的とする。そのため、各自が綿密な歩行計画のもと、健康と身の安全の確保を図り、各人の体力に応じて自己のペースを保って歩行する。

2. 期日

平成18年10月15日(日)とする。15日(日)が実施不可能な場合は中止する。

3. 参加

(1) 全員参加を原則とするが、健康診断の結果等で医師から参加を止められた場合は参加できない。

参加者は、各自必要に応じて医師の診断を受けておくこと。なお、学校においても希望者並びに要注意者に対して健康診断を行なう。

(2) 不参加者は、強行遠足の補助員になるので、係の指示を受ける。

4. 実施方法

(1) 出発地点・コース・最終地点及び総距離

①男子…学校から葦崎、須玉、高根、大泉、清里を経て野辺山までの55.4km

②女子…須玉から男子と同じコースをたどり野辺山までの30.3km

(2) 出発時刻及び制限時間

①男子…15日(日)5時00分に出発して16時00分に終わる。

制限時間11時間00分

②女子…15日(日)7時30分に出発して15時00分に終わる。

制限時間7時間30分

(3) 出発式

10月14日(土) 1校時 体育館にて次の行事を行う。

①校長あいさつ ②激励のことば ③生徒代表宣誓 ④係からの諸注意

(4) 集合

①男子は10月15日(日)4時15分までに登校し、4時30分にグラウンドの所定の位置に集合。

係員の人員点呼、服装の点検を受ける。

②女子は10月15日(日)5時30分までに緑が丘体育館の駐車場に集合し指定のバスに乗車し、係員の点呼を受ける。6時00分須玉町須玉小学校グラウンドに向け出発する。

(5) 出発

①男子は15日、5時00分号砲を合図に、所定の順序で出発する。

②女子は15日、7時30分須玉小学校グラウンドにて号砲を合図に、所定の順序で出発する。

(6) 救護検印所

別表のとおり9箇所の救護検印所が設けられており検印・集票・救護を行なう。

要救護者は速やかに連絡して処置を受けること。また、休憩、食事、給水をとることができる。

(7) 通過地の証明

検印カードの検印により通過地は証明される。

(8) 前進停止時刻

各検印所には前進停止時刻が設けられている。これは、この時刻以後に当所を前進しても、次の検印所の到着制限時刻までに到着することは不可能であると想定した時刻である。したがって、この時刻以後の到着者は前進できない。

(9) 到着制限時刻

各検印所に到着制限時刻が設けられている。これは、後尾の者でも特別の事情がない限り、楽に到着し得ることを想定した時刻である。したがって、この時刻までに到着できない者は、一つ手前の検印所が最終到達地点となる。

(10) 巡視

巡視係を設けコースを常に巡視しているので、異常が起きた場合には速やかに連絡し処置を受けること。また、交通整理、道路標示には必ず従うこと。

5. 帰甲方法

最終到達地点からの帰甲は、貸し切りバスを利用する。

6. 医療救護対策

- (1) 事前の健康診断・安全対策(蘇生法講習会等)を行う。
- (2) 検印所に可能なかぎり医師・保健師・看護師を配置する。
- (3) コース沿線に、医療機関を確保する。

7. 注意事項

次の事項を十分確認し行動すること。

- (1) 所定のコースを必ず通過すること。
- (2) 服装は体育着を着用すること。違反者の参加は認めない。
- (3) 学校での人員点呼時刻(女子はバス出発時刻)に遅れた者の参加は認めない。
- (4) 検印所においては、氏名票を提出し、検印カードには検印を受ける。
- (5) いずれの地点においても、前進を中止した者、又は、前進を停止させられた者は、検印カードをその検印所に提出する。(途中中止者は、最後に検印を受けた所が最終到達地点である。)
- (6) 乗り物等で前進することを厳禁する。
- (7) 検印カードを紛失した場合には、直ちに係員に届けること。
- (8) 各自の体力に応じた歩行計画をたて、自己のペースを保って歩行すること。
- (9) 安全歩行のために、必ず右側通行を遵守すること。(指定された場所を除く)

8. 終了宣言

10月16日(月)9時30分までに登校し、2校時にHRで出欠・最終到着地点の確認その他の調査を受ける。
10時00分に校長より「終了宣言」があり第80回強行遠足が終了する。3校時より通常授業となる。

第80回強行遠足実施大綱

1. 目的

歩くことを通して自然に親しみ、大きく伸びやかな心を養うとともに、自己の体力の限界に挑むことによって、日常では得られぬ貴重な体験を得ることを目的とする。そのため、各自が綿密な歩行計画のもと、健康と身の安全の確保を図り、各人の体力に応じて自己のペースを保って歩行する。

2. 期日

平成18年10月15日(日)とする。15日(日)が実施不可能な場合は中止する。

3. 参加

(1) 全員参加を原則とするが、健康診断の結果等で医師から参加を止められた場合は参加できない。

参加者は、各自必要に応じて医師の診断を受けておくこと。なお、学校においても希望者並びに要注意者に対して健康診断を行なう。

(2) 不参加者は、強行遠足の補助員になるので、係の指示を受ける。

4. 実施方法

(1) 出発地点・コース・最終地点及び総距離

①男子…学校から葦崎、須玉、高根、大泉、清里を経て野辺山までの55.4km

②女子…須玉から男子と同じコースをたどり野辺山までの30.3km

(2) 出発時刻及び制限時間

①男子…15日(日)5時00分に出発して16時00分に終わる。

制限時間11時間00分

②女子…15日(日)7時30分に出発して15時00分に終わる。

制限時間7時間30分

(3) 出発式

10月14日(土) 1校時 体育館にて次の行事を行う。

①校長あいさつ ②激励のことば ③生徒代表宣誓 ④係からの諸注意

(4) 集合

①男子は10月15日(日)4時15分までに登校し、4時30分にグラウンドの所定の位置に集合。

係員の人員点呼、服装の点検を受ける。

②女子は10月15日(日)5時30分までに緑が丘体育館の駐車場に集合し指定のバスに乗車し、係員の点呼を受ける。6時00分須玉町須玉小学校グラウンドに向け出発する。

(5) 出発

①男子は15日、5時00分号砲を合図に、所定の順序で出発する。

②女子は15日、7時30分須玉小学校グラウンドにて号砲を合図に、所定の順序で出発する。

(6) 救護検印所

別表のとおり9箇所の救護検印所が設けられており検印・集票・救護を行なう。

要救護者は速やかに連絡して処置を受けること。また、休憩、食事、給水をとることができる。

(7) 通過地の証明

検印カードの検印により通過地は証明される。

(8) 前進停止時刻

各検印所には前進停止時刻が設けられている。これは、この時刻以後に当所を前進しても、次の検印所の到着制限時刻までに到着することは不可能であると想定した時刻である。したがって、この時刻以後の到着者は前進できない。

(9) 到着制限時刻

各検印所に到着制限時刻が設けられている。これは、後尾の者でも特別の事情がない限り、楽に到着し得ることを想定した時刻である。したがって、この時刻までに到着できない者は、一つ手前の検印所が最終到達地点となる。

(10) 巡視

巡視係を設けコースを常に巡視しているので、異常が起きた場合には速やかに連絡し処置を受けること。また、交通整理、道路標示には必ず従うこと。

5. 帰甲方法

最終到達地点からの帰甲は、貸し切りバスを利用する。

6. 医療救護対策

- (1) 事前の健康診断・安全対策(蘇生法講習会等)を行う。
- (2) 検印所に可能なかぎり医師・保健師・看護師を配置する。
- (3) コース沿線に、医療機関を確保する。

7. 注意事項

次の事項を十分確認し行動すること。

- (1) 所定のコースを必ず通過すること。
- (2) 服装は体育着を着用すること。違反者の参加は認めない。
- (3) 学校での人員点呼時刻(女子はバス出発時刻)に遅れた者の参加は認めない。
- (4) 検印所においては、氏名票を提出し、検印カードには検印を受ける。
- (5) いずれの地点においても、前進を中止した者、又は、前進を停止させられた者は、検印カードをその検印所に提出する。(途中中止者は、最後に検印を受けた所が最終到達地点である。)
- (6) 乗り物等で前進することを厳禁する。
- (7) 検印カードを紛失した場合には、直ちに係員に届けること。
- (8) 各自の体力に応じた歩行計画をたて、自己のペースを保って歩行すること。
- (9) 安全歩行のために、必ず右側通行を遵守すること。(指定された場所を除く)

8. 終了宣言

10月16日(月)9時30分までに登校し、2校時にHRで出欠・最終到着地点の確認その他の調査を受ける。
10時00分に校長より「終了宣言」があり第80回強行遠足が終了する。3校時より通常授業となる。

集合及び出発に関する事項

【男子の部】

1. 集 合

10月15日(日)4時15分までに登校し、4時30分に校庭の所定の場所に集合する。

2. 集合場所

校庭指揮台前に、南向きに西から、3年、2年、1年の順に各クラス一列縦隊で出席番号順に整列。

整列したところで係員の人員点呼、服装・携行品の点検を受ける。

3. 出 発

出発は次の要領による。

(1) 出発時刻：3年＝5時00分　2年＝5時05分　1年＝5時10分

(2) 出 発：校長の出発の号砲とともに、各クラスの係員から一人一人出席番号順に検印カードを受け取り、逐次出発する。

【女子の部】

1. 集 合

10月15日(日)5時30分までに緑が丘体育館の駐車場に集合。

別紙のバス乗車要領に則り、5時45分までに指定のバスに乗車し、係員の点呼を受ける。

2. 発 車

6時00分に発車し須玉小学校グラウンドに向かう。所要時間は約40分。

3. 集合場所

須玉小学校グラウンドに北向きに、東より、3年、2年、1年の順に各クラス1列縦隊、出席番号順に整列する。

4. 出 発

出発は次の要領による。

(1) 出発時刻：3年＝7時30分　2年＝7時35分　1年＝7時40分

(2) 出 発：教頭の出発の号砲とともに、各クラスの係員から一人一人出席番号順に検印カードを受け取り、逐次出発する。

5. 注 意

(1) 早朝なので遅刻しないように、特に家庭の協力を得ておく。

(2) 5時45分の点呼までに間に合わなかった者の参加は認めない。

* スタート地点に直接来ても参加させない。

* 葦崎以北在住者で事前申し出をした者は、6時40分までに須玉小学校グラウンドに集合する。

勤 務 概 要

(注：Pは保護者の略)

【救護検印所の任務】

1. 学校集合時刻、配車、出発時刻、現地集合時刻を事前に確認しておく。
2. 主任は、P協力者の役割分担、配置箇所、ローテーション等を事前に決めておく。
3. 現地到着後、関係箇所にあいさつ、打合せを行ない準備にかかる。
4. 主任は、P区間指導係と担当区間を一巡し、道路の状況を把握する。拠点指導箇所、安全指導重点区間、指導方法等を確認し、安全歩行のための道路標示を適切に行なう。
5. 救護検印所を設営する。(生徒の流れを考慮して設営する。)
 - (1) 救護検印所名標を明確に掲げ、所在が明確になるように工夫する。
 - (2) 検印、氏名票回収、チェック等の場所。
 - (3) 救護、給水、休憩場所。
6. 生徒通過の際の任務
 - (1) 検印カードへ検印。
 - (2) 氏名票回収。氏名一覧表で通過者のチェック。
 - (3) 生徒の救護、休憩、給水の補助。
 - (4) 後尾追行係到着後、前所出発人数、途中中止者数(氏名)、到着者数、当所中止者数(氏名)、前進者数を集計確認。次所・本部・後尾追行係へ連絡。
 - (5) 報告書、中止者一覧表の作成。
 - (6) 当所残留者(中止者、区間中止者)の帰甲指導。
7. 検印カードを提出させる場合
 - (1) 当所での中止者及び前進停止時刻以後の到着者は、検印カードに検印し、検印所名を記入して回収する。
 - (2) 到着制限時刻以後の到着者は、検印カードを提出させ、到着した検印所の上に「時間外」と書く。
 - (3) 途中中止で輸送されてきた場合は、検印カードを提出させ、カードの最後の検印の次の矢印の上に「途中中止」のスタンプを押す。
8. 後尾追行
 - (1) 男女それぞれ前進停止時刻前に出発した最後尾生徒を確認し、後尾追行の係りが追いつくまで追行する。
 - (2) 出発の際は前進者数を確認し、途中巡視係等に最後尾であることを連絡する。
 - (3) 追行にあたっては、安全歩行に注意する。
9. 救護検印所は、後尾追行係到着後、人員確認・報告・残留者の帰甲乗車完了後、残務整理をして撤収する。ただし、次の検印所へ最後尾者が到着し、人数の確認が終了するまでは連絡が確実に取れるようにしておく。
 - * 運搬依頼する物品は、持運びやすいように梱包すること。運搬依頼リストに変更のある場合は担当運搬班に連絡する。
10. 関係箇所にあいさつ、本部への最終連絡後、解散・帰甲する。
11. その他
 - (1) 先頭到着後ただちに、その旨を次所、次々所、本部に連絡する。
 - * 連絡先は事前に主任同志で確認しておく。
 - (2) 本部への連絡は次の通り
 - ア 救護検印所開設諸準備完了
 - イ 先頭到着
 - ウ 後尾係到着後人員確定
 - エ 撤収完了帰甲直前
 - オ その他必要に応じて

- (3) 各検印所からの回収バス並びに野辺山からの最終便(17:00発)までに残留生徒全員が乗車できるように指導する。
- (4) 原則として、回収バスを利用し緑が丘体育館前からは自力で帰宅させるが、それができない場合は、主任の判断でP車をお願いする。主任は、その旨を必ず本部に連絡する。
- (5) 何らかの理由で回収バスに乗車できない者がいた場合は、その旨を本部・バス乗車係・学校並びに家庭に連絡し、その者の所在を明確にし、1名は残留して対処する。
- (6) 各検印所の主任は、全員の生徒が回収バスに乗車した後、乗車人数を確認し、本部とバス乗車係に人数を報告する。

【区間指導係(巡視・拠点指導)】

担当区間を主任と一巡し、道路状況を把握する。拠点指導箇所、安全指導重点区間、指導方法等を確認し、安全歩行のための道路標示を適切に行なう。主な任務は次のとおりとする。

1. 各救護検印所を本拠とし、所定の区間の巡視を行い、歩行状況の監視と指導、事故発生防止と処置、救護連絡、道路標示の確認・維持等行なう。車には車旗等を付け、巡視車であることを明確にする。
2. 道路標示を必要とする箇所には、道路標示方法を参考に適切な表示を行ない、消えた箇所があればただちに補修する。
3. 途中中止の生徒を本拠の救護検印所へ輸送し、主任に引き渡す。
4. 検印所の前進停止時刻には検印所で待機し、後尾追行係が前進停止時刻までに到着しない場合は、後尾追行係に追い付かれるまで後尾を追行する。
5. 拠点指導係は、交通量の多い交差点・危険箇所・迷いやすい交差点等に駐在し、生徒通過の際の安全歩行の指導をする。
6. 信号機のある交差点では信号機に従い、信号機の無い交差点では、車を優先させ安全歩行を第一に指導する。
7. 危険な行為を発見した場合には、厳重に注意し、氏名・内容を主任に報告する。
8. 後尾追行係に出会った際に任務を打ち切り本拠に戻る。残務整理・撤収作業を応援し、主任の解散宣言後帰甲する。
9. 勤務終了後であっても他地域への移動応援は厳に慎むこと。

【全線巡視係】

1. 各救護検印所間の連絡を行ない、歩行指導等全線にわたって巡視する。
2. 別に巡視計画をたてる。
3. 各車には標識を付け、強行遠足用車両であることが明瞭となるようにする。
4. 各車には必要な備品(薬品類、ライト、石灰等)を携行していく。

【その他の係】

A: 男子集合出発係 B: 女子集合係 C: 女子出発係 D: 全線巡視係 E: 記録・撮影係
 F: 学校勤務 G: バス乗車・降車係 H: 運搬係

【その他】

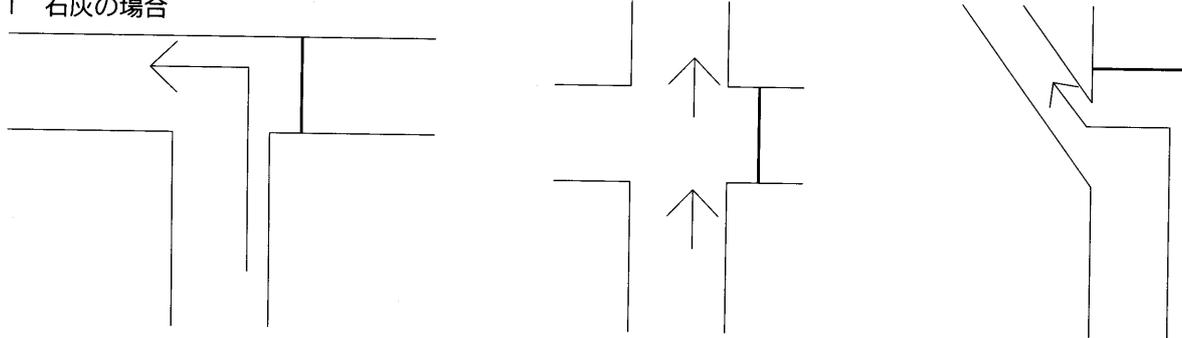
1. 登校日に各検印所主任は、回収した検印カードをクラス毎に分け、職員室の所定の机の上に置く。
 HRTはこれを持ってHRへ行き、一人一人の到達地点を確認し、出席簿に到達地点名を記入する。

その後、検印カードは生徒に返却する。

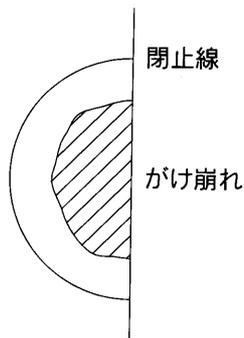
2. 報告書は必要事項を記入して、担当に、氏名票、氏名一覧表は係の指示した場所に返却する。
3. 薬品は保健室に、その他の物品は物品係が指定した場所に返却する。

道路表示などの方法

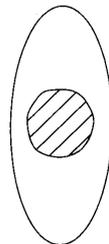
1 石灰の場合



◇道路脇の崖崩れ



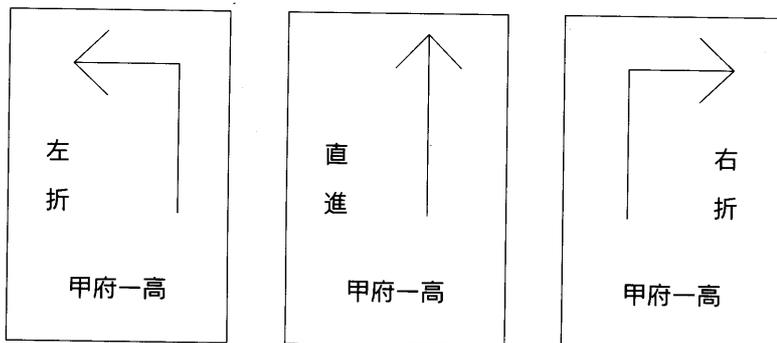
◇水溜まり又は穴



【備考】

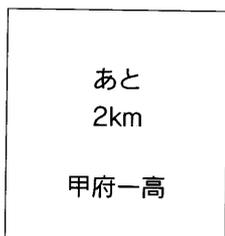
- (1) 閉止線は×を用いない。
- (2) 矢印は道路側方の消えにくい場所を書く。
- (3) 駐在指導員がない場所では特にわかりやすく書く。

2 表示板の場合



【備考】

- (1) 石灰で標示できない場所では立ち木、電柱、壁等利用して掲示板を掲げる。
- (2) 歩行してくる生徒から見えやすい位置に掲げる。
- (3) 終了後は取り外し持ち帰る。



【備考】

- 残り1km、2kmの垂れ幕を正しく設置する。
(車の走行距離メーターを使用し、次の検印所から1km及び2km戻ったところに設置する)

参加生徒に対する注意事項

* 交通事情が年々悪化し、工事箇所も多い、「自分の生命は、自分で守る」という心構えで参加するよう指導する。

1. 服装

- (1) 上下とも体育着(半袖、ハーフパンツ可)
- (2) 運動靴(履き慣れた物)

2. 携行品(下記の物は、全て必携です。上手に整理して、出しやすいようにしておく。)

- (1) 検印カード(出発時に渡してもらい、紐を通す。濡れない工夫をする。)
- (2) 氏名票(男子9枚。女子6枚)(しわにならないように。なくさない。落書きをしない。)
- (3) 食料(弁当(1~2食)、飴類、飲み物)
- (4) 防寒具・雨具
- (5) 着替え(ビニール袋に入れ濡れない工夫を。着替えたものは別のビニール袋に入れる。)
- (6) テイパック、ナップサック等バッグ類。
- (7) 生徒用実施要覧、地図、歩行計画表
- (8) 薬品(絆創膏、テーピングテープ、塗り薬等)

【注意】①携行品の(1)~(8)まで点検時になければスタートさせない。

②標高差1000m以上、50km余りの行程は、途中で天候の急変が起こり得る。天候の急変にも対処できる万全の準備をしておく。特に、男女とも寒さ対策としてウインドブレーカー・ジャンパー・手袋等を、雨対策としてポンチョ・カッパ等を必ず携行する。

3. 歩行について

- (1) 決められたコースを通過する。コースの事前研究をしておく。(距離表・コース略図参照、万が一コースを間違えた場合は、近くの検印所に電話する等、早めの対応をする。実施要覧を必ず持参する。)
- (2) 歩行計画を作成し、計画的に歩行する。(歩行計画立案図・通過時刻表参照)
- (3) 右側歩行(指定区間を除く)、一列歩行を厳守する。
- (4) 歩道がある区間は、必ず歩道を歩行する。
- (5) 信号等交通法規に従う。車優先に歩行する。
- (6) 交差点、見通しの悪い箇所では、安全を確認して歩行する。
*後半は体が思うように動かない。余裕を持って横断しなさい。
- (7) 迷いそうな場所には係員がいるので、その指示に従う。また、係員がいない場所には道路標示がしてあるので、それに従う。
- (8) 途中で具合の悪くなった時は、道路脇の目に付く所で休み、他の生徒や区間巡視の方、また、通行人に連絡してもらい救護を受ける。
- (9) 途中で雨になっても、本部の指示があるまで続行する。
- (10) コースを間違えたり、検印漏れや不正があると失格となる。
- (11) 履き慣れた運動靴を使用する。

4. 帰甲乗車について

各検印所より貸し切りバスに乗車して、帰甲する。バスの下車は、緑が丘県営体育館前の駐車場とする。到着後は直ちに帰宅する。

5. 実施の有無について

(次頁、「強行遠足中止時の要項」及び「強行遠足に関するラジオ放送」参照)

強行遠足に関するラジオ放送を聞いて行動する。急に悪天候になった場合、クラス緊急連絡を通じて連絡する。

*学校、放送局に問い合わせをしてはならない。

6. その他

(1) 強行遠足の意義は、「自分の力で」「自分の責任で」参加することにある。便利な世の中であるが、あえて便利なものを利用しないで「自分だけの力」でどこまでできるか挑戦する。

また、「安全策一」を考えて参加する。

① スタートからゴール・帰宅まで想定し、必要なものはすべて自分で背負っていく。

② お金に頼らない。救護検印所は、給水のみ、他を期待しない。

③ ただし、具合の悪いものは遠慮せず申し出て処置を受ける。

* 各救護検印所には医師か看護師が待機している。

(2) 気温の変化に応じた適切な服装で歩行する。

① 半袖の体育着の上に長袖の体育着を着用し、気温の変化に応じて変えていく。

② 天候の急変にも対処できる準備をしておく。

(3) 力を出し切るために

① オーバーペースに注意する。歩行計画作成資料を参考に目標到達地点(時刻)から割り出した自己のペースを守る。

② エネルギーの補給を計画的に行なう。

* 歩行計画に食事場所(時間)を組み入れ、計画的にエネルギーを補給する。

③ 休みすぎない。

(4) 甲府一高強行遠足に参加する上での「自分の責任」を果たす。

* ゴミの投げ捨て、食べ歩き、落書、だらしない服装等疲れている中であっても、行動には十分注意する。

(5) 集合時刻に遅れない。

* 人員点呼時刻4時30分(男子)・バス出発前点呼時刻5時45分(女子)に遅刻した者の参加認めない。

(6) 10月16日(月)9:30までに登校する。

* 10時00分からの「終了宣言」により第80回強行遠足は終了する。

強行遠足中止時の要項

1. 前日に悪天候が予想されるとき

(1) 判定委員は中止と決定したら速やかに職員連絡網により全職員に、連絡する。

* 学校は休業とする。

(2) 関係機関には、職員が分担して確実に連絡する。

2. 当日に悪天候となった場合

(1) 夜中、急に悪変した時

● 判定委員は午前0時00分に会合し、実施の可否を決定する。

● 中止の場合は、速やかに職員連絡網により全職員に、クラス担任はクラス連絡網により全生徒に連絡する。

● 多数の生徒の登校も考えられるので、教室を開放し、帰宅の安全と翌日への指導を徹底する。

* 当日は休業日として扱う。

● 関係機関への連絡を徹底する。

(2) スタート後、途中中止が必要となった時

- 本部で各救護検印所などから情報を取捨し校長・教頭・本部で協議し、途中中止を決定する。
- 本部(教頭から)より、各救護検印所に緊急の連絡を取り、善処にあたる。
- 関係機関にも密接な連絡をとるとともに、生徒回収の方策をたてる。
- 生徒輸送先は学校とする。

〈連絡方法〉

- 本部から各救護検印所及び学校勤務者に連絡し、学校勤務者は各先導、巡回車に連絡する。
- 各巡回車は歩いている生徒及び拠点指導にあたっている協力者に連絡し、協力者にはその区間の生徒が回収されるまで待っていてもらう。

〈生徒回収〉

- 男女最後尾車は各救護検印所間の最後尾の者から次の救護検印所へ移送する。
- バスは救護検印所で待機させる。

〈検印カードの回収〉

- 各救護検印所の主任が集計し、結果を本部に連絡する。
- 完走についての扱いは、終了後、本部で協議し、決定する。

強行遠足に関するラジオ放送(YBSラジオ)

【10月14日(土)】(YBSラジオ)765KHz

夕方 1回目(17:50~17:57)(山日ニュース)

- A 実施の場合「甲府一高の強行遠足は、明日計画どおり実施する予定です。」
- B 中止の場合「甲府一高の強行遠足は、明日は中止とし、本年は中止とします。」

夜 2回目(22:29~22:30)(番組終了後CM)

- C 実施の場合「甲府一高の強行遠足は、明日計画どおり実施します」
- D 中止の場合「甲府一高の強行遠足は、明日は中止とし、本年は中止とします。」

注意事項

1. 上記以外の指示はない。YBSラジオ放送どおりに行動すること。
2. YBSラジオ放送時間に変更がある場合には連絡をします。注意しなさい。
3. 放送局や学校に問い合わせの電話をしてはならない。
4. 出発してからの天候の急変時における行動は、最寄りの救護検印所の指示に従うこと。

強行遠足実施・中止の判定パターンとその後の対応

<p>17:00</p> <p>21:00</p> <p>0:00</p>	<p>実施</p> <p>実施</p> <p>実施</p> <p>実施</p>	<p>中止</p> <p>中止</p> <p>中止</p> <p>中止</p>	<p>実施</p> <p>中止</p> <p>中止</p> <p>中止</p>	<p>実施</p> <p>実施</p> <p>中止</p> <p>中止</p>
	<p>☆YBSへの連絡(進藤)</p> <p>○判定委員は第2報判定情報収集</p>	<p>☆中止判定が出したい職員最終打合せ</p> <p>○関係機関への連絡(体育振興係)</p> <p>○医療関係者(鈴木、小野)</p> <p>○同窓会参加者(斉藤正)</p> <p>○PTA正副会長、保体正副会長(斉藤正)</p> <p>学校は休業</p>	<p>☆判定委員は中止決定後速やかに職員連絡網で全職員に連絡する。</p> <p>○関係機関への連絡(体育振興係)</p> <p>警察、バス業者など</p> <p>○医療関係者(鈴木、小野)</p> <p>○同窓会参加者(斉藤正)</p> <p>○PTA正副会長(斉藤正)</p> <p>学校は休業</p>	<p>☆判定委員は0:00に会合し、実施の可否を決定する。中止決定後速やかに職員連絡網で全職員に連絡する。担任はクラス連絡網で連絡。</p> <p>☆多数の生徒の登校も考えられるので、教室を開放し、帰宅の安全と翌日への指導を徹底する。</p> <p>○関係機関への連絡(体育振興係)</p> <p>警察、バス業者など</p> <p>○医療関係者(鈴木、小野)</p> <p>○同窓会参加者(斉藤正)</p> <p>○PTA正副会長、保体正副会長(斉藤正)</p> <p>学校は休業</p>
<p>5:00</p>	<p>スタート時中止</p>	<p>☆本部で各救護検印所などから情報を収拾し、校長、教頭本部で協議し、途中中止を校長決定する</p> <p>☆本部(教頭から)より各救護検印所に緊急の連絡を取り、善処にあたる。</p> <p>☆関係機関にも密接な連絡をとるとともに、生徒回収の方策をたてる。</p> <p>☆生徒輸送は学校とする。</p>		

勤務地別人員一覧表

記号	勤務場所	勤務場所着時刻	人数	記号	勤務場所	勤務場所着時刻	人数
0の1	美和田旅館南(左折)	4:50	2	0の20	敷島総合文化会館入口(直進)	5:10	3
0の2	緑が丘接骨院南(横断)	4:50	2	0の21	敷島GS北(直進)	5:10	2
0の3	緑が丘運動公園線(横断)	4:50	3	0の22	敷島バス停東(直進)	5:10	2
0の4	甲府北中(右折)北東(左折)	4:50	2	0の23	登美の坂旧道入口(直進)	5:15	3
0の5	武蔵野入口(横断)	4:50	2	0の24	登美の坂旧道出口(直進)	5:15	2
0の6	湯村通り(横断)	5:00	2	0の25	大屋敷手前T字路(直進)	5:15	2
0の7	富久川旅館北(右折)	5:00	3	0の26	高原団地入口(直進)	5:15	2
0の8	水道道千塚3丁目(横断)	5:00	2	0の27	竜地変則交差点(横断)	5:15	2
0の9	水道道千塚5丁目(横断)	5:00	2	0の28	関谷橋(直進)	5:15	2
0の10	水道道新藤商店南(横断)	5:00	2	0の29	竜地交差点(直進)	5:15	2
0の11	山宮上町バス停(横断)	5:05	2	0の30	下今井東(右折)	5:20	2
0の12	県道甲府昇仙峡線(横断)	5:05	2	0の31	下今井ガード下(給水)	5:20	2
0の13	甲府北西中手前(左折)	5:05	3	0の32	下今井交差点(右折)	5:20	2
0の14	八幡橋(直進、左側通行)	5:05	2	0の33	塩崎駅入口(直進)	5:20	2
0の15	敷島金属北(左折)	5:10	3	0の34	塩崎口(直進)	5:20	2
0の16	敷島金属西(右折、横断、南進)	5:10	2	0の35	双葉西小(直進)	5:20	2
0の17	敷島中入口(直進)	5:10	2	0の36	宇津谷(未歩道区間指導)	5:20	2
0の18	敷島西町交差点(右折)	5:10	3	0の37	田畑交差点(直進)	5:20	2
0の19	敷島西(直進)	5:10	2				81

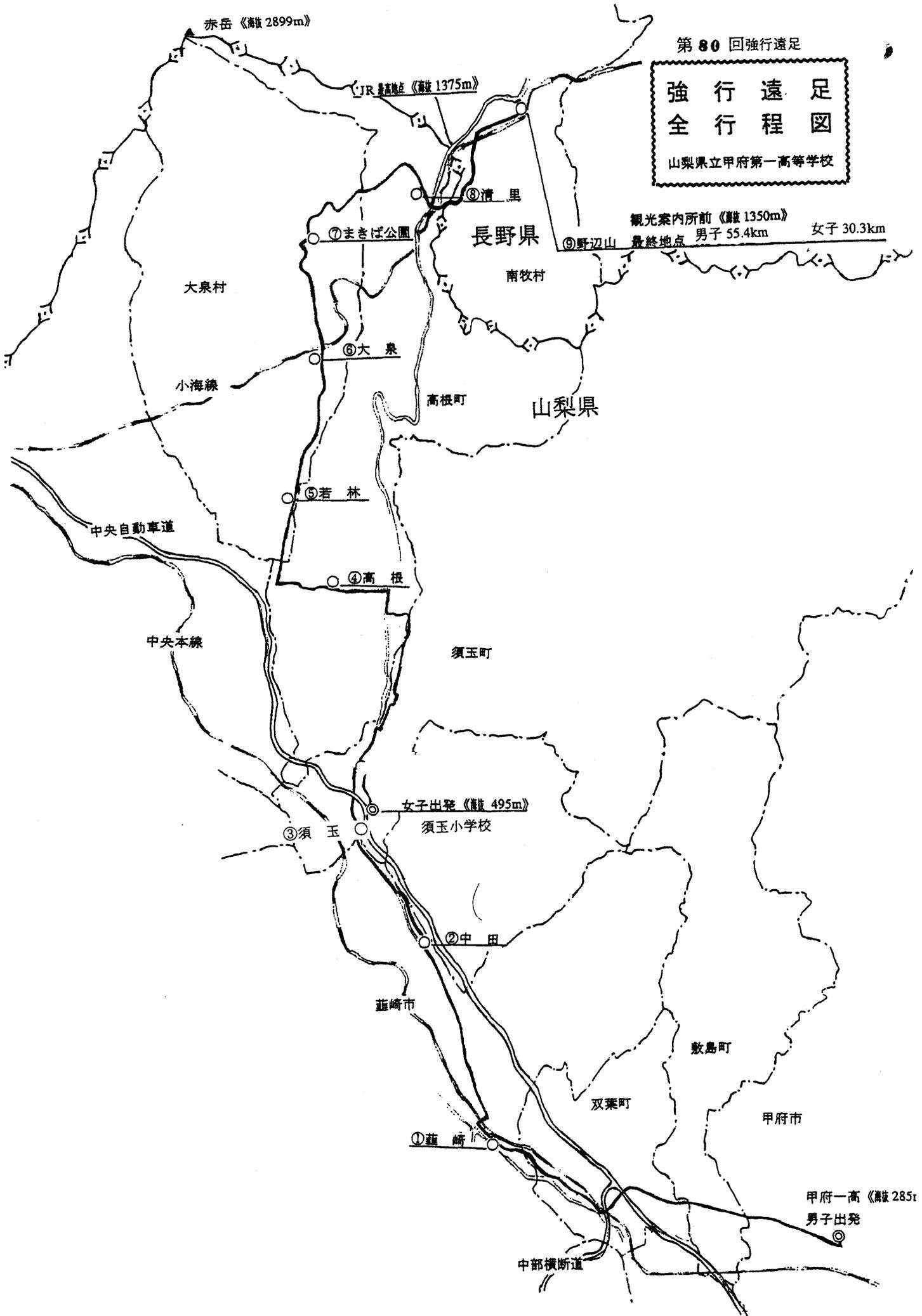
記号	係名	所属	係職員氏名 ():兼務 ◎:責任者 ○:主任	職	P	医	看	同
A	男子集合出発係		◎高瀬校長(D)・奥田教頭(本部+C)・神津教頭(C+4) 花輪事務長(D)・平賀(D) ○川崎(F)・小林欣(B+C+D)・花輪(D)・穎川(C+4) 丸山衛(B+F)・中澤(D)・井上(B+C+G)	11				
B	女子集合		○川崎(A+F)・小林欣(A+C+D)・斉藤(G)・柳沢(C+G) 井上(A+C+G)・丸山衛(A+F)	6				
C	女子出発		◎神津教頭(A+4)・○小林欣(A+B+D)・穎川(A+4) 小宮山(4)・石井(4)・藤巻(3)・柳沢(B+G) 井上(A+B+G)・同窓	8				
D	全線巡視		◎高瀬校長-○花輪(A)・花輪事務長-平賀(A) 小林欣(A+B+C)・中澤(A)同2名・中島勲(C)同2名	7	7			6
1の1	田畑~葦崎インター西間指導	葦崎	葦崎インター西交差点まで		29		2	
1	葦崎救護検印所		○浅川(G)・藤森(9)・能美(G)・渡邊浩(G)	4				
2の1	葦崎インター西~小田川間指導	中田	小田川国道合流点		25	1	2	
2	中田救護検印所		○鈴木(G)・山名(G)・鶴田恵(G)・風間(G)	4				
3の1	小田川~二日市場指導	須玉	二日市場農道出口まで		30			
3	須玉救護検印所		○高橋(H)・藤巻(C+H)・古畑(H)・矢崎(H)	4		1	2	
4の1	二日市場~五町田上間指導	高根	五町田上まで		53			
4	高根救護検印所		◎神津教頭(C)・○松島・小野・若尾・小宮山(C)・石井(C)	6		1	2	
5の1	五丁田上~油川間指導	若林	油川バス停まで		30			
5	若林救護検印所		○湯泉・長田・戸澤・千野	4		1	2	
6の1	油川~大開間指導	大泉	大開・天女山荘まで		30			
6	大泉救護検印所		○望月學・加藤・小林理・秋山	4		1	2	
7の1	大開~清泉寮入口間指導	まきば	清泉寮入口まで		24			
7	まきば公園救護検印所		○衣田・奥水・飯島・川邊・曲淵	5		1	2	
8の1	清泉寮入口~学校寮間指導	清里	国道141号合流地点;学校寮入口交差点まで		26			
8	清里救護検印所		○古屋・小泉・猪又・田中・AET	5		1	2	
9の1	学校寮入口~野辺山間指導	野辺山	野辺山ゴール先;旧野辺山観光案内所まで		35			
9	野辺山救護検印所		○伊神・須藤・日野原・石原・中島奈・西川・藤森(1)	7		2	2	4
	本部		◎奥田教頭(A+C)○進藤・鶴田	3				
E	記録撮影	/	○望月祐・根津・有泉	3				
F	学校勤務	/	○川崎(A+B)・丸山衛(A+B)	2				
G	バス乗車・降車 野辺山バス乗車	/	○斉藤正(B)・柳沢(B+C)・井上(A+B+C) {浅川・能美・渡邊}(1)・{鈴木・山名・鶴田恵・風間}(2) ○斉藤章	10 1				
H	運搬班	/	○権太・望月光・大久保・萩原・三村	5				

第80回強行遠足

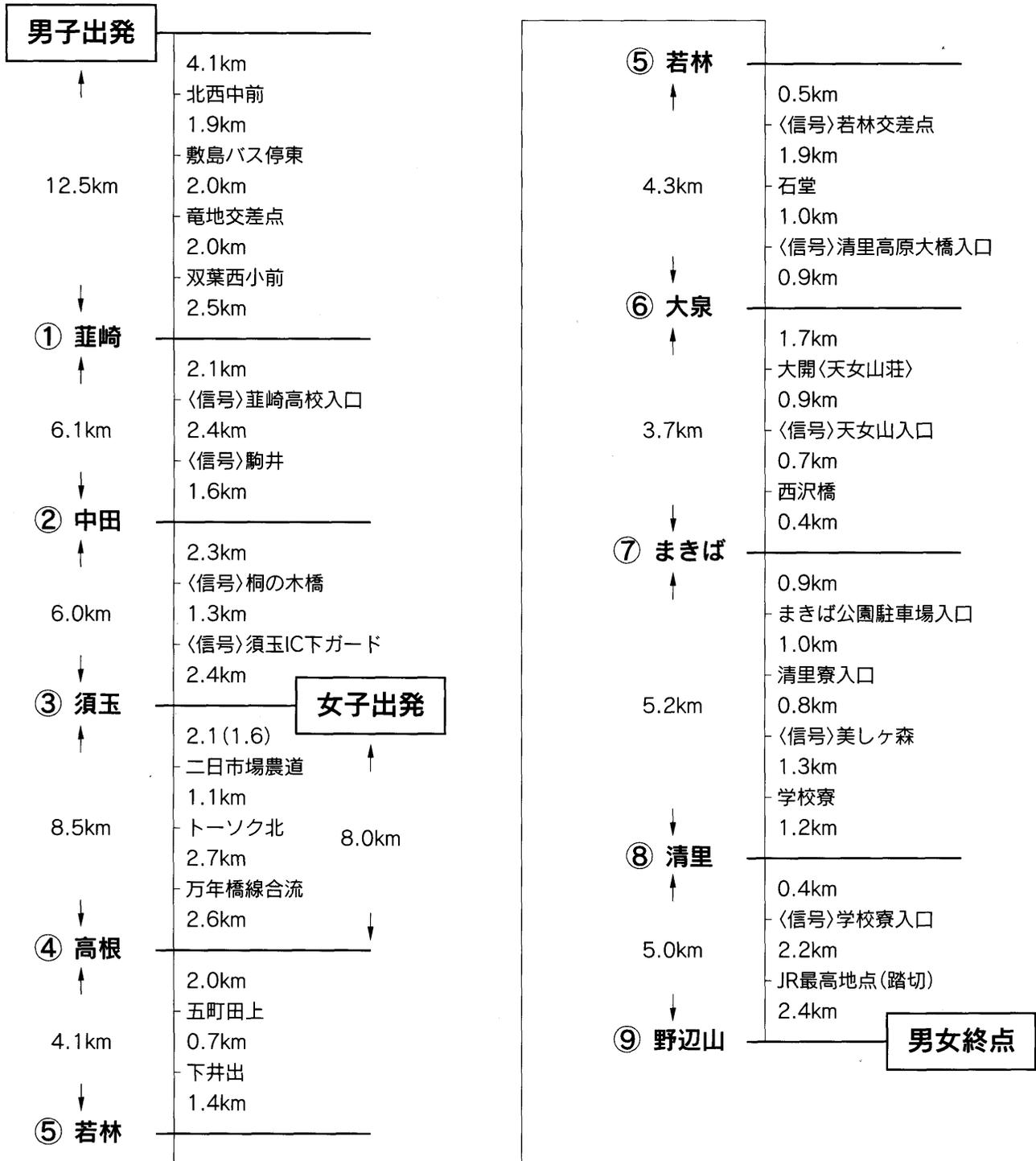
強行遠足
全行程図

山梨県立甲府第一高等学校

観光案内所前《海拔1350m》
最終地点 男子 55.4km 女子 30.3km



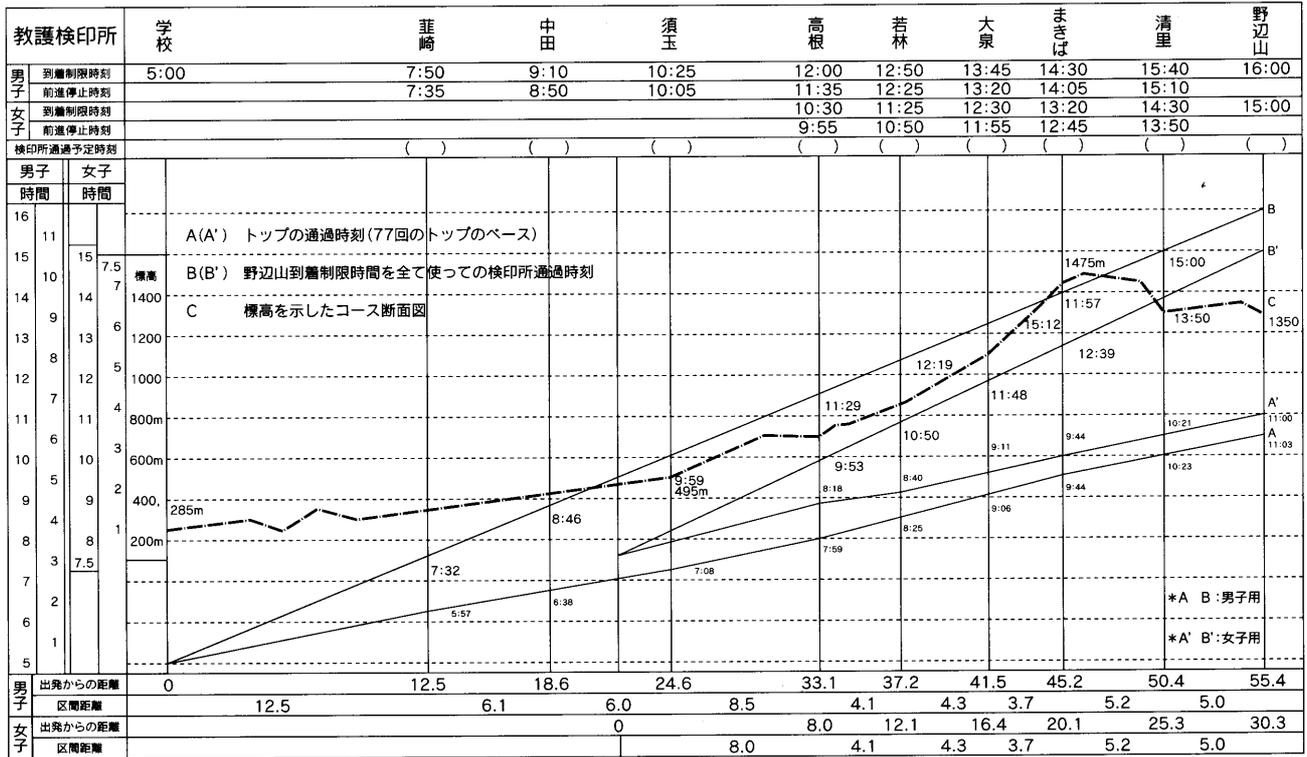
強行遠足区間距離表



全長 女子 30.3km

男子 55.4km

歩行計画立案参考図



編集後記

平成18年(2006)、甲府一高強行遠足は、第80回の節目の年を迎えることが出来ました。歴史をたどれば、その道のりは、決して平坦なものではなく幾多の困難の連続であったことがしのばれます。はかり知れないほどの多くの方々からのご協力により、今日まで続けられておりますことに、心より敬意を表し感謝申し上げます。

この強行遠足に参加した生徒たちが皆一様に感じるのは、自分への自信と学校への誇り、そして友情と人の温かさに触れることのできる素晴らしい行事であるということです。

江口校長は、「一切の妥協と怠慢とを排して、精根限り歩く」この精神に基づいて強行遠足を始められました。往時より現在にいたるまで、一高生、一人一人がその源流に向かって歩きつづけているからこそ、この行事が80回も連綿と続いているのだと思います。

にこやかに秋の陽を浴び十八里 (今村露外宗匠)

江口校長は六十歳にならんとする身で、生徒と共に毎年十八里を歩いて、上諏訪まで行かれるのを例とされていきました。強行遠足が続く限り、きっとその温顔に笑みをたたえながら、一高生を見守りつづけられていることでしょう。

(加藤 忍)

- 題 字 齋藤章
- 写真提供 大月市、松本市、木曾町観光協会、大町市観光協会、小諸市、ササモトスタジオ

第80回強行遠足記念誌 『歩け、精根のかぎり』

平成19年(2007年)3月1日発行
編 集 山梨県立甲府第一高等学校
発 行 第80回強行遠足記念誌編集委員会
編集委員 加藤忍・斉藤正敏・進藤和弥・齋藤章・大西勉

〒400-0007 山梨県甲府市美咲二丁目13-44
電話 055-253-3525
印刷所 (株)葉袋印刷所

